

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書 3

－袖ヶ浦市猪尻遺跡－

平成17年10月

国 土 交 通 省

財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書 3

—袖ヶ浦市^{いのじり}猪尻遺跡—





SI001 貯藏穴内一括出土土器



方墳系墳墓・火葬墓より出土した骨蔵器

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第526集として、国土交通省の首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴って実施した木更津市猪尻遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代から奈良時代に及ぶ遺構が検出されていますが、とりわけ奈良時代の墓跡は葬制の移り変わりを知るうえで貴重な成果が得られました。この報告書が、学術資料として、また、学校教育等の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成17年10月28日

財団法人千葉県教育振興財団
理事長 佐藤健太郎

凡 例

- 1 本書は、国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県袖ヶ浦市上宮田字猪尻221-2に所在する猪尻遺跡（遺跡コード229-032）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、国土交通省の委託を受け、財団法人千葉県文化財センター（平成17年9月1日付で財団法人千葉県教育振興財団と名称変更）が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、第1章第2節を上席研究員 竹内久美子が行ったほかは、上席研究員 小高春雄が担当した。
- 6 出土人骨については、独立行政法人国立科学博物館 梶ヶ山真里氏の肉眼による観察結果を小高が記載した。
- 7 礫群石材の石質の鑑定については、千葉県立中央博物館 高橋直樹氏より御指導いただいた。
- 8 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、袖ヶ浦市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 9 本書で使用した地形図は、次のとおりである。
 - 第1図 国土地理院平成6年発行1:50,000「姉崎」(N1-54-19-16)・平成10年発行「木更津」(N1-54-25-4)合成
 - 第2図 袖ヶ浦市平成11年発行1:2,500地形図 (No45)
 - 第4図 国土地理院昭和58年発行1:25,000地形図「上総横田」(N1-54-19-16-4)
 - 第55図 袖ヶ浦市平成11年発行1:2,500地形図 (No41, No45) 縮小合成
- 10 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和46年撮影のものを使用した。
- 11 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。測量値については日本測地系を使用した。
- 12 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、原則として図中に凡例（住居跡については第23図内に一括）を表記した。
- 13 遺物実測図の土器断面黒塗りには須恵器を表す。

本文目次

| | | |
|-----|--------------|----|
| 第1章 | はじめに | 1 |
| 第1節 | 調査の概要 | 1 |
| 1 | 調査に至る経緯 | 1 |
| 2 | 圏央道関係遺跡の調査概要 | 1 |
| 3 | 調査の経過 | 3 |
| 4 | 調査の方法 | 3 |
| | (1) グリッドの設定 | 3 |
| | (2) 確認調査と方法 | 3 |
| | (3) 基本土層 | 6 |
| 第2節 | 遺跡の位置と環境 | 6 |
| 第2章 | 検出された遺構と遺物 | 10 |
| 第1節 | 旧石器時代 | 10 |
| 第2節 | 縄文時代 | 12 |
| 1 | 礫群及び遺物包含層 | 12 |
| 2 | 炉穴及び土坑 | 13 |
| 3 | 出土遺物 | 22 |
| 第3節 | 古墳時代 | 32 |
| 1 | 住居跡 | 32 |
| 2 | 土坑 | 48 |
| 第4節 | 奈良時代 | 49 |
| 1 | 方墳系墳墓・円墳系墳墓 | 49 |
| 2 | 火葬墓 | 66 |
| 第5節 | 時期不明の遺構 | 68 |
| 第6節 | 遺構に伴わない遺物 | 72 |
| 第3章 | まとめ | 73 |
| 第1節 | 縄文時代の礫群について | 73 |
| 第2節 | 古墳時代の集落について | 76 |
| 第3節 | 奈良時代の墓制について | 76 |
| 付章 | 遺物属性表 | 86 |
| | 報告書抄録 | 巻末 |

挿図目次

| | |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| 第1図 圏央道調査遺跡（木更津・袖ヶ浦両市内）……………2 | 第30図 SI004……………43 |
| 第2図 猪尻遺跡……………4 | 第31図 SI004出土遺物……………44 |
| 第3図 遺構分布とグリッド配置……………5 | 第32図 SI006及び出土遺物……………45 |
| 第4図 猪尻遺跡と周辺遺跡分布図……………7 | 第33図 SI007……………46 |
| 第5図 旧石器時代遺物出土状況と土層セクション……………10 | 第34図 SI007出土遺物……………47 |
| 第6図 旧石器時代の石器……………11 | 第35図 古墳時代の土坑……………48 |
| 第7図 旧石器時代確認グリッド配置状況と遺物出土地点……………12 | 第36図 奈良時代の遺構分布……………49 |
| 第8図 縄文土器・礫出土状況……………13 | 第37図 SM001及び出土遺物……………50 |
| 第9図 縄文時代の遺構分布……………14 | 第38図 SM002・SM003……………51 |
| 第10図 縄文時代の土坑（1）……………15 | 第39図 SM004及び出土遺物……………53 |
| 第11図 縄文時代の土坑（2）……………17 | 第40図 SM005及び出土遺物……………55 |
| 第12図 縄文時代の土坑（3）……………19 | 第41図 SM006……………57 |
| 第13図 縄文時代の土坑（4）……………21 | 第42図 SM007……………58 |
| 第14図 縄文時代の土坑（5）……………23 | 第43図 SM008……………59 |
| 第15図 縄文土器（1）……………23 | 第44図 SM008出土遺物……………61 |
| 第16図 縄文土器（2）……………25 | 第45図 SM009出土遺物……………61 |
| 第17図 縄文土器（3）……………26 | 第46図 SM010……………63 |
| 第18図 縄文土器（4）・土製品……………28 | 第47図 SM011及び出土遺物……………64 |
| 第19図 縄文時代の石器（1）……………29 | 第48図 SM012……………65 |
| 第20図 縄文時代の石器（2）……………30 | 第49図 SM013・SM014……………67 |
| 第21図 縄文時代の石器（3）……………31 | 第50図 火葬墓及び出土遺物……………69 |
| 第22図 古墳時代の遺構分布……………32 | 第51図 グリッド出土の骨蔵器……………70 |
| 第23図 SI001……………33 | 第52図 時期不明の土坑……………71 |
| 第24図 SI001出土遺物（1）……………35 | 第53図 遺構外の出土遺物……………72 |
| 第25図 SI001出土遺物（2）……………36 | 第54図 礫群大きさ別・石材別・地点別グラフ……………75 |
| 第26図 SI002……………37 | 第55図 猪尻遺跡周辺の調査状況と奈良時代墳墓検出状況……………80 |
| 第27図 SI003……………39 | 第56図 周辺遺跡出土骨蔵器一覧……………82 |
| 第28図 SI003・SI005……………41 | 第57図 房総に於ける奈良時代方墳系墳墓の地域性……………83 |
| 第29図 SI003・SI005出土遺物……………42 | |

表 目 次

| | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 第1表 旧石器時代石器属性表……………86 | 第5表 遺跡出土焼成礫の大きさ別表……………91・92 |
| 第2表 縄文時代出土石器属性表……………86 | 第6表 礫層採集礫組成表……………92 |
| 第3表 礫組成表……………87・88 | 第7表 土師器・須恵器観察表……………93 |
| 第4表 遺跡出土完形礫の大きさ別表……………89・90 | |

図 版 目 次

| | |
|---|---------------------------------|
| 巻頭図版 SI001貯蔵穴内一括出土土器／方墳系墳墓・火葬墓より出土した骨蔵器 | 図版19 方墳系墳墓（8）・円墳系墳墓 |
| 図版1 遺跡周辺空中写真 | 図版20 火葬墓及び遺物出土状況 |
| 図版2 調査前の状況と確認調査 | 図版21 時期不明の土坑と旧石器時代の遺物 |
| 図版3 ローム層断面と縄文時代の土坑（1） | 図版22 縄文時代の石器（1） |
| 図版4 縄文時代の土坑（2） | 図版23 縄文時代の石器（2） |
| 図版5 縄文時代の土坑（3） | 図版24 縄文時代の石器（3）・石製品 |
| 図版6 縄文時代の土坑（4） | 図版25 縄文土器（早期撚糸文系土器） |
| 図版7 住居跡（SI001） | 図版26 縄文土器（早期沈線文系土器） |
| 図版8 住居跡（SI002, SI003, SI005） | 図版27 縄文土器（早期条痕文系土器） |
| 図版9 住居跡（SI003, SI005, SI004） | 図版28 縄文土器（中期・後期）・土製品 |
| 図版10 住居跡（SI006, SI007） | 図版29 縄文時代礫群石質別・被熱別・破損状況別集合写真（1） |
| 図版11 住居跡（SI007）及び土坑 | 図版30 縄文時代礫群石質別・被熱別・破損状況別集合写真（2） |
| 図版12 方墳系墳墓（1） | 図版31 SI001出土遺物（貯蔵穴内） |
| 図版13 方墳系墳墓（2） | 図版32 SI001出土遺物／SI003, SI005出土遺物 |
| 図版14 方墳系墳墓（3） | 図版33 SI004～SI007出土遺物 |
| 図版15 方墳系墳墓（4） | 図版34 SM001～SM011出土遺物 |
| 図版16 方墳系墳墓（5） | 図版35 SK009ほか火葬墓と出土火葬骨／遺構に伴わない遺物 |
| 図版17 方墳系墳墓（6） | |
| 図版18 方墳系墳墓（7） | |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、都心から半径およそ40km～60kmの位置に計画された総延長約300kmに及ぶ環状の自動車専用道路である。事業地区内の埋蔵文化財の取扱いについては、関係諸機関と協議した結果、記録保存の措置を講ずることとなり、木更津JCTから東へ約25kmの区間については日本道路公団（現東日本高速道路株式会社）が事業主体となり、（財）君津都市文化財センターが発掘調査を実施し、それより東の区間については国土交通省が事業主体となり、（財）千葉県文化財センター（現財団法人千葉県教育振興財団）が発掘調査を実施することとなった。

2 圏央道関係遺跡の調査概要（第1図）

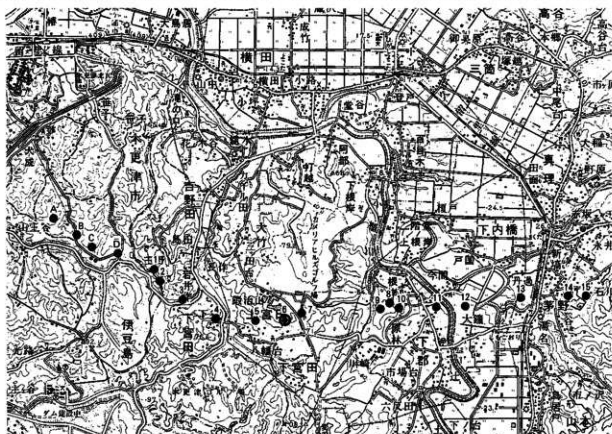
（財）千葉県文化財センター（現財団法人千葉県教育振興財団）による圏央道の発掘調査は平成13年3月より開始され、現在も継続中である。この間、調査された遺跡は15遺跡にのぼり、既に刊行された報告書は今回の報告書を加えて3冊である。概要については次のとおりであるが、ここでは平成16年度に調査を実施した長生郡管内での概要は除外した。なお、（財）君津都市文化財センターによって調査された木

| 遺 跡 名 | 調査年度 | 遺跡の種類・主な遺構 | 報告の有無 |
|----------------|-----------|---|------------------------------|
| 1 西御祈禱谷古墳群 | 平成13年度 | 塚8基 | 既刊（首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書1） |
| 2-1 新開1遺跡・ | 平成14・15年度 | 縄文時代早期包含層、弥生時代～古墳時代の集落跡、方形周溝状遺構1ほか | 同上 |
| 2-2 新開2遺跡 | | | 同上 |
| 3 南岩井作遺跡 | 平成14年度 | 中・近世掘立柱建物跡3ほか | 同上 |
| 4 下谷遺跡 | 平成15年度 | 奈良・平安時代集落跡ほか | 未刊 |
| 5 上宮田台遺跡 | 平成14・15年度 | 旧石器時代遺物集地点数カ所、縄文時代早期炉穴・竈群、後・晩期集落跡、古墳時代～奈良・平安時代集落跡、方形区画墓数基、中・近世台地整形遺構等 | 未刊 |
| 6 猪尻遺跡 | 平成15年 | 古墳時代集落跡、古墳時代～奈良時代墳墓群ほか | 今回報告（首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書3） |
| 7 林遺跡群 | 平成15年度 | 縄文時代早期の炉穴群、方形周溝状遺構3ほか | 未刊 |
| 8 上根岸館跡 | 平成14・15年度 | 遺構検出できず。 | 未刊 |
| 9 根岸小妻遺跡・根岸古墳群 | 平成14・15年度 | 弥生時代後期の方形周溝墓群、古墳群ほか | 未刊 |
| 10 重三台遺跡 | 平成14年度 | 中・近世井戸跡、岡ビット跡ほか | 未刊 |
| 11 沢岡2遺跡 | 平成14年度 | 中・近世溝跡ほか | 既刊（首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書2） |

| | | | | |
|----|----------|-----------|-------------------------------------|----------------------------|
| 12 | 沢間1遺跡 | 平成12・15年度 | 古墳時代掘立柱建物跡・畝跡、奈良・平安時代堅穴住居跡・畝跡ほか | 既刊（首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書2） |
| 13 | 丹過遺跡 | 平成14・15年度 | 弥生時代後期集落跡、奈良・平安時代掘立柱建物跡群、古墳時代前期方墳ほか | 未刊 |
| 14 | 内屋敷遺跡（1） | 平成15年度 | 縄文時代陥穴群、弥生時代～古墳時代の集落跡 | 未刊 |
| 15 | 内屋敷遺跡（2） | 平成15年度 | 弥生時代～古墳時代の集落跡、古墳群ほか | 未刊 |

<君津都市文化財センター調査分>

| | | | | |
|---|-------------------|-----------|--|------------------------------------|
| A | 野河遺跡 | 平成15年度 | 旧石器時代遺物集中地点、縄文時代早期集石土坑、奈良時代集落・方形区画墓 | 未刊 |
| B | 下野河遺跡 | 平成14・15年度 | 旧石器時代遺物集中地点、縄文時代早・前期包含層、奈良時代集落・方形区画墓 | 未刊 |
| C | 巡礼海道遺跡 | 平成15年度 | 溝状遺構 | 未刊 |
| D | 玉ノ谷遺跡 （蔵坪遺跡含む） | 平成14年度 | 旧石器時代遺物集中地点、縄文時代早期包含層、卯穴・集石土坑等、古墳時代～奈良時代の方墳、方形区画墓等 | 既刊（首都圏中央連絡自動車道（木更津～東金）埋蔵文化財調査報告書1） |



第1図 圏央道調査遺跡（木更津・袖ヶ浦両市内） 国土地理院1:50,000木更津・袖ヶ浦

更津市域内の4遺跡の概要についても記した。

3 調査の経過

猪尻遺跡の発掘調査は平成15年度に、確認調査と本調査を終了し、平成16年度に整理作業の一部、平成17年度に残りの整理作業と報告書の刊行を行った。発掘調査及び整理作業に関わる各年度の作業内容及び担当職員は次のとおりである。

(1) 発掘調査

平成15年度

期間 平成15年4月7日～平成15年12月25日

内容 確認調査 上層950㎡/9,500㎡, 下層488㎡/9,500㎡, 本調査 上層9,500㎡/9,500㎡

担当者 南部調査事務所長 鈴木定明, 上席研究員 稲生一夫

(2) 整理作業

平成16年度

期間 平成16年11月1日～平成17年3月31日

内容 水洗・注記～原稿執筆の一部

担当者 南部調査事務所長 高田 博, 上席研究員 竹内久美子 福田 誠 小高春雄

平成17年度

期間 平成17年4月1日～平成17年6月30日

内容 原稿執筆の一部～報告書刊行

担当者 南部調査事務所長 高田 博, 上席研究員 小高春雄

4 調査の方法(第2図, 第3図)

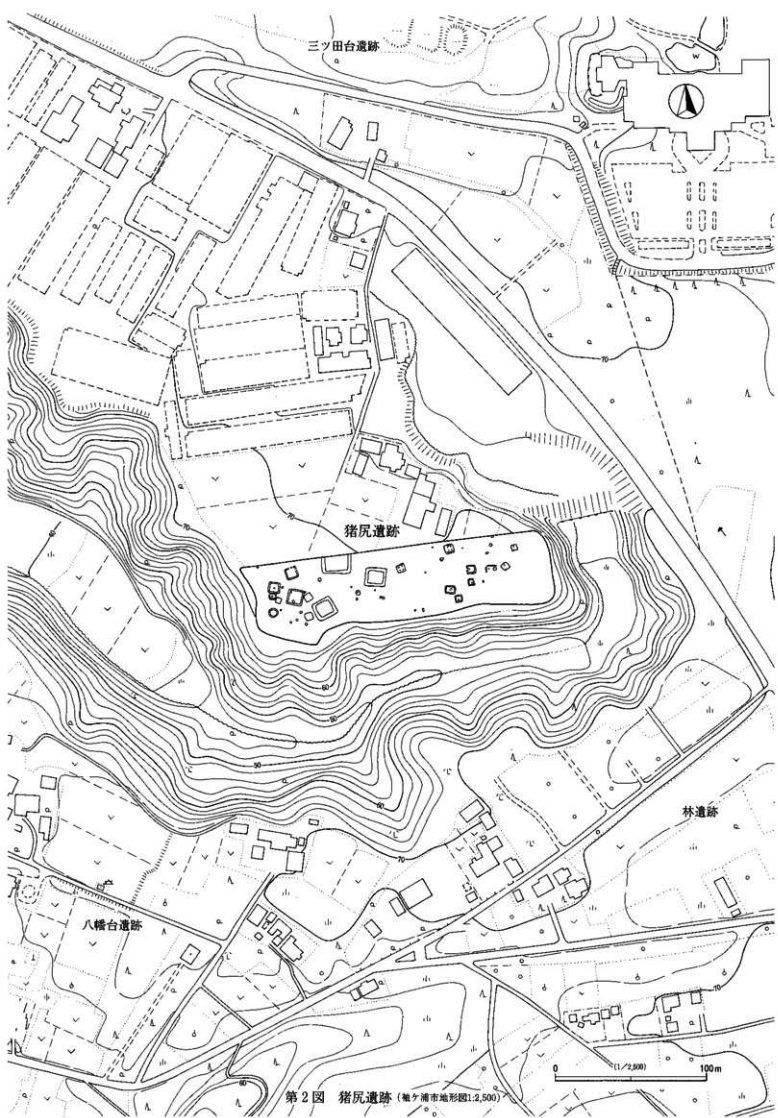
(1) グリッドの設定

調査開始に当たって、グリッドの設定を行った。まず、遺跡全体に公共座標の成果を基準とした20m方眼の大グリッドを設定し、座標北の北西端をG-7とし、以下、南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベット(IとOはアラビア数字と混同の恐れがあるので除外)でそれぞれ大グリッドの名称とした(東端はR-9)。大グリッド内は2m方眼で区画し、北西端から東西方向に順次番号を付した(例えばG7-00~99)。なお、北西端の大グリッドをG-7とした理由については、当遺跡の主体が調査区より北西にあると予想されることから、将来の調査での便宜を考慮したためである。

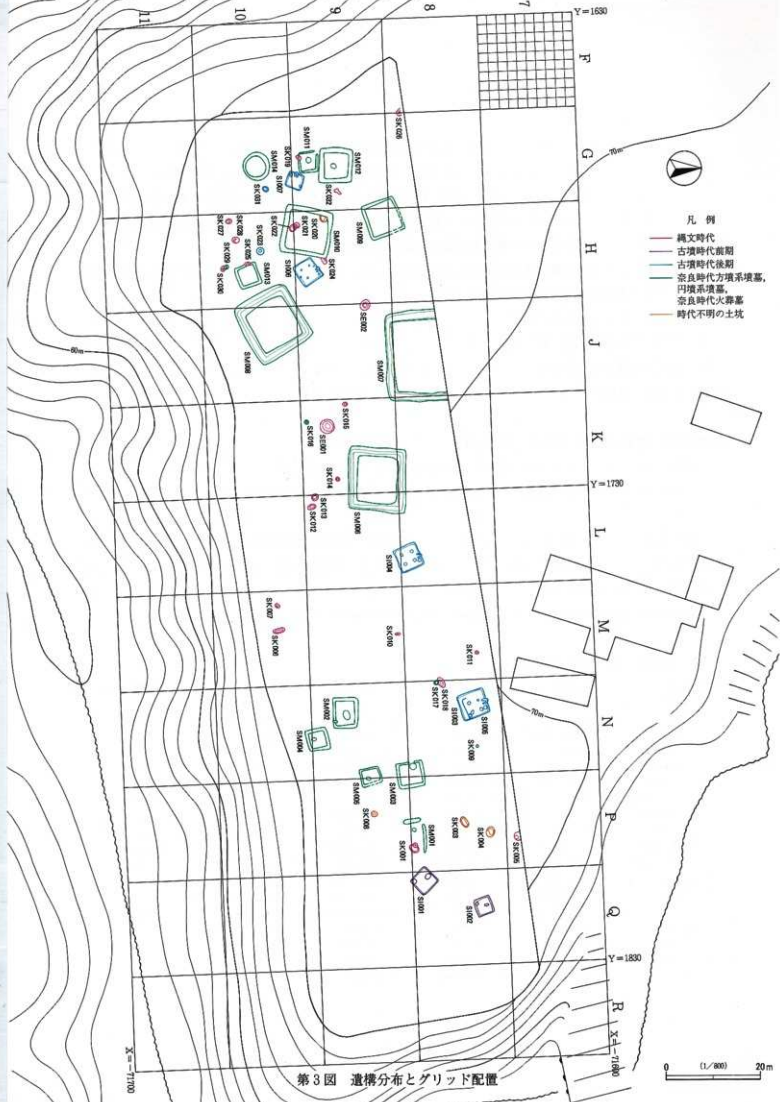
(2) 確認調査と方法

確認調査は平成15年4月より開始した。調査区全体に台地の方向(真北から約35°~50°の幅で東へ傾く)に合わせて2m×4mの確認トレンチを基本的に南北ないし東西に設定したが、トレンチの一部については例外もある。確認調査の結果、調査区全面にわたって古墳時代の住居跡、古墳時代～奈良時代の方墳系墳墓、多数の土坑などが検出されたため、調査区全体が本調査範囲となった。

なお、旧石器時代については2m×2mの確認グリッドを96か所(全体の約5%)設定して調査を実施した。その結果、調査区中央部において3か所から遺物が確認されたものの、遺物の広がり認められなかったことから、確認調査のみで終了した。



第2図 猪尻遺跡 (鎌ヶ浦市地形図1:2,500)



(3) 基本土層

遺跡の所在する台地は小櫃川の支流である鏈水川中流域の谷底平野から東へ入った谷奥にあり、浸食の少ない平坦面である。表土の堆積は厚く、耕作土を含む表面の黒色土層は約40cm～70cmに及んでいる。調査前の現況は畑地であり、戦後に至って入植・開墾したことが現地への聞き取りから明らかである。開墾の影響も当然あったであろうが、トンビ塚のみによるものということで、現況を大きく変えるものではなく、したがって、耕作土下の遺構及び遺物の保存状況は良好であった。

表土層下のⅡ層はⅡb層とⅡc層に細分される(第5図)。共に縄文時代の遺物包含層であるが、主体をなす早期の遺物との関係についてはⅡc層に多いというような傾向も確認できなかった。

Ⅲ層以下のローム層については、ソフトロームのⅢ層、橙色スコリアが特徴的なⅣ層、黒灰色スコリア・橙色スコリアを含むⅤ層(第1黒色帯相当だがⅣ層との違いは不明瞭)、AT(始良丹沢火山灰)を含むⅥ層、褐色のⅦ層(第2黒色帯)と、標準的な堆積状況を示す。但し、その層厚についてはこの地域の例に漏れずⅢ層～Ⅶ層まで約1mの厚さであり、上総北部とは様相を異にする。

第2節 遺跡の位置と環境(第4図)

清澄山を源とする小櫃川は東京湾に注ぐまでに、曲流・蛇行を繰り返しながら中流域から下流域にかけて「小櫃川低地」と呼ばれる広大な沖積平野を形成し、人々は周囲の台地や肥沃な平野を舞台に生活を営んできた。

猪尻遺跡(1)は、袖ヶ浦市上宮田字猪尻にあり、谷を隔てて南側は木更津市域となる。小櫃川支流の鏈水川右岸から500m東の標高70m前後の広い台地上に所在し、周囲は小櫃川とその支流によって房総丘陵が複雑に開析された地形となっている。近年、この地域は道路やゴルフ場などの建設が相次ぎ、それに伴う発掘調査が盛んに行われて、多くの遺跡の全貌が急速に明らかになりつつある。

<周辺遺跡名一覧：第4図と対応>

| | | | | | |
|--------------|------------|-----------|------------|--------------|--------------|
| 1 猪尻遺跡 | 10 塚の台遺跡 | 29 根岸横遺跡 | 48 羽黒下B遺跡 | 87 北谷塚 | 85-1 馬場作古墳群 |
| 2 大竹遺跡群(古墳群) | 11 堀糸遺跡 | 30 中谷台館址 | 49 岡台遺跡 | 88 赤坂台遺跡 | 85-2 米明石谷古墳群 |
| 2-a 尾張台遺跡 | 12 城山城跡 | 31 下野岸台遺跡 | 50 高台古墳群 | 89 久野ヶ原遺跡 | 85-3 灶木古墳群 |
| 2-b 内成原遺跡 | 13 水野横沢古墳群 | 32 矢ヶ作遺跡 | 51 門田遺跡 | 90 久野遺跡 | 86 大作古墳群 |
| 2-c 上又原遺跡 | 14 葛原遺跡 | 33 矢ヶ作古墳群 | 52 上ノ台遺跡 | 91 久ノ原遺跡 | 87 大作A古墳群 |
| 2-d 向神納屋遺跡 | 15 葛谷古墳群 | 34 向山遺跡 | 53 下野多山古墳群 | 92 大塚遺跡 | 88 大作B古墳群 |
| 2-e 京田遺跡 | 16 大竹長作古墳群 | 35 根岸古墳群 | 54 下野山崎遺跡 | 93 石仏遺跡 | 89 打越古墳群 |
| 2-f 三ッ台台遺跡 | 17 西谷遺跡 | 36 川名上原遺跡 | 55 橋台塚 | 94 ヒキリダイ遺跡 | 90 神古墳群 |
| 2-g 上馬原遺跡 | 18 大竹野 | 37 重三台遺跡 | 56 郡田谷古墳群 | 95 伊豆島貝塚 | 91 上谷密古墳群 |
| 2-h 狐谷遺跡 | 19 東下原遺跡 | 38 重三台古墳群 | 57 土都輪遺跡 | 96 大淵水遺跡 | 92 北口城跡 |
| 2-i 大竹古墳群 | 20 白旗古墳群 | 39 上根岸遺跡 | 58 南台古墳群 | 97 新開遺跡 | 93 熊野寺古墳群 |
| 2-j 下根岸古墳群 | 21 平ヶ作古墳群 | 40 根岸小舞遺跡 | 59 熊野古墳群 | 98 西野好神谷古墳群 | 94 結城台遺跡 |
| 3 上宮田台遺跡 | 22 打越台古墳群 | 41 山正台遺跡 | 60 熊野台古墳群 | 99 東野井作古墳群 | 95 正野遺跡 |
| 4 上宮田塚群 | 23 打越北原古墳群 | 42 石塚古墳群 | 61 西ノ根谷遺跡 | 100 南野井作遺跡 | 96 長寿寺塚群 |
| 5 上宮田台古墳群 | 24 谷塚古墳群 | 43 石塚塚群 | 62 西ノ根谷古墳群 | 101 滝ノ口内台古墳群 | 97 打越塚 |
| 6 林遺跡 | 25 高塚遺跡 | 44 沢間遺跡 | 63 南谷遺跡 | 102 滝ノ口内台古墳群 | |
| 7 八幡台遺跡 | 26 高塚塚群 | 45 上ノ山遺跡 | 64 南谷古墳群 | 103 鬼塚古墳群 | |
| 8 八幡台塚群 | 27 泉谷遺跡群 | 46 市場台遺跡 | 65 高塚遺跡 | 104 小坪塚跡 | |
| 9 久塚群 | 28 堂谷古墳群 | 47 羽黒下A遺跡 | 66 北谷遺跡 | 105 雙子古墳群 | |



第4図 猪尻遺跡と周辺遺跡分布図 (国土地理院1:25,000上総横田)

高天倉部
 草野
 木
 雨

本質思

旧石器時代の調査例はまだ少ないが、滝ノ口向台遺跡(81)をはじめ、猪尻遺跡に隣接する向神納里遺跡(2-d)では有舌尖頭器、上ノ山遺跡(45)ではⅡ層から礫群が、西ノ根谷遺跡(61)では関東ロームⅦ層から剥片が出土している。

縄文時代では、早期の炉穴が北谷遺跡(66)、上ノ山遺跡(45)で確認されている。前期では、二又堀遺跡(正しくは上又堀遺跡2-c)で花積下層期の住居跡が検出され、中・後期では、平成14～15年度に調査された対岸の上宮田台遺跡(3)で台地上全面に営まれた後期の大集落がまずあげられる。他に、嘉登遺跡(14)で土器片囲い炉、柄鏡形住居跡などが検出されており、貝塚(伊豆島貝塚:75)も確認されている。晩期では、上宮田台遺跡で台地中央部において該期の窪地状遺構が検出された。

弥生時代では、猪尻遺跡の周囲で多くの遺跡がみつかり、須和田期や宮ノ台期の調査例が特筆される。中期の住居跡が尾畑台遺跡(2-a)・炊田遺跡(2-e)・内出原遺跡(2-b)や根岸古墳群(35)で、大規模な方形周溝墓群が向神納里遺跡(2-d)や根岸古墳群(35)で検出されている。中・後期では、滝ノ口向台遺跡(81)で急斜面まで広く利用した集落の様相が明らかとなり、尾畑台遺跡(2-a)では後期の住居跡が検出されている。その他、方形周溝墓が山王台遺跡(41)、西ノ根谷遺跡(61)などで検出され、また、低地では小櫃川北岸にある芝野遺跡(95)の後期の水田跡が特筆される。

古墳時代では、古墳出現期の遺跡が多い。まず上又堀遺跡(2-c)の方墳群があげられるが、その北西に位置する滝ノ口向台古墳群(82)は千葉県最大であると想定される前方後方墳をはじめ、東海起源の埴形・副葬品を起源とする方墳が中心となっており、該期の様相を考えるうえで注目される。また、上又堀遺跡(2-c)では弥生時代後期から古墳時代前期に及ぶ集落跡が見つかり、

古墳時代前期では、猪尻遺跡の東南に隣接する林遺跡(6)で、前期後半の堅穴住居跡と方形周溝墓が検出されている。大竹遺跡群(2)でも、前期から中期にかけての堅穴住居群が遺跡群全体に広く認められ、上又堀遺跡(2-c)では重圓文鏡が前期の住居跡から出土した。また、向神納里遺跡(2-d)では引き続き前期の方形周溝墓も営まれている。しかし、中期後半以降から、大竹遺跡群(2)全体に生活痕跡がきわめて希薄になり、後期の集落はほとんど認められなくなっていく。隣の嘉登遺跡(14)でも前期の集落は検出されたが、それ以降の集落は確認されていない。

古墳時代中期に属する古墳は馬場作(85-1)・東明石谷(85-2)・梵木(85-3)・大作古墳群(86)他で確認されている。なお、特筆されるものとして、四留作古墳群では木棺部から鉄剣が出土し、また多量の朱も検出された。一方、大作古墳群(86)では矛が出土している。

古墳時代後期では、猪尻遺跡(1)周辺の丘陵上において古墳の造営が活発となる。古墳群は便宜上尾根筋ごとに名称が与えられているが、ほとんどが小櫃川の谷底平野に伸びる瘦せ尾根上に集中し、稜線を一列に埋め尽くしている状況である。埴形はほとんどが小型の円墳であるが、少数ながら小型の前方後円墳もある。いわゆる「後期群集墳」の一類型と捉えられよう。猪尻遺跡周辺では、笹子古墳群(85)、椿古墳群(90)、大作古墳群(86)、大竹古墳群(2-i)、鬼塚古墳群(83)、打越北上原古墳群(23)、平ヶ作古墳群(21)、嘉登古墳群(15)、根岸古墳群(35)などがあげられる。これらを合わせると、後期古墳の数は200基を超える。そのうち、大竹古墳群(2-i)からは県内で2例目、君津地域では唯一の円筒埴輪転用棺が、別の1基からは朱文鏡が出土している。また、林遺跡(6)からは後期方墳群の近くから円筒埴輪片が出土した。

なお、前方後円墳が確認されているのは、椿古墳群(90)の4基を始めとして、打越北上原古墳群(23)、平ヶ作古墳群(21)、大竹古墳群(2-i)、馬場作古墳群(85-1)などである。

古墳時代後期～終末期にかけての古墳は、櫛古墳群(90)、大竹古墳群(2-i)などがあげられるが、その数は減少し、主に南に延びる尾根の斜面上に築かれた方墳群が主体となる。

このように、猪尻遺跡周辺は一大古墳地帯といえることができるが、小櫃川下流域にある馬米田国造の系譜につながる首長墓と想定される中・後期前方後円墳を主体とした砥圓・長須賀古墳群と比べると、副葬品などを比べてもかなりの差が見られる。両者の関係を考えて興味深い。

奈良・平安時代では、集落跡の検出例は少ない。山王台遺跡(41)で奈良時代、筑田遺跡(2-e)で平安時代の住居跡が検出されている程度である。その一方、当時の墓跡は多くみられ、方形区画墓・火葬墓が石仏遺跡(73)、嘉登遺跡(14)、三ツ田台遺跡(2-f)・上又堀遺跡(2-c)などから検出された。特に林遺跡(6)からは火葬骨入りの骨蔵器に「千」の字を書いたものが出土している。また、小櫃川の自然堤防上に位置する沢間遺跡(44)からは古墳、奈良・平安時代の畑跡と平安時代の掘立柱建物跡が検出されている。特筆されるのは丹過遺跡である。庇付き大型掘立柱建物群や回廊状建物跡を含む約50棟の掘立柱建物群、倉と考えられる総柱建物、池跡などが検出され、奈良時代の官衙遺跡の可能性が高い。

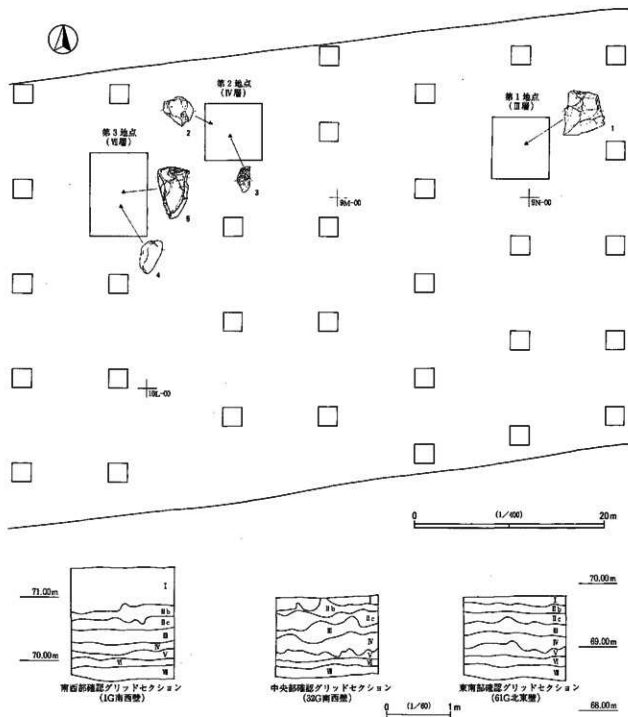
中・近世の遺跡としては、城・砦跡と塚があげられる。西方の笹子城では数回にわたる造替えの堀と質量共に豊富な遺物が出土している。また、大竹砦(18)は真里谷武田氏、上根岸館跡(39)は里見氏の拠点であったと伝えられている。塚は、八幡台塚群(8)、欠塚群(9)等が知られているが、未調査である。一方、北谷塚(67)、下部多山供養塚(53)では調査が行われた、後者は7世紀後半の円墳を再利用したものであった。

参考文献

1. (財)千葉県史料研究財団編 2004 『千葉県の歴史 資料編 考古2 弥生・古墳時代』 (財)千葉県史料研究財団
2. 小久貫隆史・高梨友子 2001 『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書8—袖ヶ浦市櫛古墳群—』 (財)千葉県文化財センター
3. 菅生 尚ほか 2001 『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書7—木更津市芝野遺跡—』 (財)千葉県文化財センター
4. 田形孝一ほか 1991 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』 (財)君津郡市文化財センター
5. 稲葉昭智ほか 1993 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』 (財)君津郡市文化財センター
6. 稲葉昭智ほか 1994 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』 (財)君津郡市文化財センター
7. 稲葉昭智ほか 1995 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』 (財)君津郡市文化財センター
8. 西原崇浩ほか 1994 『嘉登遺跡・大竹長作古墳群』 (財)君津郡市文化財センター
9. 能城秀喜ほか 1994 『林遺跡Ⅱ』 (財)君津郡市文化財センター
10. 中能 隆ほか 1999 『林遺跡Ⅲ』 (財)君津郡市文化財センター
11. 安藤道由ほか 1999 『櫛古墳群Ⅱ』 (財)君津郡市文化財センター
12. 浅野雅則・諸島知義ほか 2000 『山王台遺跡・内屋敷遺跡』 (財)君津郡市文化財センター

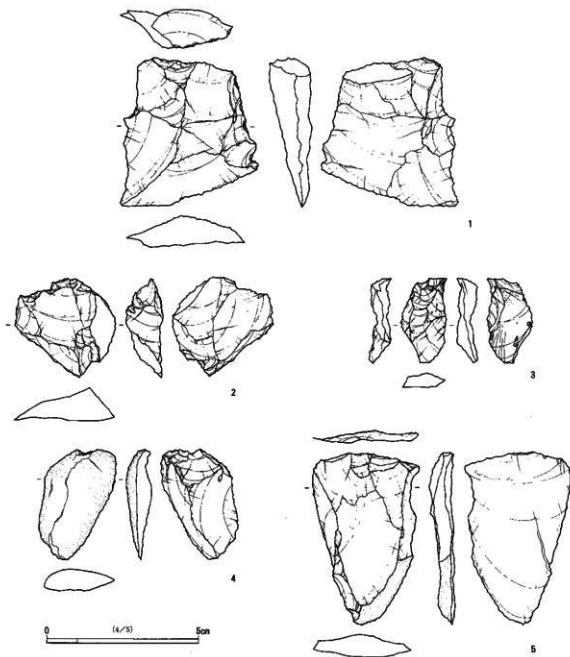
第2章 検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代

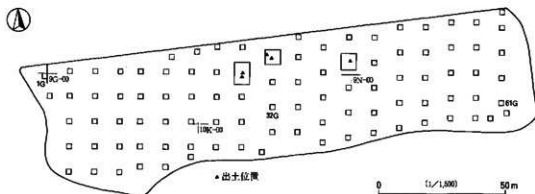


第5図 旧石器時代遺物出土状況と土層セクション (グリッド位置は第7図参照)

既に確認調査の項でふれているが、下層確認調査の過程で大きく3地点より旧石器時代の遺物が計5点出土している。調査区中央の8M-79, 8L-63・8L-64, 8K-98・9K-08である。便宜上これらをそれぞれ第1地点～第3地点と呼称する。その出土層位は第1地点がⅢ層, 第2地点がⅣ層, 第3地点がⅤ層と、それぞれ異なる。但し、第1・第2地点についてはほぼ同一の文化層と思われるので、結論として当遺跡では二つの時期の異なる文化層が多少離れて存在したとみてよい。以下、新しい文化層から順を追って説明する。



第6図 旧石器時代の石器



第7図 旧石器時代確認グリッド配置状況と遺物出土地点

1 第1・2地点(第6図, 図版21)

第1地点ではⅢ層中から出土した。石材は流紋岩である。第2地点ではⅣ層中から約2.4mの距離をおいて出土した。2, 3共に剥片であり, 石材は2がチャート, 3が黒曜石である。

2 第3地点(第6図, 図版21)

Ⅳ層中から約1.5mの距離を置いて出土した。4は自然面を残す剥片で, 石材はチャート, 5は縦長剥片で石材は流紋岩である。

第2節 縄文時代

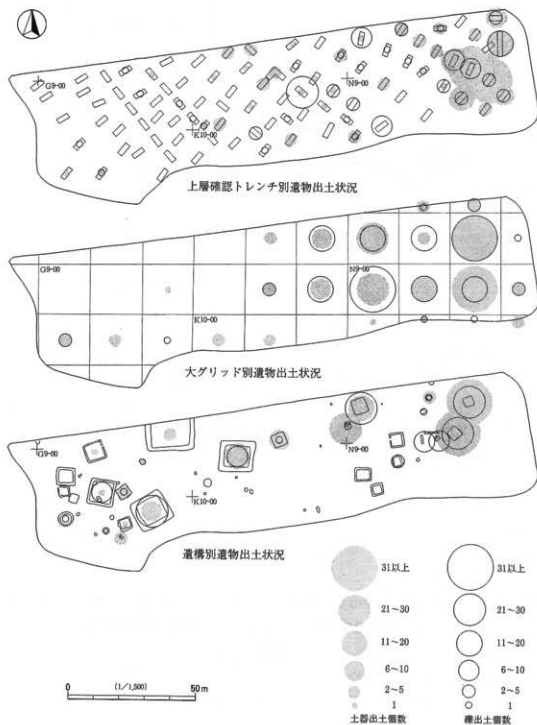
1 礫群及び遺物包含層(第8図)

いわゆる礫群については, 旧石器時代礫群との比較, それからとりわけ君津地域内に顕著なように, 大量かつ広範囲で明瞭な区切りのみられない状況を礫群と呼称するのが適当かどうかという問題がある。しかし, 後述するように, それは縄文時代でも旧石器時代から継続する時期のみにあるわけだから, 性格の変化及び地域性というように考えてここでは礫群として呼称しておく。

それはともかく, 当遺跡では上層確認調査及び遺構調査の過程で多くの礫が出土している。包含層ないし礫群としての調査は行っていないものの, 確認調査トレンチ, 大グリッド, 各遺構別の礫及び早期土器片の抽出は可能であり, そのデータから大要をつかむことは可能であった。

即ち, その最も集中する地点は8Q(第3図参照)からその周辺にまたがる台地東端部であり, 中央部でも数としては少ないが散発的に確認される。一方, その逆に西側ではほとんどなく, 対照的なあり方といえる。

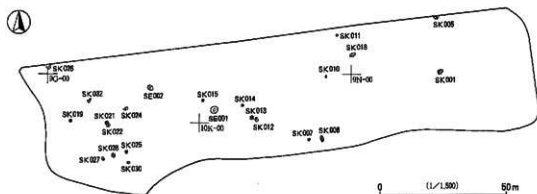
この礫群と縄文土器との関係であるが, 最もよく対応するのが早期撫糸文系土器である。沈線文系土器も対応するが, こちらはその西側も含めた, つまり台地東側に濃密な分布を示している。この点, 条痕文系も同様ながら, こちらは南側縁にはほとんどなく, 中・後期に至ってはまったく一致しない(台地西側を中心に散在する)。つまり, 礫群は撫糸文期また沈線文期に伴う可能性が高いのである。これは検出された炉穴が1基のみであった点や, 周辺の君津地域内の調査事例からしても妥当なところであろう。なお, 詳細については考察に譲る。



第8図 縄文土器・礫出土状況

2 炉穴及び土坑

縄文時代に属すると思われる遺構を次ぎにあげるが、炉穴や陥穴等この時代特有の遺構はともかく、遺物の出土がない場合、その時期決定はなかなか困難である。とりわけ、当遺跡のように後の時代に活用されている場合などは尚更である。それゆえ、覆土の状況を始め多面的に判断したがなお問題が無いわけではない。活用される場合はその点を考慮されたい。



第9図 縄文時代の遺構分布

炉穴

SK032 (第10図, 図版3)

立地 台地南西端に位置する。

形態・規模 形態はクラスター状で、規模は長径1.4m×短径0.6mである。火床部は3か所であり、最低3回の改変が考えられる。深さは現状で13cmである。

覆土 全体に焼土粒を含み、底面には焼土ブロックが火床部を中心に散らばった状況であった。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 特に無し。

陥穴状遺構

SK011 (第10図, 図版3)

立地 台地南側東寄りに位置する。

形態・規模 隅丸の長方形ながら、中位で円形となり、しかも斜めに深く掘り込まれている形状である。

規模は長径0.7m×短径0.5mで、深さは確認面より中位のテラスで70cm、坑底で130cmである。

覆土 底面までは暗褐色の土で、凹レンズ状の堆積状況である。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 縄文土器や縄文期の礫も出土しなかったが、形状などから縄文時代の陥穴と判断した。

SE001 (第10図, 図版3)

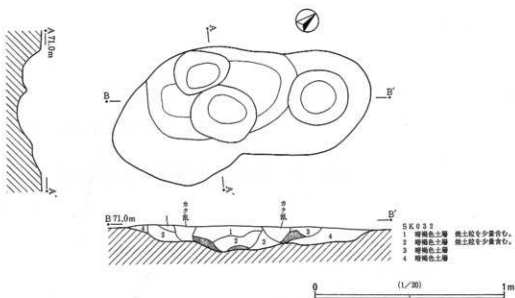
形態・規模 形態は上面プランが歪な楕円形、中位以下が卵形である。規模は上面で径3mほど、中位以下で、1.5m×1mほどである。深さは約1.6mまで掘り下げた状態で中止したため不明である。

覆土 褐色から暗褐色の土が凹レンズ状に堆積しており、ほぼ自然堆積と理解される。

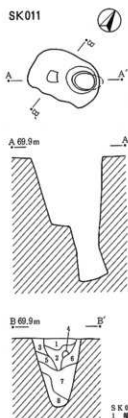
出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 当初井戸(SE)として調査したが、その形状等から縄文時代の陥穴と判断した。

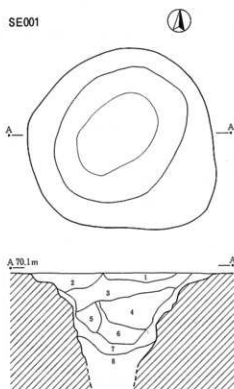
SK032



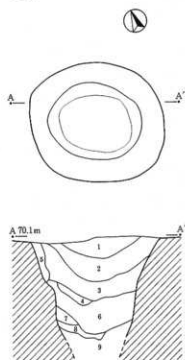
SK011



SE001



SE002



第10図 縄文時代の土坑 (1)

SE002 (第10図, 図版3)

立地 台地南西に位置する。

形態・規模 形態は楕円形, 規模は2.05m×1.85m, 深さは約1.6mである。断面形状は上膨らみの箱形である。

覆土 黒褐色から暗褐色の土が凹レンズ状に堆積しており, ほぼ自然堆積と理解される。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 当初井戸(SE)として調査したが, その形状等から縄文時代の陥穴と判断した。

土坑

SK001 (第11図, 図版4)

立地 台地東南に位置する。

形態・規模 小ピットを付設する。形態は楕円形で, 規模は長径1.9m以上×短径1.6mである。深さはピットの底で24cm, 浅いところで約20cmである。

覆土 凹レンズ状の堆積であり, 自然堆積と思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は後期縄文土器片が4点ほど出土した。

備考 SM001内にあることから, それ以降の所産とは思えず, 古墳時代が縄文時代に限定されよう。

SK005 (第11図, 図版4)

立地 台地東側に位置する。

形態・規模 北側が調査範囲外にある。それゆえ, 形態は不明ながら, 楕円形の可能性が高い。規模は長径1.7m (以上)×短径1.6mである。深さは深いところで50cm, 浅いところで, 約30cmである。なお, 底面に小ピットを付設する。断面形状は逆台形ながらピット部分はV字状となる。

覆土 褐色～黒褐色の土である。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 特に無し。

SK006 (第11図, 図版4)

立地 台地中央南端に位置する。

形態・規模 形態は細長い楕円形で, 規模は長径2.4m×短径0.8mである。深さは現状でほぼ20cmである。

覆土 褐色～暗褐色主体の土であり, 多少不均質ながら自然堆積の範疇であろう。

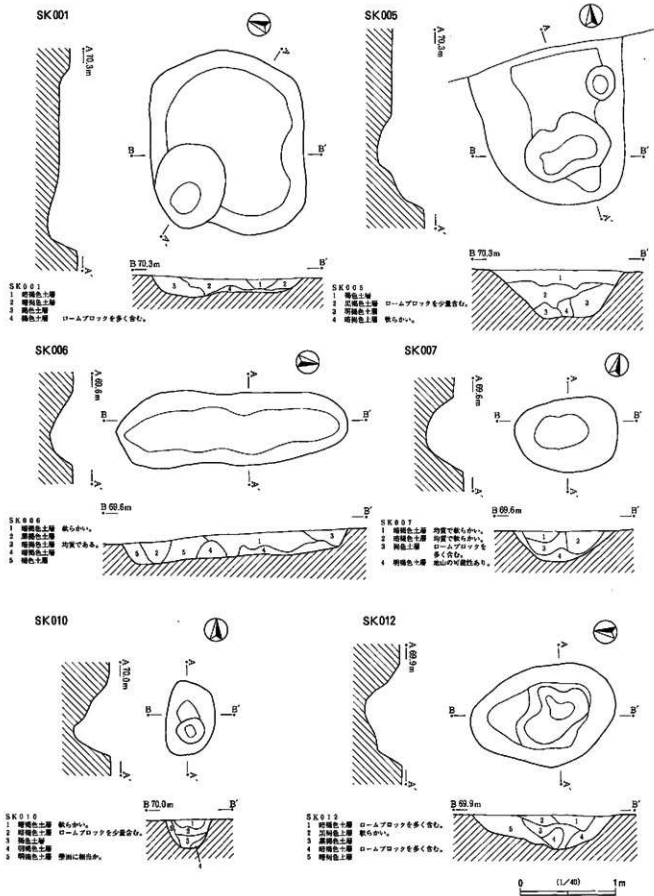
出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 一見縄文時代の陥穴に類似するが, やはり異なるものと考えられる。

SK007 (第11図, 図版4)

立地 台地中央南端に位置する。

形態・規模 形態は楕円形で, 規模は長径1.1m×短径0.8mである。深さは現状でほぼ34cmである。なお, 断面形態は碗形である。



第11図 縄文時代の土坑 (2)

覆土 凹レンズ状の堆積であり、自然堆積と思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 特に無し。

SK010 (第11図, 図版4)

立地 台地南東に位置する。

形態・規模 形態は楕円形で、規模は長径0.8m×短径0.5mである。深さは現状で36cmである。なお、底面は南側へ斜めに落ち込む形状で、通常と異なっている。

覆土 底面までほぼ暗褐色～黒褐色の土で占められていた。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。凹レンズ状の堆積であり、自然堆積と思われる。

備考 確証に欠けるが、縄文期の土坑と判断した。

SK012 (第11図, 図版4)

立地 台地南端中央に位置する。

形態・規模 形態は楕円形で、規模は長径1.45m×短径1.0mである。深さは現状で40cmである。底面は中央が円錐状に落ち込む形状となる。

覆土 ほぼ暗褐色～黒褐色の土ながら、最上位にロームブロックを含む層がある。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。主に自然堆積と思われる。

備考 確証に欠けるが、縄文期の土坑と判断した。

SK013 (第12図, 図版4)

立地 台地南端ほぼ中央に位置する。

形態・規模 形状は楕円形で、規模は長径1.4m×短径1.3mである。深さは現状で23cmである。なお、底面は幾分凹凸がある。

覆土 凹レンズ状の堆積であり、自然堆積と思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 総合的に判断して縄文期の土坑とした。

SK014 (第12図, 図版5)

立地 台地南側ほぼ中央に位置する。

形態・規模 形状は楕円形で、規模は長径0.9m×短径0.8mである。深さは現状で23cmである。

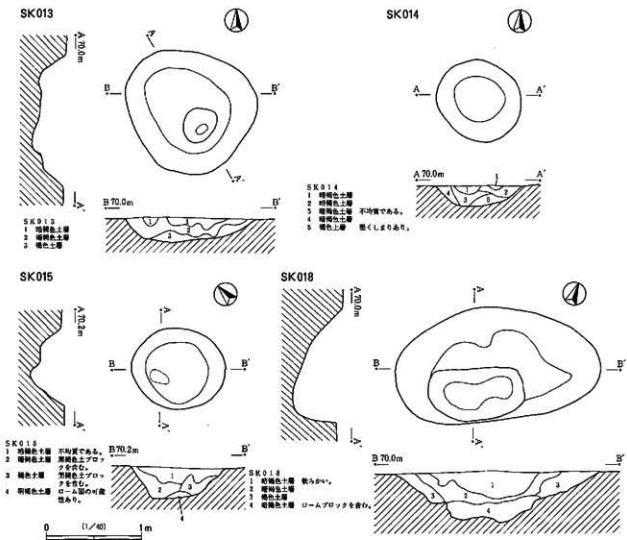
覆土 暗褐色土でほぼ占められ、自然堆積と思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 総合的に判断して縄文期の土坑とした。

SK015 (第12図, 図版5)

立地 台地南西に位置する。



第12図 縄文時代の土坑 (3)

形態・規模 形状は楕円形で、規模は長径1.0m×短径0.9mである。深さは現状で30cmである。

覆土 凹レンズ状の堆積であり、自然堆積と思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 総合的に判断して縄文期の土坑とした。

SK018 (第12図、図版5)

立地 台地南側やや東寄りに位置する。

形態・規模 形状は楕円形で、規模は長径2.2m×短径1.2mである。深さは現状で50cmである。

覆土 凹レンズ状の堆積であり、自然堆積と思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 SK017と重複関係にあるが、本址が古い。総合的に判断して縄文期の土坑とした。

SK019 (第13図, 図版5)

立地 台地南西端に位置する。

形態・規模 形状は楕円形で、規模は長径1.2m×短径1.0mである。深さは現状で30cmである。

覆土 凹レンズ状の堆積であり、自然堆積と思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 SM011と重複関係にあるが、本址が古い。総合的に判断して縄文期の土坑とした。

SK021 (第13図, 図版5)

立地 台地南西端に位置する。

形態・規模 形状はほぼ円形で、規模は径1.2m程である。深さは現状で20cmである。

覆土 凹レンズ状の堆積であり、自然堆積と思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は縄文早期の土器片が1点出土した。

備考 SK022と重複関係にあるが、本址が新しい。総合的に判断して縄文期の土坑とした。

SK022 (第13図, 図版5)

立地 台地南西端に位置する。

形態・規模 SK021に切られるかたちであり、推測の部分もあるが、形状は楕円形で、規模は長径(1.5)m×短径1.2m程である。深さは現状で32cmである。

覆土 不明である。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 SK021と重複関係にあるが、本址が古い。総合的に判断して縄文期の土坑とした。

SK024 (第13図, 図版5)

立地 台地南西に位置する。

形態・規模 形状は楕円形で、規模は長径1.1m×短径1.0m程である。深さは現状で30cm程である。

覆土 緩やかな凹レンズ状の堆積である。上部に木炭を含む暗褐色土層がみられる。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 SM010と重複関係にあるが、本址が古い。総合的に判断して縄文期の土坑とした。

SK025 (第13図, 図版5)

立地 台地南西端に位置する。

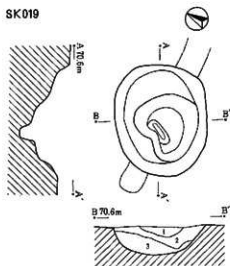
形態・規模 形状は歪んだ楕円形になろうか。また、規模は周溝(SM003)に切られていることもあって正確さを欠くが、推定で長径1.1m×短径1.0m程になろう。深さは現状で30cm程である。

覆土 自然堆積であろう。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

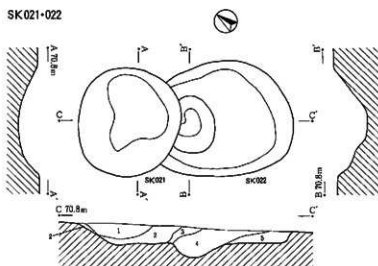
備考 SM003と重複関係にあるが、本址が古い。総合的に判断して縄文期の土坑とした。

SK019



SK019
 1 暗褐色土層
 2 暗褐色土層 ロームブロックを少量含む。
 3 暗褐色土層

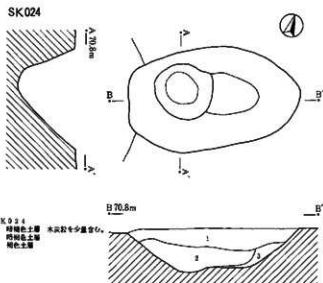
SK021-022



SK021
 1 暗褐色土層
 2 暗褐色土層 ロームブロックを多く含む。
 3 暗褐色土層

SK022
 4 暗褐色土層
 5 暗褐色土層 ロームブロックを多く含む。

SK024



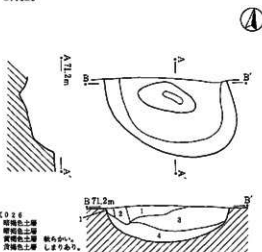
SK024
 1 暗褐色土層 木炭粒を少量含む。
 2 暗褐色土層
 3 暗褐色土層

SK025



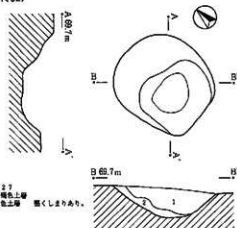
SK025
 1 暗褐色土層
 2 暗褐色土層 ロームブロックを少量含む。
 3 暗褐色土層

SK026



SK026
 1 暗褐色土層
 2 暗褐色土層
 3 暗褐色土層 藁のかけらあり。
 4 暗褐色土層 しまりあり。

SK027



SK027
 1 暗褐色土層
 2 暗褐色土層 藁くしまりあり。

第13図 縄文時代の土坑 (4)

SK026 (第13図, 図版5)

立地 台地南西に位置する。

形態・規模 約北半分が調査区域外にあり, 形状は不明ながら, 楕円形になろうか。それゆえ, 規模は推定で長径1.5m×短径1.0m程と思われる。深さは現状で35cm程である。

覆土 底面付近に柔らかいローム粒を多く含む土がみられる。自然堆積と思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 総合的に判断して縄文期の土坑とした。

SK027 (第13図, 図版6)

立地 台地南西端に位置する。

形態・規模 楕円形で, 長径1.0m×短径0.9mである。深さは現状で30cm程である。

覆土 暗褐色土の凹レンズ状の堆積であり, 自然堆積と思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 総合的に判断して縄文期の土坑とした。

SK028 (第14図, 図版6)

立地 台地南西端に位置する。

形態・規模 円形で, 径1.3m程である。深さは現状で50cm前後である。

覆土 暗褐色土の凹レンズ状の堆積であり, 自然堆積と思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は縄文早期の土器片が2点ほど出土した。

備考 縄文期の土坑であろう。

SK030 (第14図, 図版6)

立地 台地南西端に位置する。

形態・規模 形態は楕円形ながら, これは造り変えの結果かと思われる。それゆえ, 規模は2基共に長径1.3m×短径0.8m程になろうか。深さは現状で共に30cm前後である。

覆土 ロームブロックを含んでいる。

出土遺物及び出土状況 覆土中より小礫が2点出土した。縄文期の被熱礫と思われる。

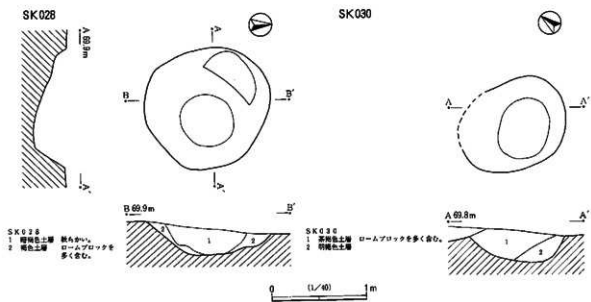
備考 総合的に判断して縄文期の土坑とした。

3 出土遺物

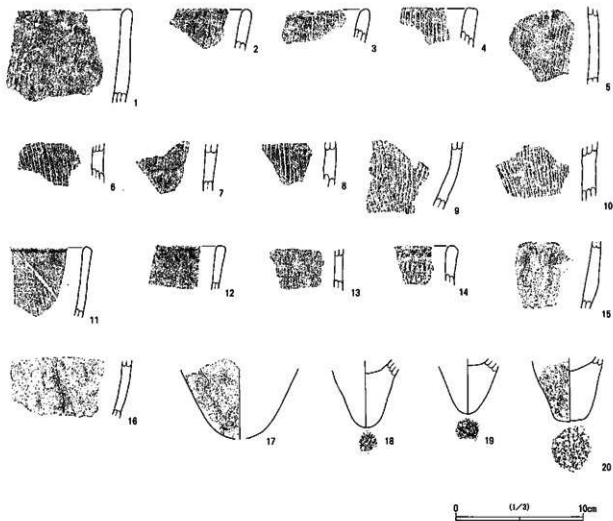
縄文時代の遺物は縄文時代に属する遺構(炉穴・土坑)の他は, 確認調査トレンチ, 縄文時代以降の遺構覆土, 及び, 遺構精査時(グリッド一括)に出土したものである。その種類は土器, 土製品, 石器, 礫などであり, 以下種別ごとに報告する。

土器

遺物の点数や使用の便宜上, その出土状況については第8図を参照してもらうこととして, ここでは時期ごと・タイプごとにまとめることとした。



第14図 縄文時代の土坑 (5)



第15図 縄文土器 (1)

縄文早期燃糸文系土器（第15図1～20／尖底土器底部含、図版25）

早期燃糸文系土器群を一括した。何れも砲弾を逆にした器形のものであろう。1～10は器壁が厚く、表面に砂分が露出しザラザラした感じの土器で、色調が明るい褐色（ないし黄褐色）の土器群である。この内、1～4は口辺部片であり、3までは内面及び口唇部から口縁部外面を1cm～数cmまで磨いている（4は口唇部まで）。5～10は胴部片であるが、9、10は下胴部片である。燃糸文は何れもRの原体で、その太さや条の間隔は様々である。

11～13は器壁が薄く、丁寧な調整のものを分けた。この内、11、12は口辺部であり、内外面を磨いているため、燃糸も磨り消されて拓本でもかろうじて判るほどである（原体はR）。13は硬質であり、縄文原体も細くよく燃られている。

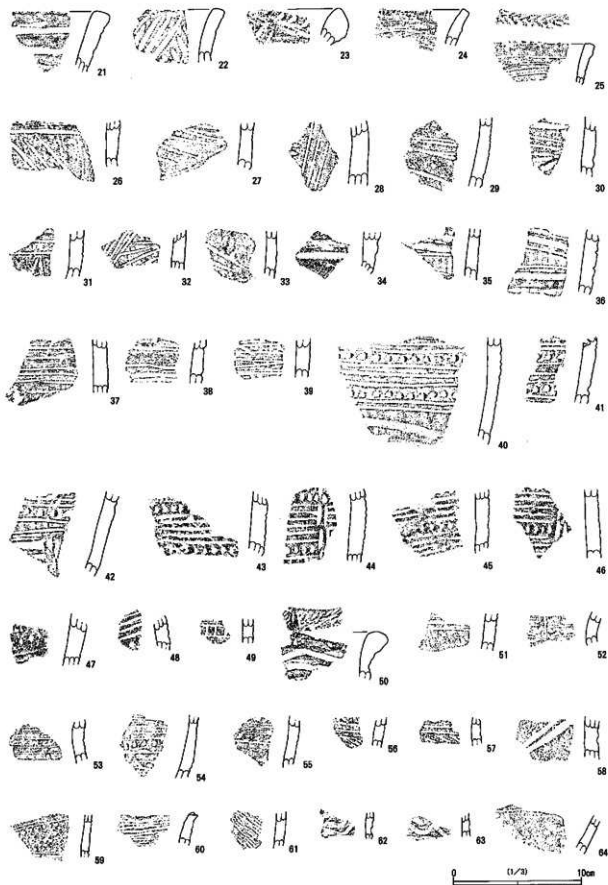
14は口唇部が若干外側へ反するもので、胎土は軟質である。施文は明瞭さを欠くが燃糸文ではなく縄文（RL?）であろう。15、16は無文の土器である。確証はないが、比較検討のうえ該期に加えた。内外面ともに磨かれており、多少硬質である。

17～20は尖底の底部である。このうち、胎土や調整の仕方などから、17、18については該期に属すると思われるが、19、20は次の沈線文系に付属する可能性が高いとみる。便宜上、ここで一括する。

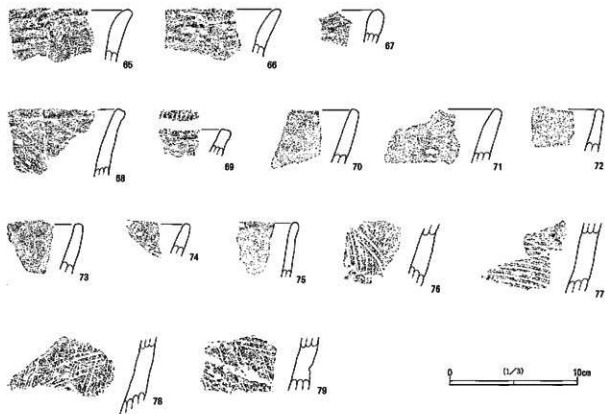
これらはその特徴から、稲荷台式土器に相当ないし並行する時期の所産であろう。この他に、該期の土器片は約40点ほど出土した。

縄文早期沈線文系土器（第16図21～64・第17図65～67、図版26・27）

早期沈線文系土器を一括した。底部が多少丸みを持ち、ラッパ形の器形をなす深鉢形土器片である。21～25は口辺部片である。21は口縁に並行する太沈線、22は口縁から斜め方向へ左右の太沈線で充たすもの、23は波状口縁の突起部分（口唇部に羽状の沈線）、24は21と同様ながら器壁薄く沈線はより細いもの、25も24と類似するが口唇部に矢羽根状の押捺を施すものと、それぞれ相違がある。36～39は恐らく21～25に対応ないし対応するタイプの胴部片であろう。太沈線から細沈線に近いものと様々ながら、35、36のように両者を組み合わせたものもみられる。色調は全体に黄褐色ないし黒褐色であり、表面が砂質で多少ざらついた感じがある（磨きが入る35、36は別）。40～42は沈線と刺突を組み合わせたもので、40の場合、下に一条入る線は太沈線である。明るい色調で、厚手にもかかわらず硬質である。43～48も類似する文様ながら、刺突の工具は異なる。表面の砂質化が顕著で、軟質かつ色調は赤褐色である。同一個体になろうか。49は何れにも入らないタイプで、沈線の内部は刺突ではなく工具によって引かれたものである。50～57の内、50、51、それから、53～57はそれぞれ同一個体ないし近似するタイプになろう。何れも小型の器形と思われる。50は外反する波状口縁の突起部分に相当し、頂点のボタン状突起には縄文（LRか）、口唇部（一部突起部にも）には格条体瓦直文を2条並列させている。なお、口縁外面は太沈線である。51は同一の色調・胎土（赤褐色・砂質）であり、並行する沈線を施す。52は口縁が外反する土器の頸部に相当する部分であり、並行する横位の沈線を一条の沈線で縦に区画し、その線に沿って沈線間に刺突を施すものである。53～57は赤褐色～暗赤褐色のもろい胎土の土器であり、並行ないし斜行する細い沈線間に刺突文ないし貝殻腹線文（55）を施すものである。58、59は沈線と貝殻腹線の組み合わせによる土器であり、58が太沈線なのに対し、59は細沈線で連続する腹線文間を更に刺突文で区画している。59は薄手であり小型の土器になろう。60は口唇部を指頭で押して波状化させたもので、外面は縄文（単節L）を施文する。61



第16图 縄文土器(2)



第17図 縄文土器 (3)

はその胴部片であろう。共に暗い赤褐色の土器であり、内面は丁寧に調整されている。62, 63は薄手の土器で、波状の沈線を施す。64は下胴部片であり、上部に横位の沈線が確認される。表面・胎土共に黒褐色で、小形の土器にならう。65~67は無文の口縁部である。茶褐色で、内外面に荒い調整痕をのこす。

以上、その文様のあり方から田戸下層期に比定されるが、細片であることなど不確定要素もある。また、最後の無文の土器も確証に欠けるが本期に収めた。なお、該期の土器片は他に約90点ほど確認される。

縄文早期条痕文系土器 (第17図68~79, 図版27)

何れも平底の深鉢形土器片で、胎土に繊維を含むのを特徴とする。68~75は口縁部片である。68は口縁が多少外反する。69は多少玉縁状となるものであり、口唇部には貝殻腹縁文を縁と直行するかたちで巡らしている。70~75は器面がナダ調整されているもので、70は平口縁、71以降は波状口縁である。75は薄手且つ小形の土器であり、内外面をナダ調整している。繊維の混入も不明瞭であり、該期に伴うかどうか確証に欠ける。76以降は胴部片であり、外面に条痕を遺す。器壁のあちこちに小さな瘦痕がみられる。胎土は、68, 69と72以降が赤褐色ないし黒褐色で、もろい感じがするのに対し、70~75は黄褐色(部分的に黒褐色)で、繊維の入りも少なく、多少硬質である。

以上、その文様のあり方から茅山期に比定される。なお、該期の土器片は他に約90点(細片約20)ほど確認される。

縄文中期土器（第18図80～87，図版28）

80が茶釜形をなす他は深鉢形土器片である。80は口縁から上胴部片であり、胎土に長石を多量に含み、器表を丁寧にナデ調整している。三角形の突起をポイントに沈線と刺突によって上胴部を装飾する。81、82は波状口縁をなすものである。内外面共に荒いナデ調整を施し、色調は明黄褐色で、多少硬質のものである。83、84は隆起線や沈線、磨消縄文による文様を施す一群である。85～87は太い縄文を施す胴部片である。

以上、その文様のあり方から阿玉台期～加曾利E式期に比定される。なお、該期の土器片は他に約20点ほど確認される。

縄文後期土器（第18図88～107，図版28）

浅鉢形、鉢形、深鉢形土器片の3者がみられる。88～92は浅鉢形土器で、下に示したものはその体部片と思われる。口縁直径が20cm一寸程になると思われ、明黄褐色の多少硬質の土器である。口縁外面に刻目を帯を設け、体部の縄文帯は沈線で区画する。93は同じ特徴をもつ土器ながら、刻目は弱い。94はその体部片になろうか。95は鉢形土器口縁～体部片である。外面に単節の太い縄文を施し、内面はナデ調整である。96以降は深鉢形土器片である。96、97は口縁部片であり、口縁内面には一条の沈線、外面は鋭い工具によって格子目文を施す。98～101はその胴部片であるが、横位の沈線で格子目を区切るものと沈線の外まで及ぶものがある。102以降はいわゆる紐線文系土器と呼ばれる一群である。102は口縁部片、103以下は胴部片である。何れも胎土に砂を多く含み、多少硬質である。

以上、その文様のあり方から加曾利B式期に比定される。なお、該期の土器片は他に約10点ほど確認される。

土製品（第18図108，図版28）

1点ではあるが、土器片鏝が出土している。台地南東部の一角からグリッド一括で取り上げられたもので、重量は48.17g、両側縁に僅かながら擦れに伴う抉れがみられる。深鉢形土器の下胴部片を加工したものであり、文様もないので断定はし得ないが、中期に属するものと思われる。

石器（第19図～第21図，図版22～24）

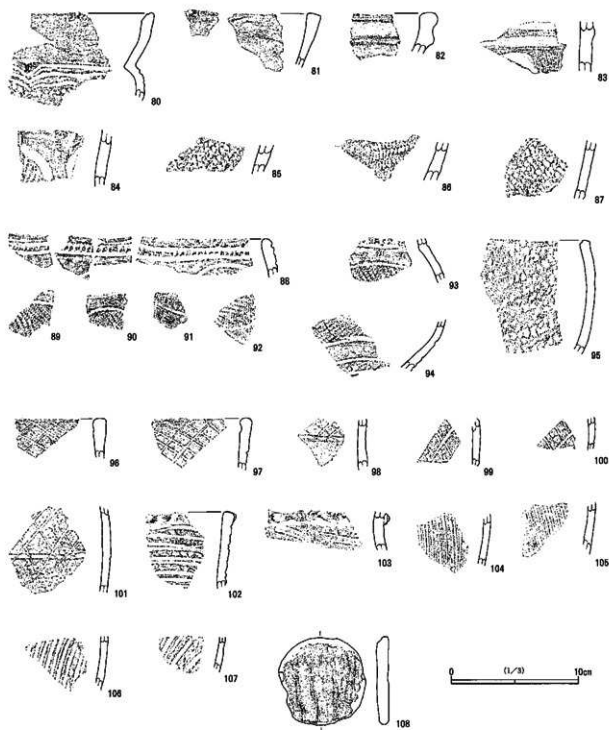
石器は尖頭器、石鏃、礫石斧、削器、敲石、剥片等である。以下種別毎に簡単に説明を行う。

尖頭器・石鏃 1は長さ5.6cmの両面調整の尖頭器である。方墳系墳墓周溝からの出土であり、形態等から一応縄文時代の所産として扱った。2～11は石鏃であるが、8以下は破損品である。形態的には無茎凹基鏃と無茎円基鏃に二分される。前者は基部の抉りの弱いタイプ（2～4、8～11）とその逆（5）がある。後者は6、7であるが、7は未製品の可能性が高い。この内、8は無茎凹基鏃のなかでも最大で復元長3cm程となる。なお、石質については付章該当ページ（86P）を参照されたい。

局部磨製石斧 12は基部及び側縁部に調整を加え、刃部片面を研磨した局部磨製石斧である。

削器 13、14は削器で、石材はチャートである。

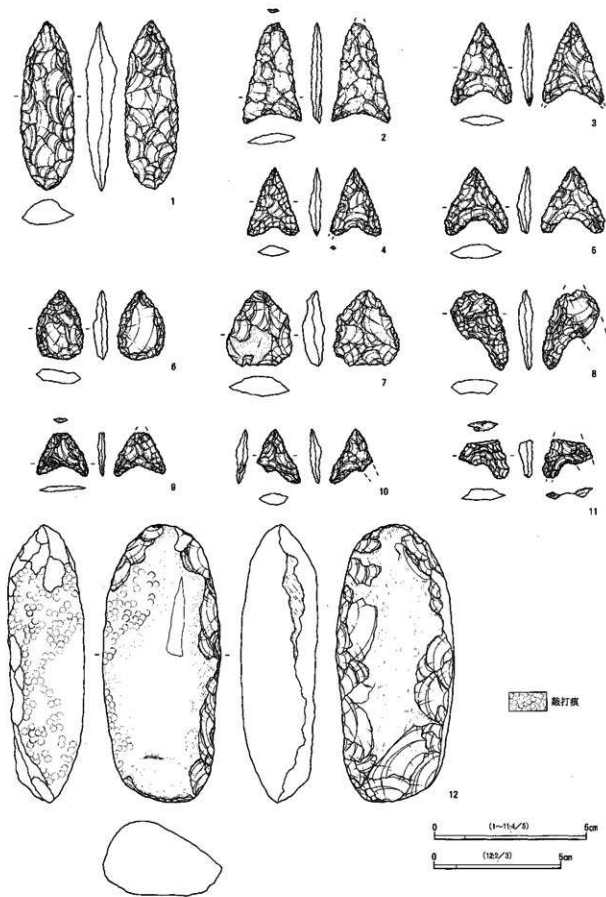
両極打法による剥片 15～18は両極打法による剥片である。石材は何れもチャートであり、互いに色調等は近似する。石鏃未製品であろうか。なお、先に報告した石鏃のうち2点は近似する石材である。



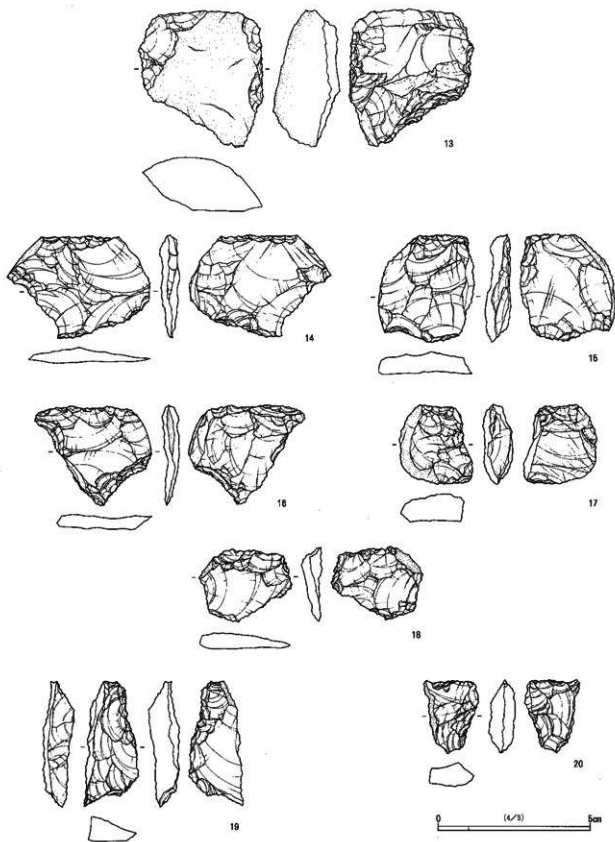
第18図 縄文土器(4)・土製品

加工痕のある剥片 19, 20は何れも珪質緑色凝灰岩製である。19は何かの未製品であろうか。20は折損しているために全体の形状が不明であるが、あるいはスクレイパーか。

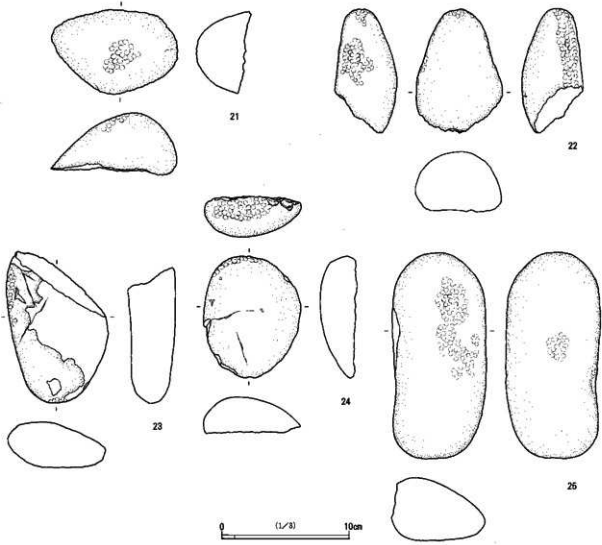
敲石 何種類かのタイプに分けられる。ほぼ手の中に収まるほどの大きさで、両端以外の側縁部などにも敲打痕のみられるもの(21~24)、端や側縁ではなく両面に敲打痕ないし研磨痕のみられるものである(25)。



第19圖 縄文時代の石器 (1)

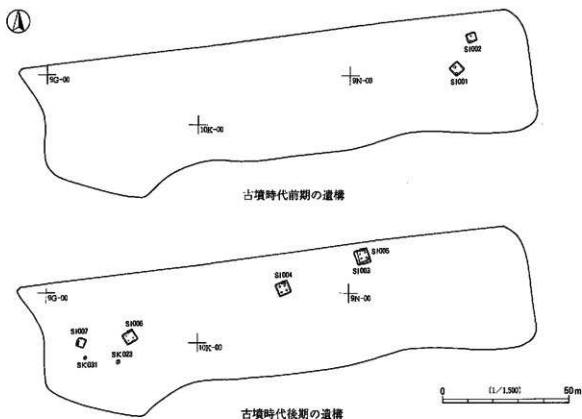


第20図 縄文時代の石器 (2)



第21図 縄文時代の石器 (3)

第3節 古墳時代



第22図 古墳時代の遺構分布

1 住居跡

S1001 (第23図～第25図, 図版7・図版31・図版32)

形態・規模 形態は多少歪みのある方形である。規模は長径、短径共に3.5mである。

柱穴・ハシゴ穴 柱穴は精査したものの、確認できなかった。ハシゴ穴も同様である。

カマド・炉 炉は中央北寄りに位置し、80cm×40cmのアーモンド形に焼土域が認められた。

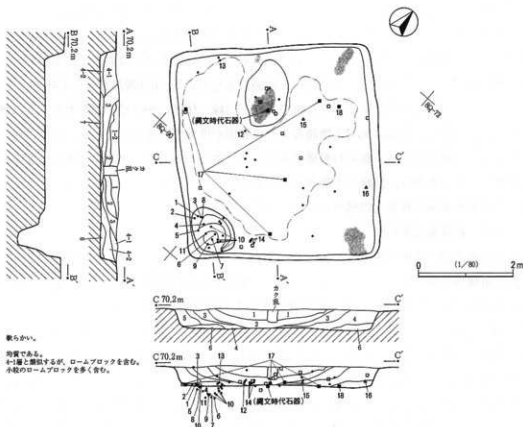
貯蔵穴 貯蔵穴は南西コーナーにある。平面形状は楕円形で北側中段が認められる。なお、深さは約50cmである。

床面 炉を広く囲むように踏締めが確認される一方、南東部はその逆であった。

周溝 認められなかった。

住居覆土 壁下に薄く褐色土の堆積が見られた他は、褐色～黒褐色土が凹レンズ状に堆積するものであった。自然堆積であろう。

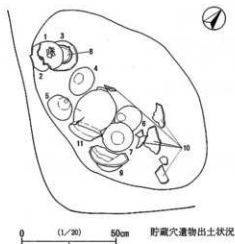
遺物出土状況 貯蔵穴より埴1 (ほぼ完形)、高坏7 (完形1, 坏部のみ6)、甕2 (ほぼ完形品1と底部～下胴部1)、壺1 (1/2個体) が出土した。高坏脚部をそっくり欠いている点から、意図的な廃棄行為であろう。床面にも対応する脚部は存在しなかった。しかも、貯蔵穴の底面に密着する状況からして、住居の廃棄に伴う可能性が高い。なお、完形品の甕内部にはハマグリが入っていた。



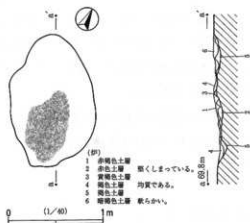
SI001

(自然)

- 1 暗褐色土層 軟らかい。
- 2 黒褐色土層
- 3 暗褐色土層
- 4-1 暗褐色土層 均質である。
- 4-2 暗褐色土層 小石と混在するが、ロームブロックを含む。
- 5 暗褐色土層 小粒のロームブロックを多く含む。
- 6 褐色土層
- 7 暗褐色土層



貯蔵穴遺物出土状況



- 1 暗褐色土層
- 2 赤色土層 弱くしまっている。
- 3 黄褐色土層
- 4 褐色土層 均質である。
- 5 褐色土層
- 6 暗褐色土層 軟らかい。

凡例

(住居内)

- 焼土
- 炭化材
- 粘土
- 炭化物

(カマド, 炉)

- カマド袖
- カマド燃焼部
- 焼土
- カマド上部

(出土遺物)

- 土器
- 鉄製品
- 石器
- 礫

第23図 SI001

床面・覆土中からも遺物が出土したが、その多くは土師器の小片であり、貯蔵穴と対応できるような出土状況を示すものではない。廃屋への投棄行為の結果と推測される。

出土遺物 1～11は貯蔵穴から出土したものである。この内、1～7は高坏である。1, 2は当初から口縁部の一部が割れていたもので、その割れ方は図に示した。3～6は脚部を欠くも坏部は完形である。一方、8はまったくの完形品である。9は埴であり、口縁～体部にかけて一部を欠く。9は壺の底部で、外面にはススが付着し、内面は使用を物語るように表面が黒褐色に変色している。10は口縁～胴部半個体に満たない壺で、胴部が大きく膨らみ形態である。部分的ながら外面にススの付着が顕著である。11は壺の全体が窺えるものながら、口縁と下胴部の一部を欠く。外面全体にススの付着が顕著で、底部～下胴部にかけてスス切れがみられる。内部のハマグリは蝶番での個体数は21点である。殻長は5.5～5.6cmのものがほとんどで、総重量は267gである。

これら貯蔵穴出土遺物の特徴は意図的な破砕を行っていることで、脚部を欠く高坏については欠いた脚部のみを遺構外に持ち出してさえている。この点、壺や壺も出土状況にみられる通りで（粗大片の接合によるが）、同様、9, 10については遺構内で接合するものは見出せなかった。

12, 14～17は住居覆土中の遺物で廃屋に投棄されたものであろう。12は口縁のみならず脚部も部分的に欠き、貯蔵穴の場合とはやはり異なっている。14は口縁～体部を大きく欠く。15は刀子であるが、刃部先端と茎の基部を欠く。16は不明鉄製品である。17は礫石（砂岩）である。4ブロックに分かれ散らばったかたちで出土した。レベル的には床面に近い破片もあることから、廃屋といってもその初期に投棄されたのかもしれない。重さは約2800g、持つのも困難な程ながら、それゆえに礫石として用いられたのであろう。なお、一方の端部は剥落しているために使用の痕跡は窺えなかった。

13, 18は住居床面上の遺物である。13は埴で、口縁の一部を欠く。貯蔵穴以外では唯一床面上に遺された土器といえる。18は炉の右側、壁との中間位の位置から出土したもので、礫石（流紋岩）ということからも生活を物語る遺物である。遺棄されたものとしては重さが約800gもあるところから、置碁として用いられたものであろうか。

この他には土師器片約170点（径1cm程度以下は除外）、縄文土器片10数点、礫約25点が出土した。土師器は古墳時代前期の高坏片と壺片でほぼ占められ、後者は本来縄文時代の礫群を破壊した結果であったと思われる。

SI002（第26図、図版8）

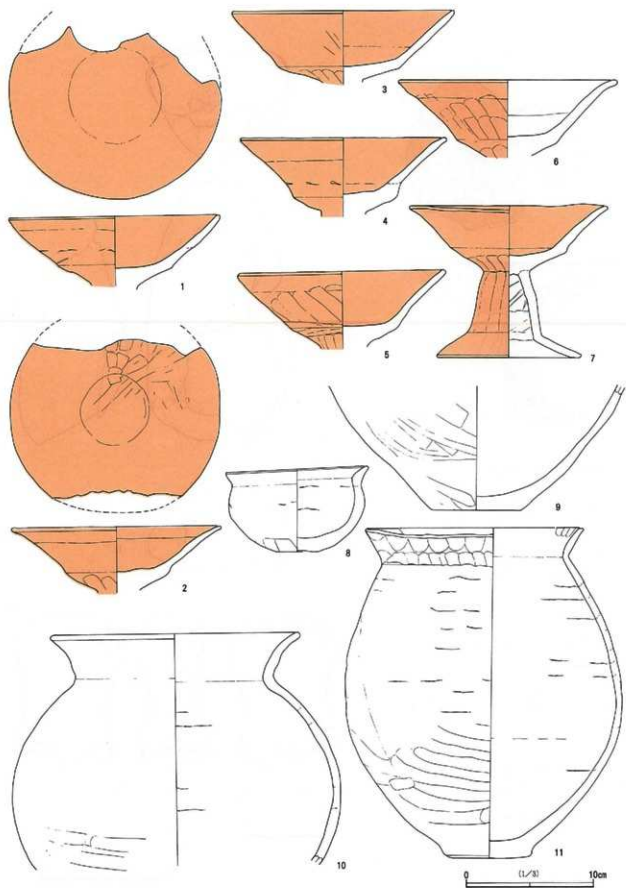
形態・規模 形態は多少ラインに凹凸のある方形である。規模は長径、短径共に3.5mである。

柱穴・ハシゴ穴 柱穴は未検出であるが、規模からして当初から無かったものと思われる。はしご穴と思われるピットは南壁下中央では確認できなかったが、貯蔵穴脇のピットがあるいはそれに該当しようか。カマド・炉 炉は中央北寄り位置し、その長軸は住居の主軸より多少東偏にずれている。85cm×35cmのアーモンド形に焼土域が認められた。

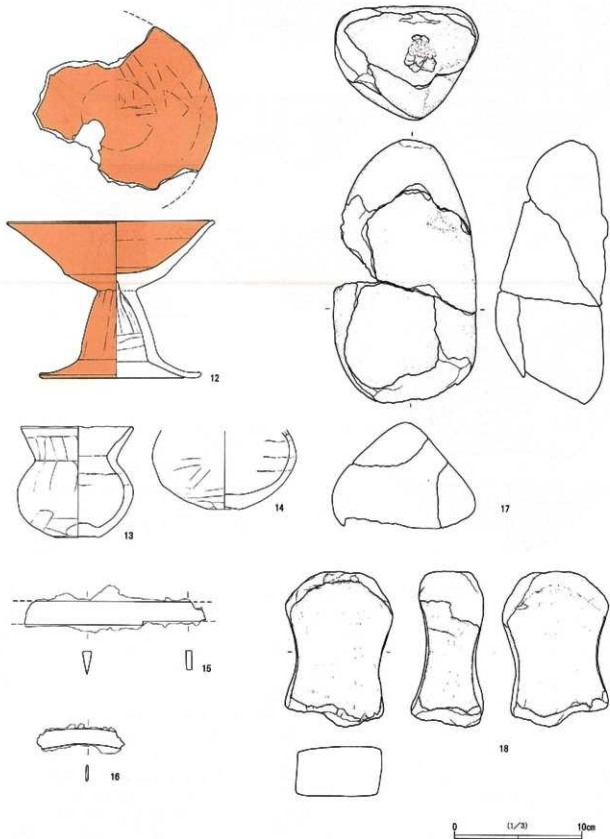
貯蔵穴 貯蔵穴は南西コーナーにあり、平面形状は円形、断面形状は丸みを帯びた逆台形である。なお、深さは約35cmである。

床面 壁下を除いて中央部に踏みしめが確認された。

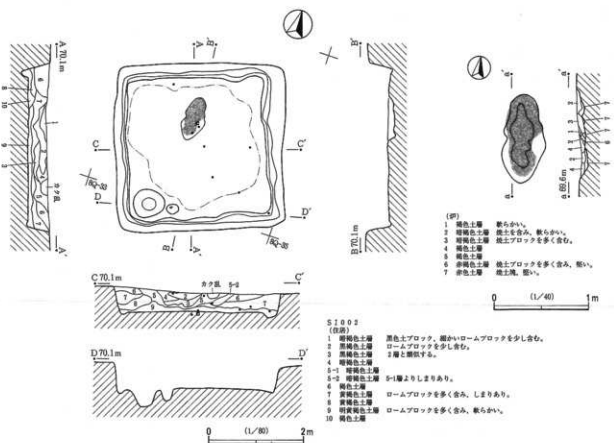
周溝 ほほ全周する。



第24图 SI001出土遗物 (1)



第25図 SI001出土遺物 (2)



第26図 SI002

住居覆土 ロームブロックを含む土で凹レンズ状の窪みが形成された後、土器片、腐植土を含む土で埋まっている。土層が均質ではなく、人為的な所産の可能性がある。

遺物出土状況 覆土中より約20点程（径1cm程の破片は除外）の土器片片が出土したが、細片で接合するものもない。埋没過程の混入であろう。

出土遺物 該期に属する実測・報告すべき遺物無く、覆土全体の土器片も20点に満たない。これに対して、縄文土器片15点、礫約20点と多いが、これは縄文早期の礫群を破壊した結果であろう。

SI003（第27図～29図、図版8・図版9・図版32）

形態・規模 形態は方形で、規模は径5.8mである。

柱穴・ハシゴ穴 柱穴は4本共に対角線上にあり、北西のビットが深さ30cm代他は、およそ深さ60cm前後である。ハシゴ穴については検出できなかった。

カマド・炉 カマドは北壁でも中央ではなく東寄りにあるが、これはSI005のカマドを継続して使用した結果であろう。規模は幅1.0m×奥行0.9m（煙道別）×高さ25cm（現存）であり、火床部の中心は前から25cm程奥にいったところにある。袖部は一部に粘土が認められたが、ロームに山砂を混ぜた土で築かれている。火床部やや奥の上位からは堯（底部を欠く半個体）が上から落ち込んだような状態で、また、支脚が焚口ではなく、煙道部から出土している。

貯蔵穴 貯蔵穴はカマド右側にあり、平面形状は崩れた円形である。なお、深さは約60cmである。

床面 SI005と重複しているためか、床面についてはこれといった記述をし得ない。

周溝 南壁下で確認された。

住居覆土 壁際に焼土・炭化材ブロックが検出されたことから、焼失住居と考えられる。焼けた時期は住居廃棄後程ない頃と思われるが、貯蔵穴の覆土中位～下位にかけて焼土が確認されており、多少の時間差があったものであろう。なお、住居の中央では焼土が確認されない。これはしばしばみられる現象であり、上屋の跡片付けとも関連するのであろう。焼失後の窪みを埋める土層は暗褐色土主体ながら、とりわけ下層では不均質で且つ土器片を多く含むという傾向が指摘できる。

遺物出土状況 1, 3, 4, 6はカマド内(またはそれに付属する)、2は床面上、5は覆土中よりそれぞれ出土した。なお、3はカマド内でしかも粘土が付着していることから、カマドの混和材として用いられたものであろう。また、4は完形に近い遺存品であることや煮沸用の土器であるという点から、カマドと対応する遺物と考えられるが、底部は見当たらなかった。意図的なものであろうか。

出土遺物 1は須恵器壺約半個体である。2は須恵器坏身約半個体強程度の個体で、SI005と重複しない南端から出土し、かつ床面からの出土であるから当遺構の年代を示すものといつてよい。3は甕の口縁～胴部片で、推測で器形を復元実測した。4は下胴部を欠く甕であるがススはほとんどみられない。5は壺の頸部約半個体で、覆土中への投棄によるものか。6は土製支脚であり、側面の一面のみとりわけ平滑という特徴がある。7は壺の表面にみられる初圧痕である。

この他に土器器片約140点(径1cm程度以下は除外)、縄文土器片17点、礫約25点である。前者は本来4に付属すると思われる粗大片4, 5点を除いては径3cmに満たない程の破片であり、その器形も様々である。時期的には、当住居の年代と重なるものである。平面分布や出土レベルは多少の集中域もあるが、その埋没環境は明瞭にし得ない。後者は本来縄文時代の礫群に伴うものと思われ、この点SI001と類似するが、位置的にはその外縁部に相当する。

SI004 (第30図・第31図、図版9・図版33)

形態・規模 形態はほぼ方形で、規模は径5.1mである。

柱穴・ハシゴ穴 柱穴は4本共に対角線上にあり、深さは北側が60cm代、南側が73cm(南東)と81cm(南西)である。なお、南西ピットには補助柱穴らしきピットがみられる。ハシゴ穴については、南側中央の壁から1.3mほど離れた位置で検出された。深さは約40cmである。

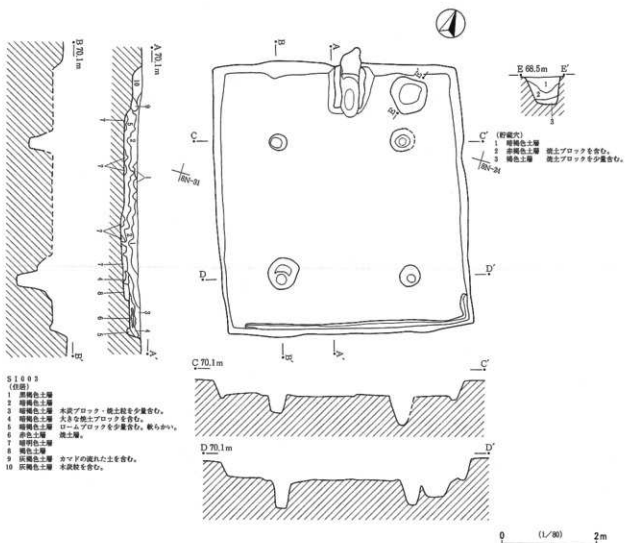
カマド・炉 カマドは北壁やや東寄りで見出された。規模は幅0.9m×奥行0.75m(煙道別)×高さ30cm(現存)であり、火床部の中心は前面から20cm程奥にいったところにある。袖部は一部に粘土が認められたが、ロームに山砂を混ぜた土で築かれている。遺物は少量の土器器片が出土したが、袖部の構築材なし崩壊時の混入であろう。

貯蔵穴 貯蔵穴はカマド右側にあり、平面形状は円形、断面形状は逆台形、深さは70cmである。

床面 これといった踏みしめ面は確認されなかった。

周溝 壁下全体を巡るが、幅は一定しない。深さは10cmを越えない。

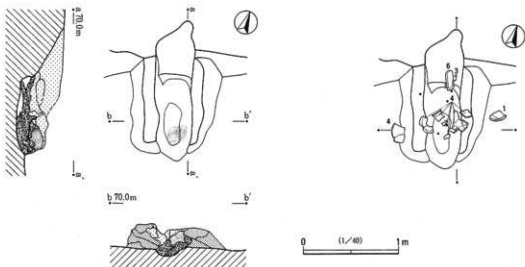
住居覆土 東西の壁際に焼土が検出されることから焼失住居と考えられるが、その程度はSI005と比較してはるかに弱い。焼土層の上は遺物をほとんど含まない暗褐色から黒褐色の土であり、自然堆積と思われる。



51003

(説明)

- 1 暗褐色土層
- 2 赤褐色土層 木炭ブロック・粘土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土層 大きな焼土ブロックを含む。
- 4 暗褐色土層 コーレンブロックを少量含む。炭ら少。
- 5 暗褐色土層
- 6 赤色土層 炭土層。
- 7 暗褐色土層
- 8 暗褐色土層
- 9 灰褐色土層 カマドの壊れた土を含む。
- 10 灰褐色土層 赤炭粒を含む。



第27図 SI003

る。

遺物出土状況 粗大の土器片はカマドの周囲のみであり、住居廃棄後にその窪みがゴミ捨て場として利用されなかった結果であろう。

出土遺物 1はカマド左側床面上より出土した土師器環である。完形ではなく、住居廃棄に伴うものであろうか。2は貯蔵穴内から出土した環であり、破片を復元実測した。3は甕の口縁～胴部約1/2個体、4は同じく甕の胴部粗大の片であり、共にカマドの崩壊層から出土した。3の場合、粘土が器壁外面にも付着していることなど、カマドでの使用というよりその混和材として用いられた可能性もある。この他にもカマド内及びその周囲から多少の土器片が出土したが、何れも同様の理由であろう。なお、覆土中より約10数点程の縄文土器片、数点の被熱礫が出土した。

SI005 (第28図・第29図, 図版8・図版9)

形態・規模 形態はほぼ方形で、規模は長径4.8m, 短径4.4mである。

柱穴・ハシゴ穴 柱穴は4本共にほぼ対角線上にある。深さは不揃いで、北西のピットが90cmと一番深く、次いで、南西(72cm), 北東(60cm), そして、南東が27cmとなる。南側の場合、それぞれ補助柱穴ともいうべきピットを脇に有するが、南東ではこの補助のほうが深い。ハシゴ穴については検出できなかった。

貯蔵穴の脇のピットについては壁際であり、その可能性は低いと思われる。

カマド・炉 カマドは北壁中央に位置する。これは本址を拡張して造られた住居跡であるSI003がその後もカマドは継続したため、当初の姿は失われたと考えられる。それゆえ、SI003の記述を参考されたい。

貯蔵穴 貯蔵穴はカマド右側南東コーナーにあり、平面形状は歪んだ円形である。なお、深さは約50cmである。

床面 踏みしめは確認されず、特記事項なし。

周溝 南側と東側で確認された。

住居覆土 ロームブロックや褐色土塊を含んだ土であり、多少浅いレベルで拡張するに当たって埋め戻した結果と思われる。

遺物出土状況 覆土中より若干の土師器片が出土したが、SI003床面近くの遺物についてはどちらに属するか判別しがたい。

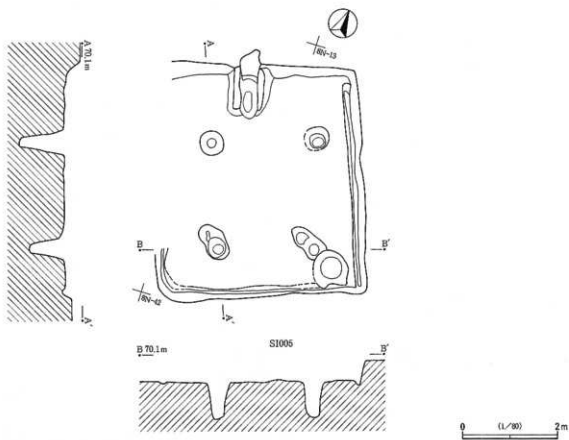
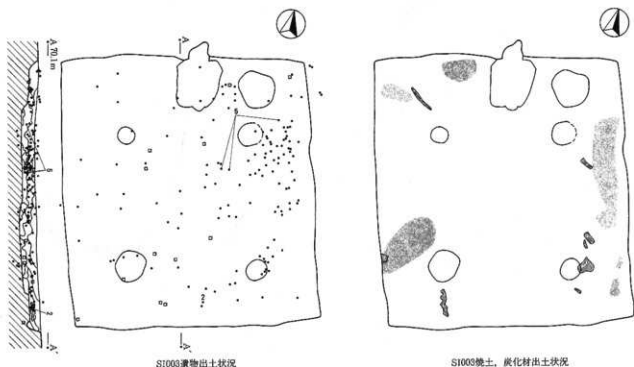
出土遺物 SI003, つまり拡張して作られた住居が旧床面とそれほど変わらなかったために、遺物はほとんど残り得なかったといえよう。この点、カマドも同様ながら、こちらはその後作り直さなかったとすれば、SI003から出土したカマドの遺物は本址に伴う可能性がある。

SI006 (第32図, 図版10)

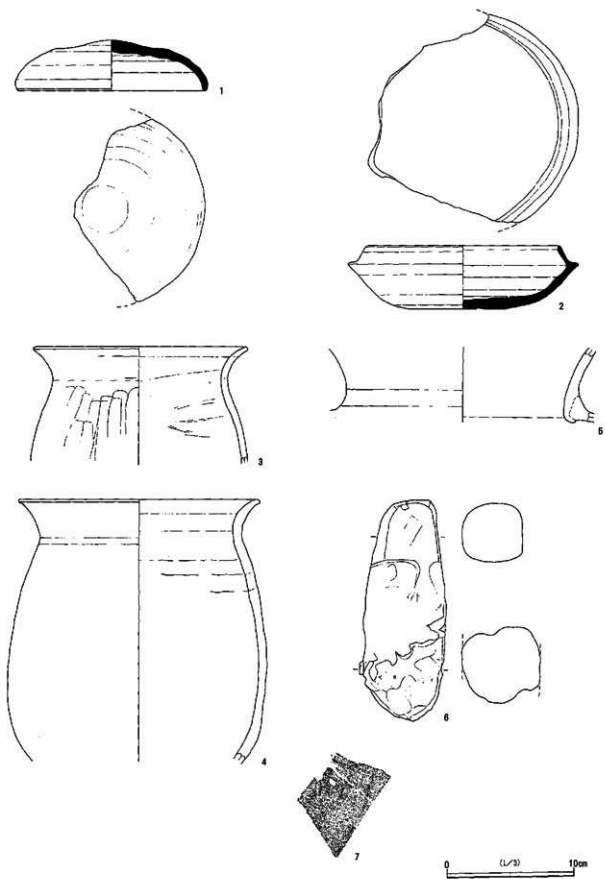
形態・規模 形態はほぼ方形で、規模は長径4.7m, 短径4.5mである。

柱穴・ハシゴ穴 柱穴は4本共に対角線上にあり、深さは南西ピットが60cm代他は、北西と南東が40cm代、北東が50cm代である。ハシゴ穴については、南側中央、壁直下に確認された。深さは未記録である。

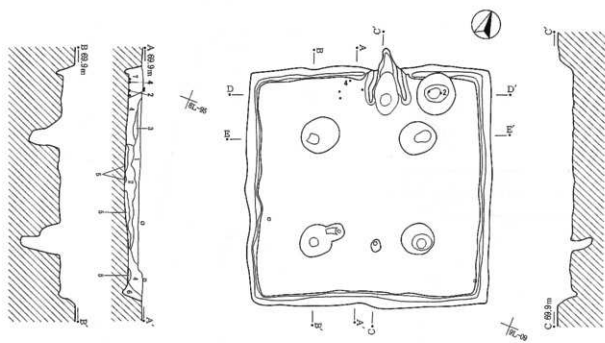
カマド・炉 カマドは北壁やや東寄りに検出された。規模は幅0.9m×奥行0.85m(煙道別)×高さ20cm(現存)であり、火床部の中心は前から20cm程奥にいったところにある。袖部は粘土と山砂を混ぜた土で築かれている。遺物は出土しなかった。



第28図 SI003・SI005



第29图 SI003·SI005出土遺物

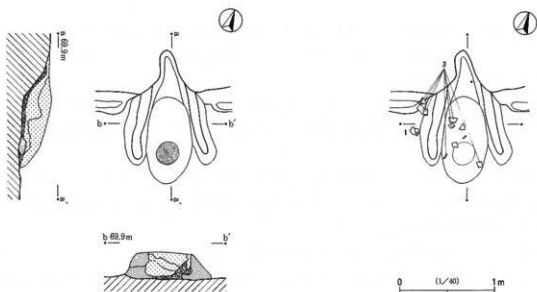
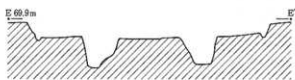


SI004

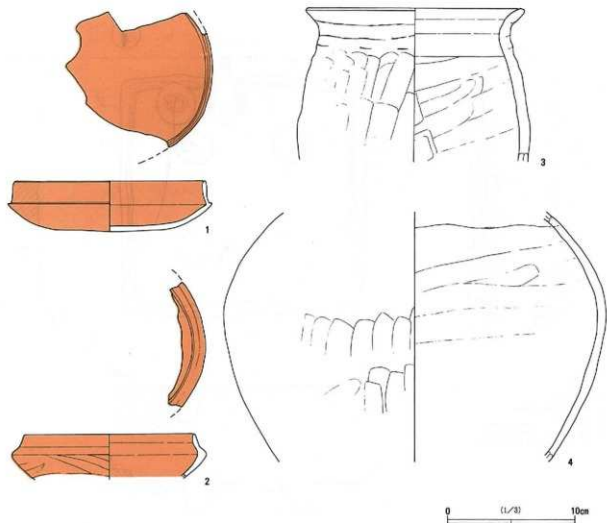
(図説)

- 1 黒褐色土層
- 2 厚褐色土層
- 3 暗褐色土層 織土粒を含む。
- 4 暗褐色土層
- 5 暗褐色土層 ロームブロックを含む。
- 6 暗褐色土層 ロームブロックを含む。
- 7 褐色土層 マダから覆れた土を含む。

0 (1/80) 2m



第30図 SI004



第31図 SI004出土遺物

貯蔵穴 貯蔵穴はカマド右側にあり、平面形状は円形である。なお、深さは68cmである。

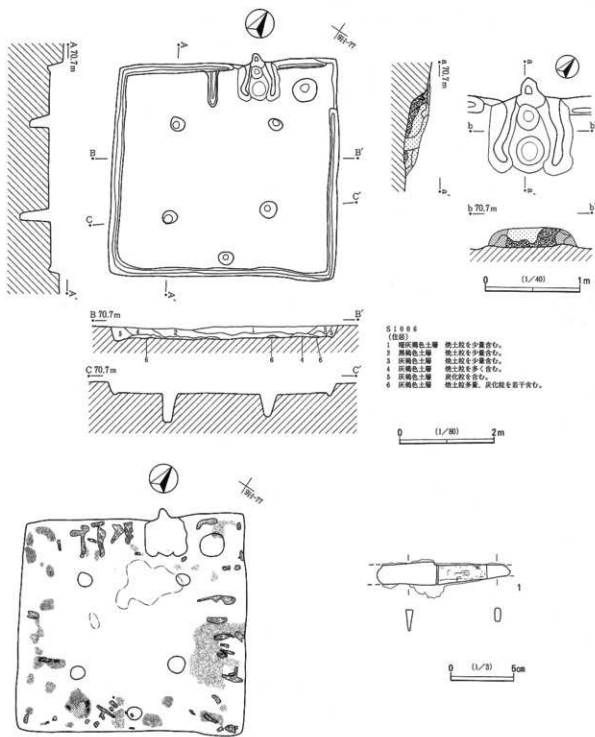
床面 ハシゴ穴を下ったところと、カマドの前がとりわけよく踏み締められていた。逆に、左側の柱穴を結ぶ線と壁際の範囲が軟弱であった。

周溝 壁下全体をほぼ巡るが、北東コーナー部に切れ目がある。幅はほぼ一定で、深さは数cm～10cm未満である。なお、カマドに並行して(約50cmの距離)その左側に小溝が付くが、これは区画のためのものと考えられる。

住居覆土 放射状に壁際から焼土と炭化材が出土しており、焼失住居と考えられる。何れもほぼ床面であることから、住居廃棄に伴うものであろう。そして、焼土の上は遺物をほとんど含まない暗褐色から黒褐色の土であり、自然堆積と思われる。

遺物出土状況 カマド内及び周辺より少量の土師器片が出土したのみである。

出土遺物 1点の刀子を除いては、約30点の土師器片に、多少の縄文土器片、礫が出土したのみである。土師器片の多くは恐らく同一個体の甕かと思われるが、接合せず、何れにせよ実測・報告し得ない。なお、刀子は覆土下層から出土した。



SI006

(単位)

- 1 灰褐色土層 焼土粒を少量含む。
- 2 黒褐色土層 焼土粒を少量含む。
- 3 灰褐色土層 焼土粒を少量含む。
- 4 灰褐色土層 焼土粒を多く含む。
- 5 灰褐色土層 炭化粒を含む。
- 6 灰褐色土層 焼土粒多量。炭化粒を若干含む。

焼土、炭化材、粘土出土状況

第32図 SI006及び出土遺物

SI007 (第33図・第34図, 図版10・図版11・図版33)

形態・規模 形態はほぼ方形で, 規模は長径3.4m, 短径3.3mである。

柱穴・ハシゴ穴 柱穴・ハシゴ穴, 共に確認できなかったが, これは住居の規模が小さいことと関係するものであろう。

カマド・炉 カマドは西壁中央で検出された。規模は幅0.75m×奥行0.8m(煙道別)×高さ25cm(現存)であり, 火床部の中心は前から30cm程奥にいったところにある。袖部は粘土を混ぜた土で築かれている。遺物は数点の土師器片が出土したのみである(袖材か)。

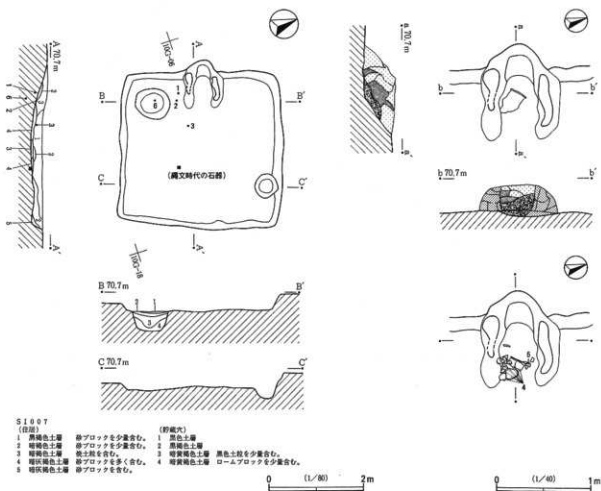
貯蔵穴 貯蔵穴はカマド左側にあり, 平面形状は円形, 断面形状は逆カマボコ形である。なお, 深さは45cmである。

床面 全体に多少緩い凹凸があり, 踏締め面は認められなかった。

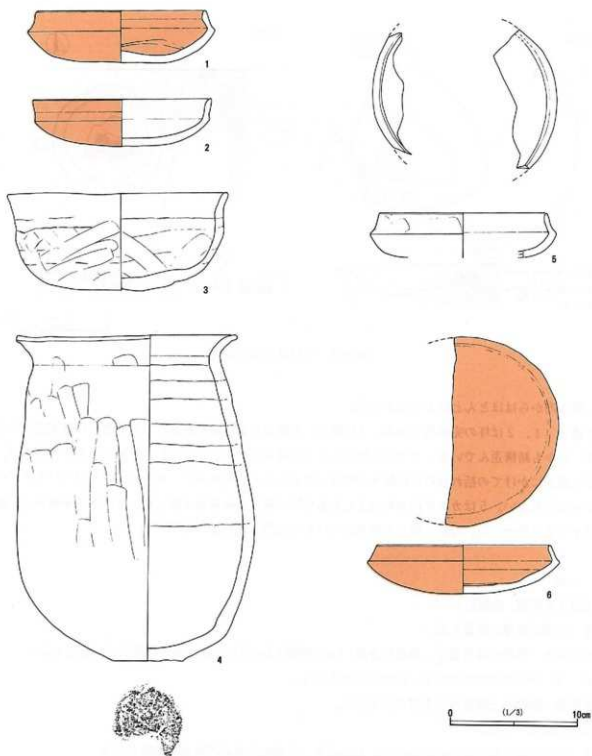
周溝 無し。

住居覆土 凹レンズ状の単純な褐色～黒褐色の土層であり, 遺物も少なく(少量の土師器片), 自然堆積と思われる。

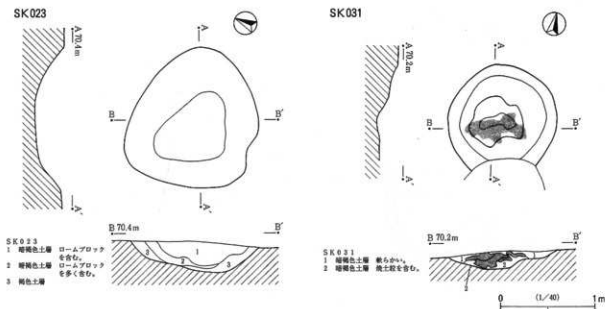
遺物出土状況 カマドに伴うかたちで遺物が出土している。カマドの左側より坏2点(1・2, 正位)が入れ子状で, また, 焚き口手前右側で碗(5, 逆位)が, そして, 中央で壺(6)という状況である。な



第33図 SI007



第34図 SI007出土遺物



第35図 古墳時代の土坑

お、覆土内からはほとんど出土しなかった。

出土遺物 1, 2は坏の完形品である。3は製作、整形共に雑な輪である。4は下部部に最大径があるもので、しかも結構歪んでいる。カマドに掛けたときの場合どのようなかたちで使用したのか不明だが、口縁から頭部にかけての括れ部だけに粘土が付着していることを考えると、あるいは据え付けたまま使ったのかもしれない。5はカマド内から出土したもので、破片から復元実測した。6は坏の半個体で、貯蔵穴覆土中より出土した。なお、縄文土器や礫はほとんど出土しなかった。

2 土坑

SK023 (第35図, 図版11)

立地 台地南西端に位置する。

形態・規模 形状は楕円形で、規模は長径1.5m×短径1.3m程である。深さは現状で34cmである。

覆土 凹レンズ状の堆積である。自然堆積であろう。

出土遺物 遺物は土師器片10点程が出土した。

遺物出土状況 不明。

備考 破片であり年代決定のためにいろいろあるが、古墳時代中期の所産と判断される。

SK031 (第35図, 図版11)

立地 台地南西端に位置する。

形態・規模 一部を欠くが、楕円形と思われる。長径1.4m×短径1.2m程になろうか。覆土中位に焼土・焼土ブロックが集中域するが、底面には焚床らしき痕跡は認められなかった。深さは現状で18cmである。

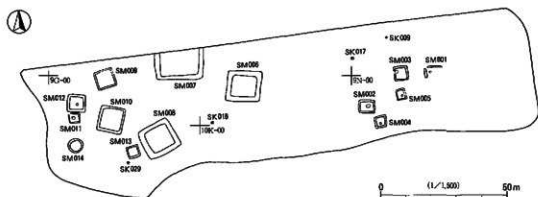
覆土 焼土・焼土ブロックが暗褐色土の上ののっている状況から、床面上に多少土が堆積した後に焼焼行

為がなされたものと思われる。また、その後はやわらかな暗褐色土が覆っていることから、一時期の活用で終了したものと思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は土師器片が20数片出土した。

備考 火葬墓の可能性もあるが、骨がみられないことや、焼土の状況、及び、古墳時代後期の土師器片がまともに出土していることから、古墳時代とした。

第4節 奈良時代



第36図 奈良時代の遺構分布

1 方墳系墳墓・円墳系墳墓

SM001 (第37図, 図版12・図版34)

位置 調査区東側にあり、群の東端に位置する。

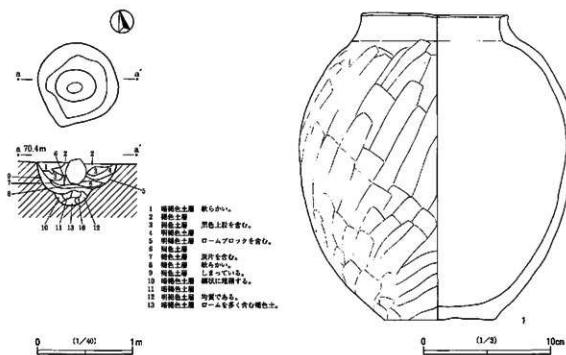
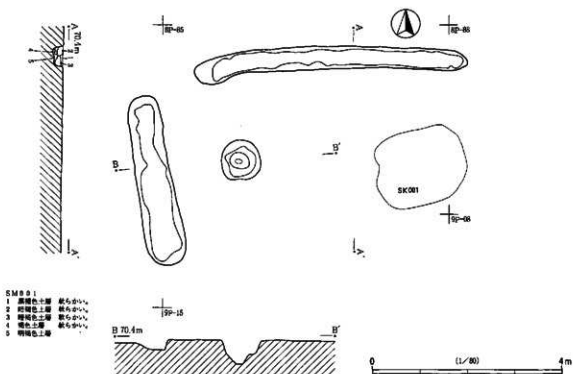
形態・規模 北西方向にハの字形に開いた浅い周溝のみ検出したが、本来は方形に溝が巡っていたと推測される。但し、コーナー部については、埋葬施設の位置からして当初から途切れていたと思われる。規模は、墳丘部で6m以上、周溝を含めると7.5m以上となる。

墳丘 確認出来なかった。

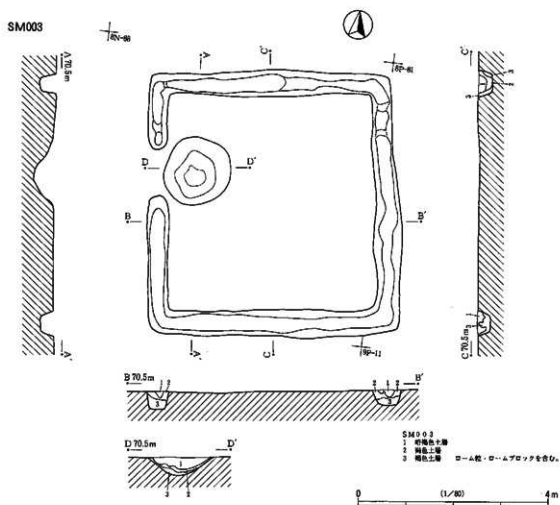
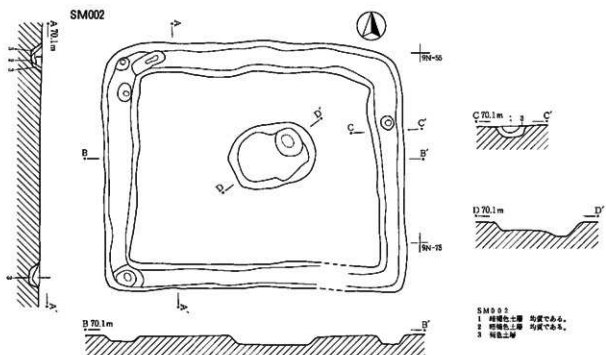
周溝 西側底面の堀形については多分に掘りすぎたところもあり、参考程度の域を出ない。断面形状は箱形ないし逆台形である。覆土の色調は黒褐色～暗褐色土で、自然堆積の様相を示す。

埋葬施設 北西コーナー寄りの土坑中に骨蔵器を納める。土坑の規模は、0.8m×0.81mのほぼ円形で、底面中央を掘り窪めた後、埋め戻して骨蔵器を据える底面としている。なお、底面の一部に炭の粒が見られたが、骨蔵器の周囲には器を覆うシルトブロックは確認されず、褐色～明褐色の土で周囲をそのまま埋め戻したと思われる。骨蔵器は土師器の無頸壺であり、蓋は確認されなかった。内部には火葬骨が入っていたが量的には少ない(136g)。骨の部位には上顎骨、下顎骨、大腿骨、頸骨がみられ、性別不明の成人である。

遺物出土状況 遺物は骨蔵器以外は周溝より出土した少量の縄文土器片のみである。



第37図 SM001及び出土遺物



第38図 SM002・SM003

出土遺物 1は骨蔵器の身に用いられた土器器の無頸壺であり、骨壺専用器と考えられる。高さは24cm程の完形の土器で、胴部外面全面にわたって斜め方向のヘラケズリを施す。

SM002 (第38図, 図版12)

位置 調査区東側にあり、南東にSM004が隣接する。

形態・規模 プランは長方形であり、規模は墳丘部で5m×4m、周溝を含めると6.3m×5.15mである。コーナーは幾分丸みを帯びている。

墳丘 確認出来なかった。

周溝 周溝の断面形態は逆カマボコ形であり、その底面は概して平滑ながら、南側周溝のみはその両端が若干窪んでいる。

埋葬施設 中央の土坑と考えられる。但し、粘土はもちろん骨蔵器も確認されなかった。火葬骨を直葬ないし腐りやすい素材に納めた結果かもしれない。土坑の規模は、1.8m×1.25mの楕円形である。

出土状況 遺物は土器器細片も含められなかった。

出土遺物 無し。

SM003 (第38図, 図版13)

位置 調査区東側にあり、南にSM005が隣接する。

形態・規模 プランはほぼ正方形であり、規模は墳丘部で4.5m×4.3m、周溝を含めると5.6m×5.3mである。西辺中央を掘り残しており、その出口に向き合うように埋葬施設があることから、意識的な所産であろう。

墳丘 確認出来なかった。

周溝 幅はほぼ一定であり、底面は南側中央から東側にかけて窪んでいる。一方、東側周溝では底面に凹凸がみられる。覆土は概して自然堆積と判断される。

埋葬施設 西側中央やや北寄りに位置する土坑と考えられる。但し、粘土はもちろん骨蔵器も確認されなかった。SM002と同様、火葬骨を直葬ないし腐りやすい素材に納めた結果かもしれないが、覆土にはそれらしき状況は看取できなかった。土坑の規模は、1.4m×1.35mの楕円形で、断面形状はすり鉢状である。

遺物出土状況 遺物は周溝内より出土した少量の須恵器片と縄文土器片のみである。

出土遺物 特記事項無し。

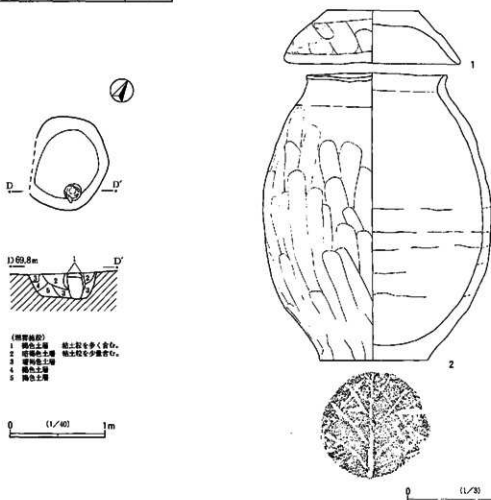
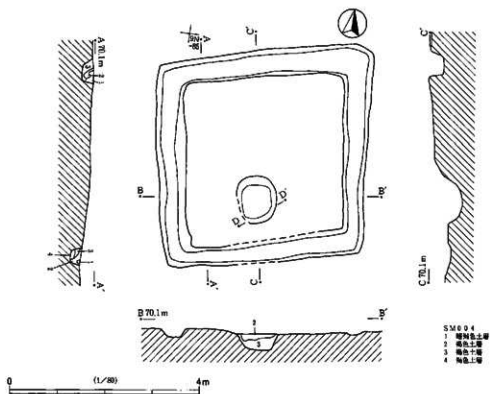
SM004 (第39図, 図版14・図版34)

位置 調査区東側にあり、台地の縁辺部(約5m南で台地縁)に立地する。

形態・規模 プランはほぼ正方形ながら、若干菱形に崩れた形態である。規模は墳丘部で3.5m×3.3m、周溝を含めると4.45m×4.4mである。

墳丘 確認出来なかった。

周溝 北東コーナー部を除いてほぼ一定の幅であり、底面も概して平滑ながら、西側南半分のみ窪んでいる。覆土の色調は多く暗褐色～褐色であり、自然堆積と思われるが、一部セクションに焼土の混入が確認



第39図 SM004及び出土遺物。

された。

埋葬施設 南辺寄りに2か所の土坑が検出された。東側の土坑には、粘土層中に骨蔵器があったが、西側は粘土の存在を含め何らの痕跡も確認できず後世のカク乱の可能性が高い。それゆえ、西側については実測図からも省いている（埋葬施設との重複部分）。

東側の土坑は、楕円形で、断面形状は箱形である。また、規模は1.0m×0.8mである。土坑底面に骨蔵器を据えた後、その周囲のみ約10cmの厚さに粘土を張っている。ほぼ円形で、底面中央を掘り窪めた後、埋め戻して骨蔵器を据え、底面としている。

骨蔵器は身が土師器無頸壺で、蓋が土師器坏である。壺内には骨片が充填されており、その総量は288gであった。骨の部位には頭骨、単根歯根などがみられた。頭骨の縫合が開いており、年齢はさほど下らない。なお、性別は不明である。

遺物出土状況 土師器の遺物は骨蔵器以外は周溝内より出土した20点足らずの土師器・須恵器片と若干の縄文土器片のみである。

出土遺物 1は骨蔵器の蓋に用いられた土師器の坏であり、骨壺専用の器と考えられる。器壁は厚く、内面はナデ、外面は荒いヘラナデ整形を施す。2は骨蔵器の身に用いられた土師器の無頸壺であり、骨壺専用器と考えられる。高さは21.5cm程の完形の土器で、胴部外面全面にわたって斜め方向の荒いヘラナデを施す。成形時の口辺部の歪みがそのままであったり、全体に傾きがあったりと、他と比較すると雑な作りである。

- 1、2共に砂粒分の多い胎土であり、暗赤褐色を呈する。

SM005（第40図、図版13・図版34）

位置 調査区東側にあり、003と北側で隣接する。

形態・規模 プランは長方形ながら、多少台形気味の形態である。規模は墳丘部で3.6m×2.65m、周溝を含めると4.25m×3.6mである。

墳丘 確認出来なかった。

周溝 ほほ一定の幅であり、底面も平滑であった。覆土は溝そのものが浅いこともあって判断に迷うが、自然堆積と推測される。

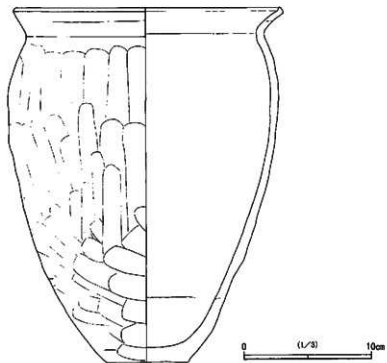
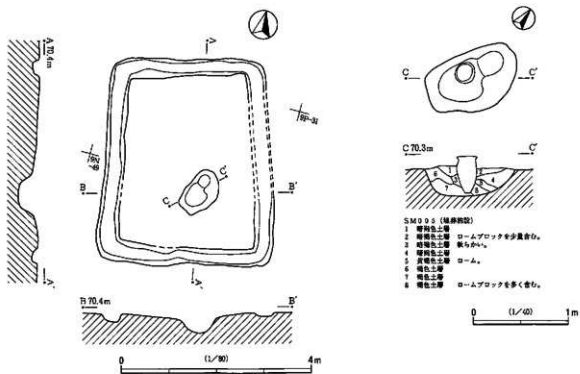
埋葬施設 南東寄りに骨蔵器を納める土坑が検出された。

土坑は、平面形態が楕円形で、断面形状は椀形である。規模は1.0m×0.6mである。土坑底面に直立した形で骨蔵器を据えている。なお、その周囲に粘土は出土しなかった。骨蔵器は身が土師器無頸壺であり、蓋は見出せなかったが、当初から無かったかどうかは判然としなない。

壺内には少量の骨片が遺存しており、その総量は10.5gであった。細片であり、部位、年齢、性別は不明である。

遺物出土状況 遺物は骨蔵器以外は周溝内より出土した少量の土師器片のみである。

出土遺物 出土したは骨蔵器の身に用いられた土師器の壺であり、壺を骨壺として転用したものである。高さは28.5cmのほぼ完形の土器で、口辺部が多少欠けているのは排土時の所産かと思われる。



第40図 SM005及び出土遺物

SM006 (第41図, 図版15)

位置 調査区中央にある。

形態・規模 ブランはほぼ正方形ながら、多少歪んでいる。規模は墳丘部で4.7m×4.2m、周溝を含めると6.5m×6.0mである。

墳丘 確認出来なかった。

周溝 ほぼ一定の幅であり、底面も平滑ながら、南溝東寄りと西溝北寄りの部分が約30cm程度窪んでいる。明瞭な段をもっているわけでもなく、また、遺物の出土もないので、埋葬施設ではないであろう。覆土は溝の掘り込みが深いこともあって十分な観察が可能であった。その堆積過程は凹レンズ状ないしは溝の両側から交互の堆積を示すもので、自然堆積とみられるものであった。但し、底面はともかく、その大部分が黒褐色ないし暗褐色の均質な土で占められていることは、周溝の周囲植生に覆われたが安定した状況にあったことを物語っているであろう。

埋葬施設 検出されなかった。

遺物出土状況 遺物は主に東側周溝より出土したが、多くは縄文土器片とそれに伴う礫であり、これに少量の土師器片がみられるのみである。しかし、土師器片にしても細片であり、混入と思われるので、この遺構の年代を示すものではないと考えられる。

出土遺物 既述したごとく、特記事項無し。

SM007 (第42図, 図版15・図版16)

位置 調査区西側にあり、その北半分は調査区外に入る。

形態・規模 北側が調査区外にあるためにプランは不明ながら、ほぼ正方形になるのであろう。確実な東西方向の規模は、墳丘部で15m、周溝を含めると18.7mであるから、南北方向も似たような数値をとるものと思われる。

墳丘 確認出来なかった。

周溝 遺構の規模からすると、狭い周溝といってよい。ほぼ一定の幅であり、底面も平滑であった。覆土は溝そのものが浅いこともあって断定は困難ながら、自然堆積と推測される。

埋葬施設 検出できなかった。

遺物出土状況 周溝覆土内より少量の土師器片や縄文時代の礫が出土したのみである。

出土遺物 特記事項なし。

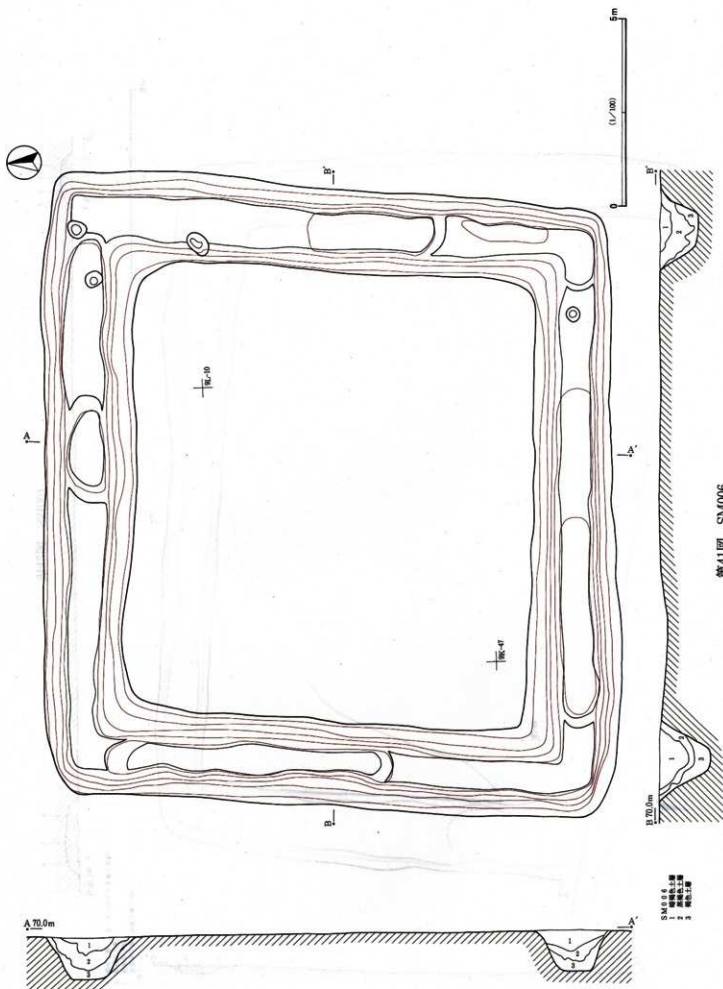
SM008 (第43図・第44図, 図版16・図版34)

位置 調査区西側にある。

形態・規模 ブランはほぼ正方形で、規模は墳丘部で10.0m×9.2m、周溝を含めると13.2m×12.6mである。

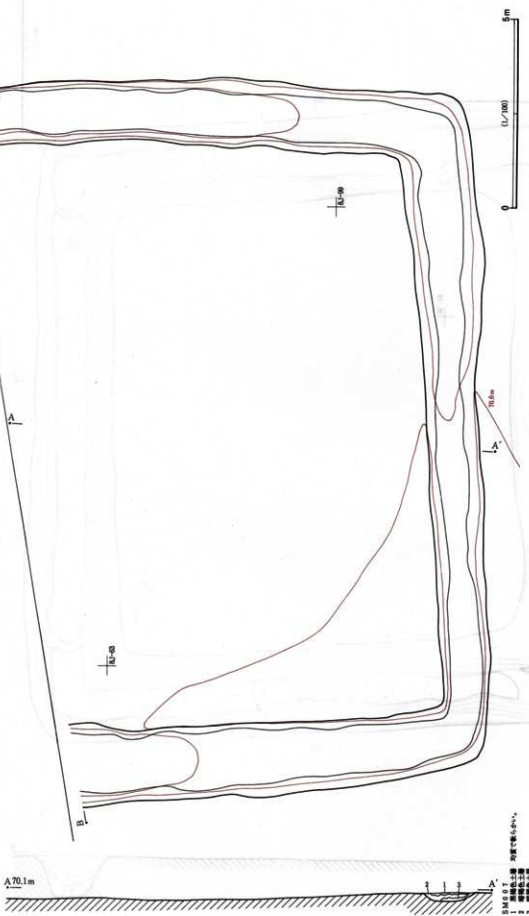
墳丘 確認出来なかった。

周溝 ほぼ一定の幅であり、底面も平滑ながら、南溝西寄りと西溝南寄りの部分が相対的に約30cm～40cm程度窪んでいる。明瞭な段をもっているわけでもなく、また、遺物の出土もないので、埋葬施設ではないであろう。覆土は溝の掘り込みが深いこともあって十分な観察が可能であった。その堆積過程は凹レンズ



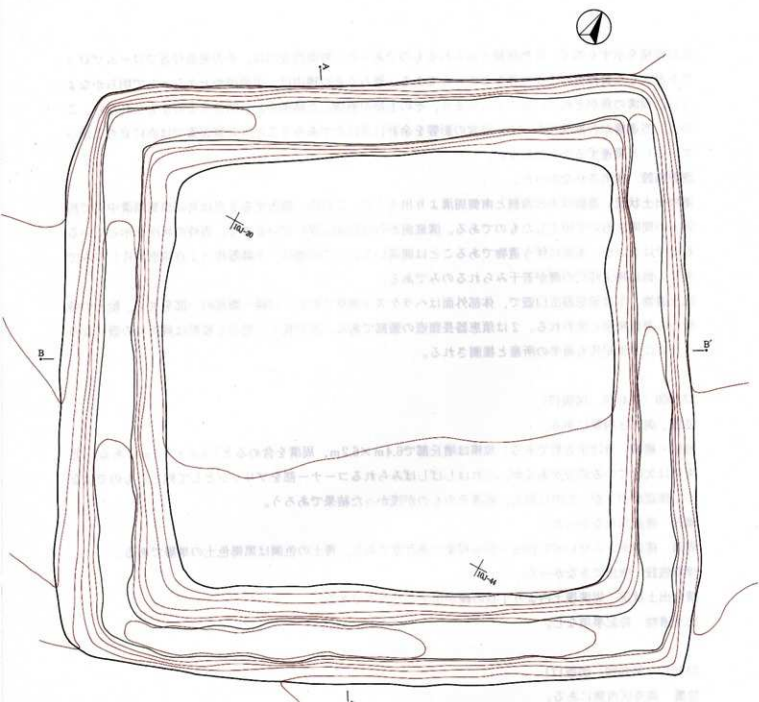
第41圖 SM006

測量図 527100

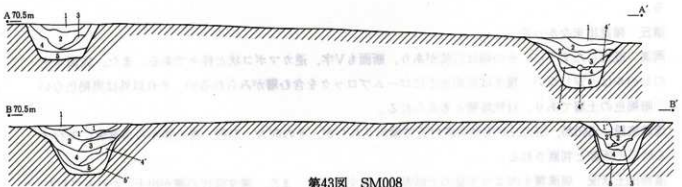
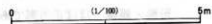


SM007
 基礎中心から
 1 基礎底面
 2 基礎側面
 3 基礎上面
 4 基礎外縁
 5 基礎内縁
 6 基礎中心
 7 基礎外縁中心

第42図 SM007



- SM008
 1 褐色土層
 2 暗褐色土層
 3 暗褐色土層
 4 褐色土層
 5 黄褐色土層



第43図 SM008

状の堆積を示すもので、自然堆積とみられるものであった。特徴的なのは、その底面付近でロームブロックを混入した黄褐色の土が主体をなすことである。恐らくその理由は、平面図やセクションで明らかのように、周溝の角がとれていること（つまり、その上端が崩壊した結果か）と関係するのかもしれない。この点、当遺構が台地縁にあつて、浸食の影響を余計に受けたであろうこと（北側周溝では直に立ち上がっている）と関連するのかもしれない。

埋葬施設 検出されなかった。

遺物出土状況 遺物は主に西側と南側周溝より出土した。この内、報告する2点は共に南側周溝中央で約20cmの間隔をおいて出土したものである。溝底面からは約50cm浮いているので、当時の状況を示しているわけではないが、本址に伴う遺物であることは間違いない。この他は、土師器片（1点須恵器片）のみであり、他に縄文時代の礫が若干みられるのみである。

出土遺物 1は須恵器広口壺で、体部外面はヘラケズリ調整される。口縁～頸部の一部を欠く。胎土の特徴から湖西窯産と思われる。2は須恵器長頸壺の頸部である。頸が長く、恐らく器形は肩折れの壺になろう。共に8世紀代も前半の所産と推測される。

SM009（第45図、図版17）

位置 調査区西側にある。

形態・規模 ほぼ正方形である。規模は墳丘部で6.4m×6.2m、周溝を含めると7.4m×7.4mである。北東部は欠けている部分があるが、これはしばしばみられるコーナー部をブリッジとして残したものでなく、確認面が下がったのに加え、周溝そのものが浅かった結果であろう。

墳丘 確認出来なかった。

周溝 確認面からせいぜい10cm～20cm程度の遺存度であり、覆土の色調は黒褐色土の単層である。

埋葬施設 検出できなかった。

遺物出土状況 周溝覆土内より1点の礫が出土したのみである。

出土遺物 特記事項なし。

SM010（第46図、図版17）

位置 調査区西側にある。

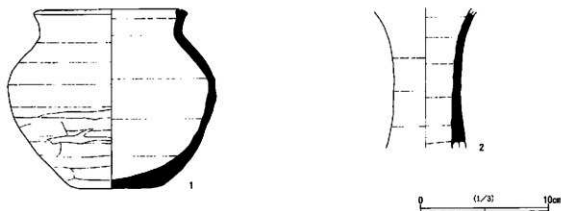
形態・規模 ほぼ正方形である。規模は墳丘部で8.5m×8.0m、周溝を含めると10.1m×9.9mである。南側、西側に比べて北側周溝の幅が狭く、南東コーナーが丸みを帯びていることなど、全体に規格性に欠ける。

墳丘 確認出来なかった。

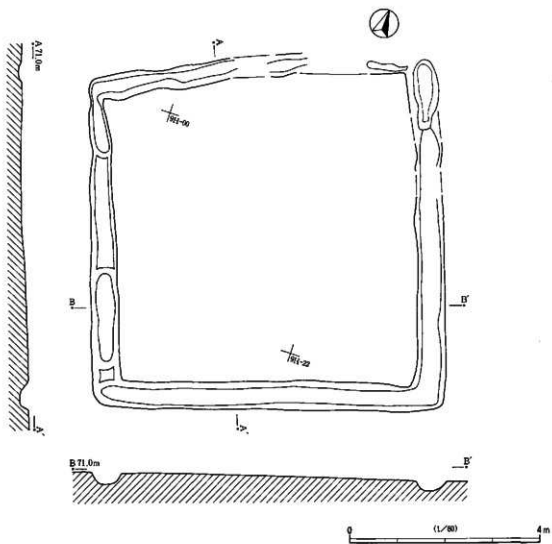
周溝 既述したように、その幅は広狭があり、断面もV字、逆コマゴコ状と様々である。また、底面もそのレベルは一定しない。覆土は底面近くにロームブロックを含む層がみられるが、それ以外は黒褐色ないし暗褐色の土層であり、自然堆積と考えられる。

埋葬施設 SK020、SK021が南側周溝付近で検出されたが、その向き、形態、覆土等から当遺構に先行する時期の所産と判断される。

遺物出土状況 周溝覆土内より少量の土師器片、縄文土器片、また、縄文時代の礫が出土したのみである。



第44図 SM008出土遺物



第45図 SM009

出土遺物 特記事項なし。

SM011 (第47図, 図版18・図版34)

位置 調査区西端にある。

形態・規模 プランは長方形ながら、北西コーナーにブリッジを有する形態である。規模は墳丘部で3.5m×3.4m、周溝を含めると4.2m×4.4mである。西側周溝が不明瞭なのは、谷に面していることもあって浸食が進んだことも影響しているよう。

墳丘 確認出来なかった。

周溝 他の方墳系墳墓と比較すると幅が幾分狭いが、これは多分に遺存の悪さ(本来の掘り込みそのものも浅かったかもしれない)と関係しているのかもしれない。また、溝底は全体に南西方向に低く傾いていたが、これはその方向が谷側に当たることと関連するであろう。つまり、当時もそのように多少傾いていた可能性があるということである。覆土の色調は暗褐色土で、自然堆積と思われる。

埋葬施設 中央多少西寄りに骨蔵器を納めた土坑が検出された。

土坑は、平面形態がほぼ円形で、断面形状は箱形である。規模は1.0m×0.95mである。土坑底面北東寄りに方形に敷いた粘土ブロックを囲むように、粘土ブロックや砂岩ブロックを方形に組み、その中に火葬骨を入れ更に蓋がわりのように粘土で覆ったようである。一方、南西寄りには、同じく土坑底面に粘土ブロックを敷いた直上に逆位で骨蔵器(土師器甕)を据えている。なお、こちらではその周囲を粘土で覆ったような痕跡は認められなかった。内部からは骨片が検出された。

両者の前後関係であるが、骨蔵器が小さな穴の中心に据えられ、かつセクションでは土坑を切っているかたちなので、骨蔵器の埋納のほうが新しいであろう。しかし、それにしては粘土層が土坑の一方に偏っており、後に埋納する予定で当初から計画して寄せたものであろうか。なお、骨蔵器の底部が欠けていたが、これは重機による排土時の所産である。

粘土ブロック内には少量の骨片が遺存しており、その総量は30.6gであった。骨蔵器内も同様、少量の骨片が遺存しており、その総量は4.5gであった。共に細片であり、部位、年齢、性別は不明である。なお、骨蔵器内の炭片は径1cm未満の材の破片で、総量3gに満たない。

遺物出土状況 遺物は骨蔵器以外は周溝内より出土した少量の土師器片のみである。

出土遺物 1は骨蔵器の蓋に用いられた専用の土師器蓋である。外面に荒いヘラケズリ整形を施す。2は骨蔵器の身に用いられた土師器の甕であり、日常生活用品としての甕を骨壺として転用したものである。高さは現存23.5cmであるが、本来は28cm程になろう。甕を逆位で用いながら、かつその底部を欠いて専用の蓋を用いるという珍しい組合せである。

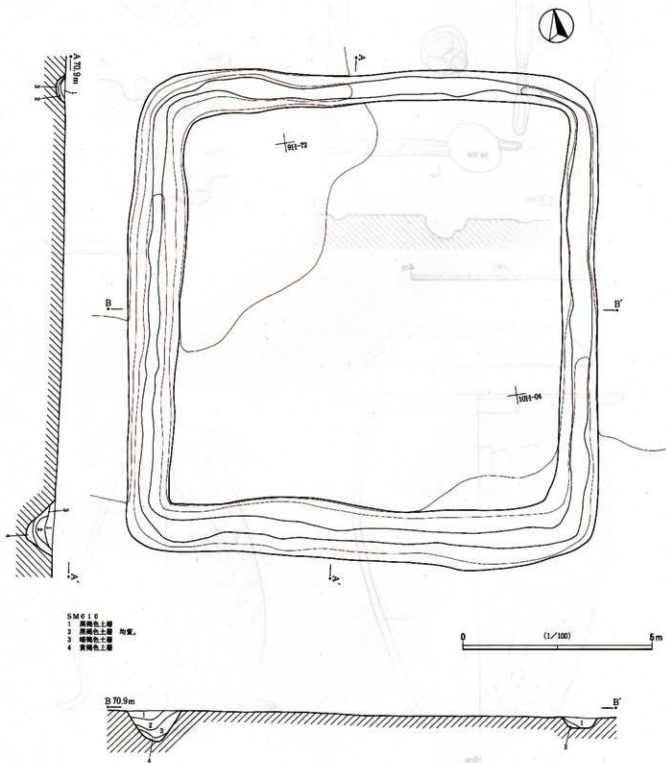
SM012 (第48図, 図版19)

位置 調査区西端にあり、SM011と南側で隣接する。

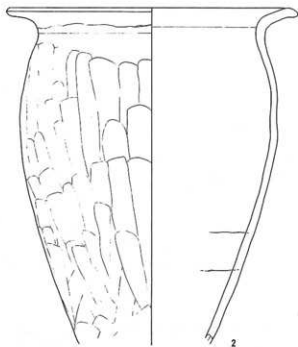
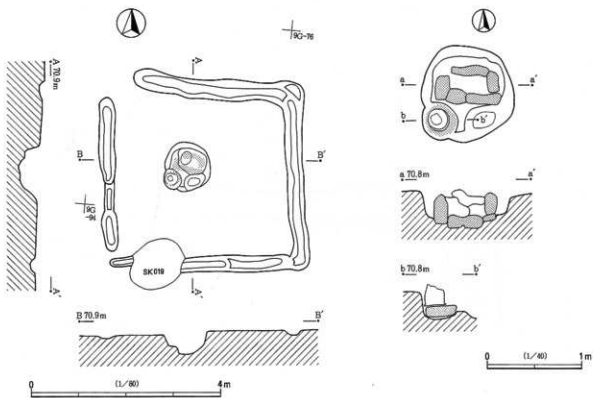
形態・規模 プランは正方形で、ほぼ四角の整った形態である。規模は墳丘部で5.1m×5.4m、周溝を含めると7.0m×7.2mである。

墳丘 確認出来なかった。

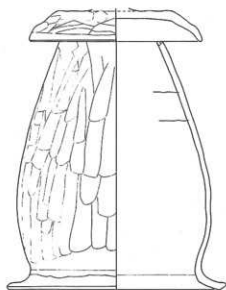
周溝 その規模や幅に比較して溝が深いという特徴がある。全体に溝底が北から南方向に低く傾いている。



第46图 SM010

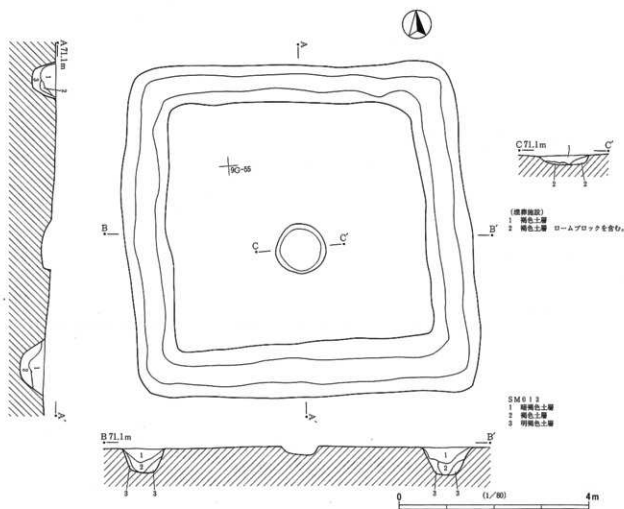


0 (1/3) 10cm



骨藏器出土状況

第47図 SM011及び出土遺物



溝の断面形状は丸みを帯びた逆台形で、覆土の色調は暗褐色～褐色土である。自然堆積であろう。

埋葬施設 中央に土坑が検出されたが、確認面から20cm足らずの深さであり、粘土や骨片も検出されなかった。それゆえ、埋葬施設かどうかの判断は簡単に下せないが、その位置から可能性が高いと判断される。

土坑は、平面形態がほぼ円形で、断面形状は皿状である。規模は1.1m×1.0mである。既述したように、粘土や骨片も検出されなかったが、遺存の度合からして不明としておきたい。

出土遺物 無し。

SM013 (第49図, 図版19)

位置 調査区南西端にあり、南側は谷に面する。

形態・規模 プランは方形で、規模は墳丘部で3.6m×3.5m、周溝を含めると4.7m×4.6mである。

墳丘 確認出来なかった。

周溝 幅については、南東コーナー付近で狭くなる他は概して一定である。溝底は全体に南西方向に低く傾いていたが、これはその方向が谷側に当たることに関連するのかもしれない。覆土の色調は暗褐色土で、自然堆積と思われる。

埋葬施設 検出されなかった。

遺物出土状況 遺物は少量の土師器片のみである。

出土遺物 特記事項なし。

SM014 (第49図, 図版19)

位置 調査区南西端にあり, 台地端に立地する。

形態・規模 プランはほぼ円形で, 規模は墳丘部で4.4m×4.2m, 周溝を含めると5.8m×5.3mである。

墳丘 確認出来なかった。

周溝 その断面形状は逆カマボコ形で, 溝幅については1m~0.5mと結構幅がある。覆土の色調は暗褐色土で, 自然堆積と思われる。

埋葬施設 検出されなかった。

遺物出土状況 遺物は土師器の細片が多く出土した。

出土遺物 特記事項なし。

2 火葬墓

SK009 (第50図, 図版20)

立地 台地南側東寄りに位置する。

形態・規模 形状はほぼ円形であり, 規模は0.5m程である。深さは現状で20cmである。素掘りの土坑のなかに, 蓋付きの土器を据えたものである。

覆土 土器の周囲にはシルトブロックを組まず, そのまま土で充填(褐色—暗褐色—暗褐色)している。

出土遺物及び出土状況 1は蓋として用いられた土師器であり, 専用のものである。外面を荒くヘラケズリする。2は骨蔵器専用の完形の無頸壺である。下胴部を荒くヘラケズリする。土器の中には火葬骨が入っており, 頭骨片, 下顎骨片, 上腕骨片, 寛骨片, 大腿骨片がみられる。頭骨の眉間に隆起が認められることから男性の可能性が高い。年齢は壮年の後半と推定される。

備考 特になし。

SK016 (第50図, 図版20)

立地 台地南側やや西寄りに位置する。

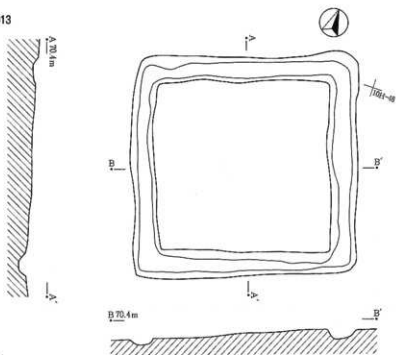
形態・規模 形状は楕円形であり, 規模は1m程である。深さは現状で20cmである。板状のシルトブロックを40cm×50cm四方に組み, その中に火葬骨を納めたと思われるが, 骨らしきものは骨粉を含め検出できなかった。

覆土 シルトブロックを組んだ後, 裏込めに暗褐色土を詰め, 内部の底面にも同様の土を敷いたようである。なお, 上部には多少白いシルトが散乱した状況であった。

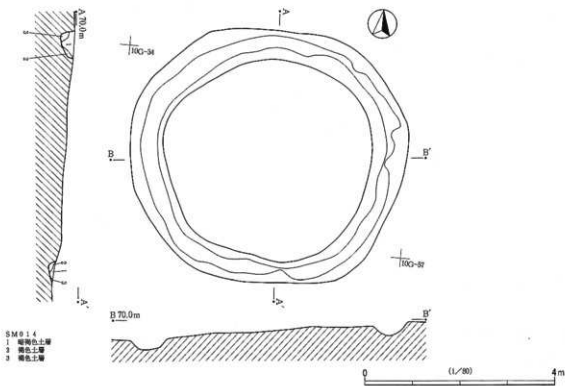
出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 底面にシルトブロックを据えるための四角い堀形が検出し得た。

SM013



SM014



第49図 SM013・SM014

SK017 (第50図, 図版20)

立地 台地南側やや東寄りに位置する。

形態・規模 形状は隅丸の方形であり、規模は1m程である。深さは現状で30cmである。板状のシルトブロックを60cm四方に組み、その中に火葬骨を納めたと思われるが、骨らしきものは骨粉を含め検出できなかった。

覆土 シルトブロックを組んだ後、裏込めに暗褐色土を詰め、内部の底面にも同様の土を敷いたようである。なお、上部には白いシルトが散乱した状況であった。

出土遺物及び出土状況 遺物は縄文時代の礫が若干出土したが、本址とは関係無い時代の遺物であり、特記しない。

備考 SK018と重複関係にあるが、本址が新しい。

SK029 (第50図, 図版20)

立地 台地南西端に位置する。

形態・規模 凹凸のある楕円形であり、長径1.2m×短径0.9m程である。深さは現状で0.4cmである。

覆土 ほほ木炭で充填されており、その間に土が混じる状況であった。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 SK030と重複関係にあるが、本址が新しい。火葬骨は検出出来なかったが、火葬墓の可能性が高いとみてここで報告する。

8Q-84グリッド出土の骨蔵器 (第51図, 図版35)

8Q-84グリッドから表土除去中に浅いレベルで甕が出土した。その状況からして、本来完形ないし完形に近い遺物と思われ、骨蔵器と判断してここに収載した。土師器甕転用の骨蔵器である。

9P-31グリッド出土の骨蔵器 (第51図, 図版35)

9P-31グリッドから表土除去中に浅いレベルで甕が出土した。その状況からして、本来更に上部が遺存するものであること、また、器形や整形技法から専用の骨蔵器と思われ、ここに収載した。土師器専用の骨蔵器である。

第5節 時期不明の遺構

SK003 (第52図, 図版21)

立地 台地東側に位置する。

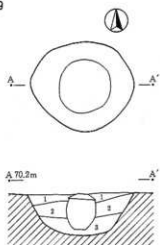
形態・規模 形態はほぼ半円形に近い形状で、規模は長径2.3m×短径1.2mである。深さは現状で35cmである。

覆土 覆土は下位に明褐色、上位に暗褐色の土が堆積しており、自然堆積とみてよいかと思われる。

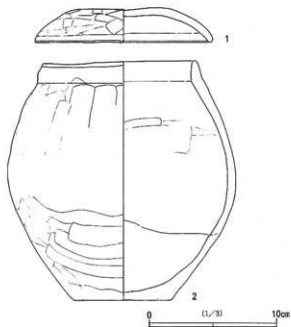
出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 形態的に他と異なったところがあり、時期判定に決め手を欠く。

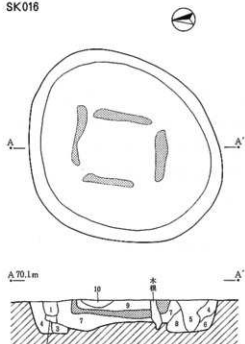
SK009



- SK009
 1 暗褐色土層 敷ら少い。
 2 暗褐色土層
 3 褐色土層

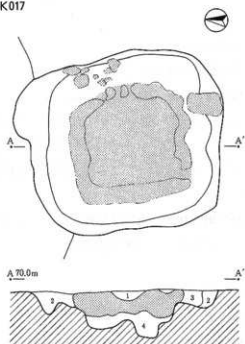


SK016



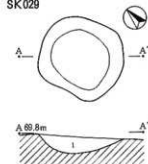
- SK016
 1 暗褐色土層
 2 暗褐色土層 粘土ブロックを少量含む。
 3 暗褐色土層 粘土ブロックを少量含む。
 4 暗褐色土層
 5 暗褐色土層
 6 暗褐色土層
 7 暗褐色土層
 8 暗褐色土層
 9 暗褐色土層 粘土粒を含む。敷ら少い。
 10 暗褐色土層

SK017



- SK017
 1 暗褐色土層
 2 暗褐色土層
 3 暗褐色土層 ロームブロックを含む。
 4 暗褐色土層 ロームブロックを含む。

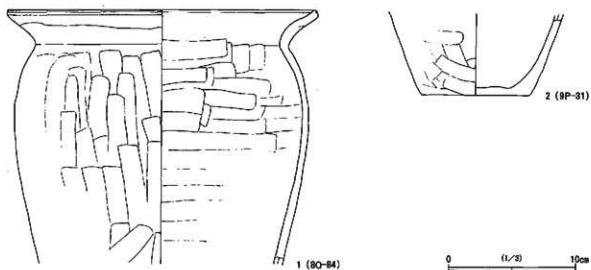
SK029



- SK029
 1 褐色土層 土質じりの木炭層。

SK009・SK016・SK017
 0 (1/30) 50cm
 SK029
 0 (1/40) 1m

第50図 火葬墓及び出土遺物



第51図 グリッド出土の骨蔵器

SK004 (第52図, 図版21)

立地 台地東側に位置する。

形態・規模 形態は楕円形で、規模は長径2.1m×短径1.9mである。深さは現状で52cmである。

覆土 覆土の下位に焼土層が、上位に細かな炭化材を含む層がみられる。何れも土坑の中央で集中的にみられることから、燃焼行為そのものが中央部に限定して行われたと推測するが、共に薄い層であり、焼き火程度のもと考えられる。なお、火葬骨片が検出されないことから、火葬墓ないし火葬跡の可能性はないと思われる。

出土遺物及び出土状況 遺物は早期縄文土器1点のみである。

備考 総合的に判断して、縄文期以降の所産と推測するが、近代以降の可能性もある。

SK008 (第52図, 図版21)

立地 台地南東に位置する。

形態・規模 形態は隅丸の方形で、規模はほぼ1m程度である。深さは現状で35cmである。

覆土 凹レンズ状の堆積ながら、中央最上層にまとまったかたちで木炭塊、焼土を含む。しかし、骨も出土せず火葬墓の覆土とは異なる。

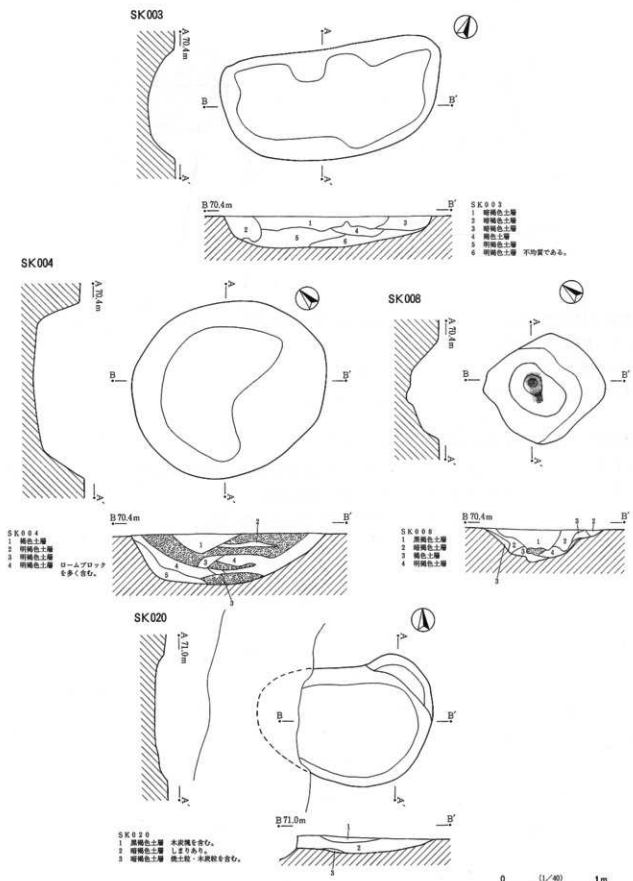
出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 特に無し。

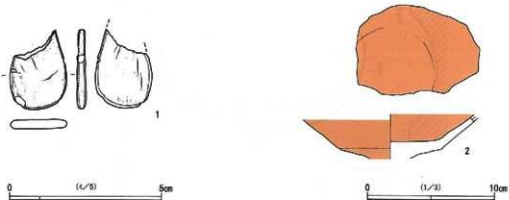
SK020 (第52図, 図版21)

立地 台地南西端に位置する。

形態・規模 形状はほぼ楕円形で、規模はSM010により先端が壊されているが、ほぼ長径1.4m×短径1.2m程度になろう。深さは現状で20cmである。



第52図 時期不明の土坑



第53図 遺構外出土遺物

覆土 緩やかな凹レンズ状の堆積であり，最上層に多くの木炭塊，最下層中央に焼土粒を含む。骨も出土せず火葬墓とも異なるようである。

出土遺物及び出土状況 遺物は出土しなかった。

備考 SM010と重複関係にあるが，本址が古い。

第6節 遺構に伴わない遺物（第53図，図版24・図版35）

石製品 1は滑石裂で，垂飾品と思われるが一部が欠損する。本来，楕円形の形状をなすもので，欠損部に透し孔があった可能性がある。縄文時代の所産と考えられる。

土器 2は9P-36グリッドから出土した古墳時代前期の高坏の坏部である。

第3章 ま と め

当遺跡では縄文時代早期、古墳時代前期、同後期、古墳時代末～奈良時代と大きく4時期に遺構が遺されている。もちろん、それ以外にも旧石器時代、縄文時代中・後期というように僅かに若干の遺物のみみられる時期もあるが、ここでは以上の4時期それも縄文時代早期の礫群と古墳時代～奈良時代の墓制に的を絞って考察を行うこととする。

第1節 縄文時代の礫群について

既に当遺跡礫群の概要については報告したところであるが、まず従来どんな手法で調査・分析がなされていたかという点から出発する。

平面分布 1点ずつないし小グリッド単位による採り上げを行い、図化する¹⁾。

垂直分布 1点ずつ採り上げたものを土層断面図におとすか、文章で出土層位を明示する。

属性 重量・被熱の有無・石質・寸法を分類・計測し図化・データ化する。

遺物との対応 縄文土器や縄文期の石器と礫群との関係をグリッド別や点別に図化・データ化する。

遺構との対応 陥穴や炉穴、集石土坑等と礫群との関係をグリッド別や点別に図化・データ化する。

もちろん、細部においては相違もあることながら、当地で最も多くの調査に当たった(財)君津郡市文化財センターでは礫群調査・報告の約束事になった感がある。ではそれで何がわかったかであるが、凡そ次のようになろうか²⁾。

①礫群は縄文時代早期に伴う。

②礫の分布状況は広範囲に濃淡あるも間断なく続く例が多い。

③その時期的推移は燃糸文～沈線文期までは緩慢な散布域のなかに小規模な集中地点を内包するが、奈良文期には炉穴と重なる傾向がみられる。

④礫は概して熱を受けている(被熱礫)。

⑤被熱礫は通常破砕(破断)していること。

⑥石質は砂岩、チャート、安山岩、流紋岩等バラエティに富んでおり、石器の石材とは必ずしも一致しない。

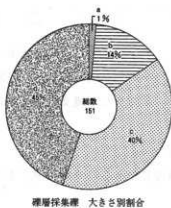
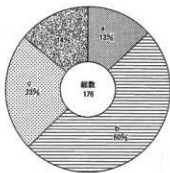
①の点は既にいわれていたことで単に追認したにすぎないが、当地に於ける縄文前期の遺跡で礫群の類例がないということもその区切りを考えるうえで重要である。

②の点は③とも密接に関連するものであるが、究極的には礫の主たる目的が何であったのかということに尽きるであろう。また、炉穴出現以前の焼礫行為がどのような条件で行われたか³⁾という点もその繋がりに上避け得ないと思われる。結局それは、④・⑤からも従来から指摘されてきた蒸焼き料理用の焼礫の可能性を指摘する⁴⁾に留まっていた感是否めない(タールの付着の有無なども注意されているが)。

石器と石材の関係は論を待たない。それは石質が石器の機能と密接に関連するからであるが、その一方、⑥については単なるデータの提示に終始した感もある。石を焼き蒸し上げると仮定した場合、それは石質や大きさが必要条件であったのだろうか。更に大きな問題点はその量である。一時期の所産ではないにしろ、例えば台木A遺跡のように、一つの遺跡で1tを超える量の礫をどこから持ってきたのか、という問題もある。

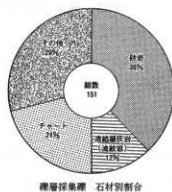
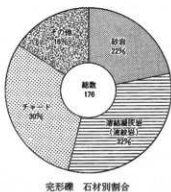
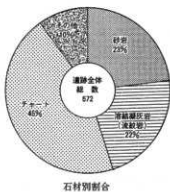
そこで、当遺跡ではこれまでの状況を斟酌した上で、データの操作を行った。第54図がそうである。ま

1. 大きさ割合

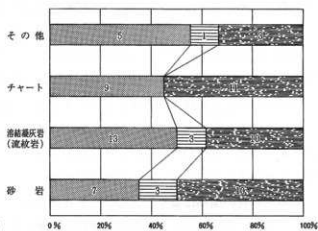
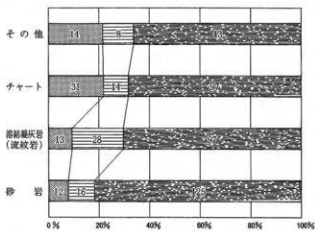


- a ... 最大長が100mm以上
- b ... 50mm ≤ 100mm
- c ... 30mm ≤ 50mm
- d ... 30mm以下

2. 石材別割合



3. 地点別割合



南東部礫群 石質別・被熱別・破損別割合 (数字は点数)

中央～南西部礫群 石質別・被熱別・破損別割合 (数字は点数)



第54図 礫群大きさ別・石材別・地点別グラフ

ず上段の円グラフであるが、完形礫を大きさ（最大長で分類）別に分け、それを近辺の礫層採集礫と比較したものである。礫を採集するという行為は当然目的と結びついているはずであるから、当初の採取礫の大きさ（被熱によって破碎していく）はやはりそれに沿った行為である、という前提に基づいている。比較資料は筆者が台地の断面（ローム層下約3～5m）から任意に大きめの礫を採取したもので、圧倒的に多い1cm前後の礫は当初から除外した結果である。

両者を比較して言えることは、a・bまでの大きな礫は選択して遺跡に持ち込んでいるのではないかつまり、5～10cmの間の礫が望ましい、ということである。それは筆者が意図的に大きな礫を採取してもc・dが大半を占めたからであり、恐らく更に多くの採取資料（とりわけ小櫃川の河床部など）との比較によってその選択性はより明確になるはずである。

次に、中段の円グラフだが、全資料、完形礫のみ、採集礫別に石材ごとの比率を求めたものである。チャートの比率が大きく変わっているのは、それが熱を受けると割れやすいからだが、採集礫と比較して割合こそ異なれ、石材そのものは一致する。これは市原市高滝～君津市小糸に至る礫層構成礫と大差ないことから何れにせよ遺跡近辺から求めた結果であろう。ただ、その他とした石材中、礫層採集礫では泥岩が多くを占めるのに対し、遺跡出土礫はその逆となることから、泥岩は当初から除かれたといつてよいだろう。

一方、下段の棒グラフはそれを地点別に比較したもので、南東の集中域が焼成・破碎礫が多い一方、中央～南西部では明瞭な違いを示している。焼礫の回数差（使用し続けるサイクルの違い）と見るのが自然だが、緩慢な礫散布を示す後者が、例えば1回のみ焼礫行為で終わったと書いてよいかどうか、調査の精度からして一つの見通しと言わざるを得ない。但し、石材におけるチャートの割合の差は明瞭であり、それが何を意味するかについてはその属性とも併せ更に検討する必要がある。

このように、考察とはいえそれは礫群調査を目的としたい調査内容をデータ化したという点で、不十分のそりしは免れないが、整理担当者としては遺された遺物に最大限の配慮をした結果である。従来の報告例を瞥見するにつけても、消耗品としての礫消費の全体像が今ひとつ見えてこない。更なる一步には焼礫調理の実験・復元や周囲の自然礫との多面的な比較・分析¹⁾を必要とする。民俗例の採取もそうであろう。何れも該当する遺跡の調査のみでは得られるものではなく、逆に言えば礫群の存在が予想される場合、当初から目的をもった調査が要求されているといつてよい²⁾。

注1 一概には言えないが、遺構に伴うものでなければ整理工程も考慮して小グリッドによる一括採り上げで十分と考える。

2 もちろんこれだけでなく、被熱と大きさとの関係を表したものの（大きなものや小さなものは被熱の割合が低いという結果が得られている）や、完形礫ではどの程度の大きさが多いのか（大凡長径3cm～8cmという結果がある）、といった個別の分析例もある。どちらも礫の機能を考えるうえで示唆に富む。

①安藤道由ほか 1995 「台木A遺跡」（財）君津都市文化財センター

② * 1996 「上ノ山A・上ノ山B・下根田A・下根田B・御所塚遺跡」（財）君津都市文化財センター

③中龍 隆ほか 1996 「兎谷・上時田・下時田・向台木・台木B遺跡」（財）君津都市文化財センター

3 焼土跡ないし焼土遺構と呼ばれている遺構がそれに該当しようか。

4 この点、既に礫群の一角にある集石遺構と関連付け礫の消費サイクルに及んだ先駆的業績がある①。また、集石遺構については、掘り込みを有する例も多少あって、そこでは礫に「黒色付着物」も報告されている②。更に、集石土坑内の礫について、この石材の偏り（流紋岩が多い）と被熱礫の割合の多さから集石土坑の性格（石焼料理用の穴）に

ふみこんだ例もある③。その一方、貯蔵等の用途を指摘する場合もある④。

①石田広美 1980 「君津広域水道用水供給事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 君津広域水道企業団

②稲葉昭智 1995 「向神納里遺跡第1地点」『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』（財）君津都市文化財センター

③新田浩三ほか 1999 「矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書2」（財）千葉県文化財センター

④注2②文献と同

5 近年具体的な指摘がなされている。

①森本和男ほか 1998 「東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書1—市原市海保野口遺跡—」（財）千葉県文化財センター

②注3①安藤報告

6 既にあげた調査手法自体、その後の整理に大きな負担となっているのが現状である。有効な調査手法を採用し相互に比較可能なデータとして積み重ねていく必要がある。その意味で、いわゆる「包含層」調査の本質が問われていると考える。

第2節 古墳時代の集落について

当遺跡における古墳時代の住居跡は、前期が2軒、後期が4軒であり、計6軒となる。前期の2軒は台地南東端にあり、広がりはいずれもなかった。一方、後期の4軒はその逆に南東端にはないものの、間隔をおいて東西に展開する。この内S1003、S1004、S1006はいずれも方位が同じで、同時期の集落と捉えられる。S1005についてもS1003を拡張した結果であるから一応このグループの延長に捉えられよう。それに比して、S1007は方位が大きく異なり、出土土器もより新しい様相を示していることから下の所産としてよい（後期の枠内ながら）。

ではその集落の広がりであるが、北側はもちろん未調査区ながら約500m離れた三ツ田台遺跡で古墳時代前期～後期の集落跡が調査されている。時期的には当遺跡の前期集落よりも先行し、終末は併行する。同じ台地続きでもある点を考慮すると一繋がり集落の可能性はあるが、そうすると南北700mにわたる大きな集落ということになってしまう。但し、周囲数km程度の調査例を概観する限りでは、古墳時代前期前半の集落が多いわりには類似する集落は少ない。そのことを考えると、集落のあり方は不明ながらも、何れにせよ当遺跡の北側に集落の中心部がある可能性が高く、今後の調査の機会には留意すべきであろう。

集落と古墳群との関係については既調査の内容からして踏み込んだ考察は控えざるを得ないが、猪尻遺跡や上宮台遺跡で後期の集落が検出されたことから、鎌水川中流域の右岸台地上（それも多少谷を入った台地上）に断続的に該期の集落が形成されている可能性が高まったといえる。ここは従来古墳の分布が希薄なところでもあり、それはそれで集落と墓域との関係を示すものではなからうか。

またその性格としては、水稲や畑作に依存する農耕集落であつたらうという以外特に指摘し得ない。近世の稲作がそうであつたように、従来上総では川沿いの地は比高差が大きく不安定な生産を余儀なくされてきた。台地間の狭い谷や谷戸地を過小評価することは適当でなく、集落の立地もその意味において評価されるべきであらう。

第3節 奈良時代の墓制について

猪尻遺跡では奈良時代の墓跡が計18基検出されている。この内、13基は方形周溝を有するもの、1基は

円形周溝を有するもの、4基は土壌である（1基は確証に欠ける）。

方形周溝を有する遺構 この方形周溝を有する遺構であるが、県内ではかなり普遍的にみられる遺構ながら、従来様々に呼称されてきた。方墳、方形周溝状遺構、方形墳墓、方形区画墓等、要するに墓としての認識は同じながら、方形に溝がめぐりかつそれが墳丘を有するか否かという点に名称としての異同があったと思われる。また、古墳時代との繋がりとという観点も影響を与えている。つまり、方墳（古墳）はあくまでも古墳時代の墓制であるという考え方である。

このような「混乱」自体はさして珍しいことでもなく、ある意味では考古学用語の歴史的な宿命とさえいってよい。なぜなら、その性格がはっきりしない段階ではとりあえずその形態から仮称するのが常であるから。

とはいえ、昨今では小地域毎の墓制の変遷がかなり詳細に迫れるようになり、その地域性も明瞭になりつつある。それ故、当遺跡の該種遺構についてその性格や年代、地域的な位置付けなどをみたくて、名称等基本的な問題についてもふれてみたい。

猪尻遺跡では既述したように大きく3タイプの遺構が検出されている。即ち、①方形周溝を有するも埋葬施設が確認できないもの、②方形周溝を有し、かつ区画内の土坑に骨蔵器ないし火葬骨を納めるもの、③円形周溝を有するもの3者である。この内、①については、更に区画内が10mから15mと大きい一群（SM006、SM007、SM008）とそれ以下の一群（SM009、SM010）とに分離できよう。

年代 まずその年代であるが、既に指摘されているように¹⁾、骨壺専用器の場合、編年が確立していないこともあってそのみでは位置付けは困難である。それ故、限られた伴出遺物から大凡の年代を付与することとなる。

SM008の周溝覆土からは須恵器広口壺・長頸壺頸部が出土している。胎土等から湖西窯産と推測され、7世紀末～8世紀初頃と編年される²⁾。これは近接する竈穴住居跡（SI006：6世紀後半）を最早意識することがないという意味でも矛盾はない。また、SM005とSM011から土師器転用の甕が出土しているが、8世紀中頃～後半に位するとみられる³⁾。これ以外は何れも骨壺専用器である（それぞれ身と蓋3点ずつ）。

これに加えて遺構のあり方を検討してみよう。これら方形周溝を有する①タイプのなかにSM008が入ることからして、①タイプが古い一群であることは間違いない。恐らく、SM006～SM008は7世紀末から8世紀というある程度の時間幅のなかではあるが、最初に築かれた墳墓と考えるとよい。また、②タイプとの過渡的な様相を呈するSM009、SM010はその後の8世紀前半代の所産とすれば、SM011からSM013がそれに続くという意味で、SM011の出土遺物の年代とも矛盾しない。③タイプも形態こそ違え同じ流れのなかで理解されよう。

一方、SM005を含む東端のグループは空白域を置いて調査区南東部に集中する。ここは②タイプのみであり、西側の②タイプと内容が似通っている点からして、新たに生まれたグループと思われる。ただ何れにせよその年代幅は8世紀の内に納まるのではなかろうか（後述の点からも）。なお、周溝を持たず、土坑に骨蔵器（SK009）や粘土槌（SK016・SK017）、焼土・炭化物を含む（SK029）一群がある。これらは墳墓から多少離れて（SK029は異なるが）存在するもまったく無関係にある訳ではない。それは、むしろ墳墓から一定の距離を置きながらも、墓域の一角に新たに営まれた墓の一つと捉えられる。つまり、前代の墳墓を意識した結果であり、当遺跡における墓制の終末を告げるあり方と考えられる。

このように、その墓制の流れつまり年代は次のように整理されよう。

SM006～008—SM009・010・013

7世紀末～8世紀前半 →SM012・011・014—SM001・002・003・004・005

8世紀中頃～後半

→SK009・SK016・

SK017・SK029

8世紀後半

性格 次にその性格であるが、何れもが墓址であることは間違いないとしても、問題はその内容である。というのは、この種墓制の調査・研究の歴史が浅いこともあってか、その歴史的な位置付けが一定せず、ためにそれが名称にも現れたというべきだろう。

問題を解く鍵はやはり「古墳」との接点にあるとみる。この点、既に古墳研究の側からのアプローチがあって、7世紀後半のいわゆる終末期方墳が両者をつなぐ位置にあることはいうまでもない。そして、事実、終末期方墳から8世紀代の墳墓へと継続する調査例も多くみられる。千葉市六通神社南遺跡・六通金山遺跡では7世紀代に横穴式石室を有する方墳群、8～9世紀代により小形で埋葬施設が不明な「方墳」群がその周囲に広く展開する。袖ヶ浦市雷塚遺跡も同様ながらこちらは二重周溝で横穴式石室の方墳を初現とする。概要報告ながら、市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡の場合はその大規模な例といつてよい⁴¹。

この7世紀代は、東総～上総南部の岩山地帯で横穴墓が盛んに築かれた頃であり、その接点部では更に複雑な様相を呈する。例えば、木更津市中尾地区では、古墳群（石神古墳群）→横穴墓群（石神横穴墓群）という変遷を辿るグループがある一方、尾根続きの丘陵では継続して古墳群を営むグループ（東谷古墳群）が併存する。そして、後者はその後「方形区画墓」を採用するといった具合である。報告者のいう「墓制の変更」が何に拠るのかはさておき、横穴墓との関係はどう清算されるのであろうか⁴²。

それでは、埋葬施設はどうかというと、実はこの点に大きな変化がみとれる。どんなに遅くとも7世紀末を前後する辺りで石室は消滅し、土壇や地下式土壇が地域性をもって現れるが、埋葬施設が確認できない例が最も多い。あるいは葬送儀礼の場と一部に捉えられたのもそのためである⁴³。厚葬の風が廃れたといつてしまえばそれまでだが、筆者はそれのみではなく、葬法そのものも変化したのだと考える。

というのは、8世紀に入ると火葬墓が旧相模國ほかで採用され⁴⁴、以後とりわけ8世紀後半～9世紀代に関東一円で盛行する。本県ではその導入はむしろ早いほうながら⁴⁵、一口に火葬墓といっても実は様々である。試みに容器から分類すると、①粘土櫃、②木櫃、③石櫃（合口専用石櫃、組合式石櫃）、④骨蔵器（専用土師器、転用土師器、須臾器・灰釉陶器）、になろうか。当地では、この内①～③までが比較的早く出現⁴⁶、後に④が主流となる。

但し、木櫃といつてもはつきりそれと確認できた例はなく、多くは火葬骨・焼土が土壇の中央に納まっている場合（覆土の状況しかり）や釘の存在から判断しているのであって、それゆえ布や何らかの有機質の素材も同様である。また、粘土や石の場合も、群馬県のように硬い岩石を加工した例はほとんどなく、その多くが当地のローム層下のシルト層をブロック的に採取したり、東総の泥岩ないし上総南部の蒸盤層を切り取ったものである。前者の場合、本来軟質であることから粘土として報告されることが多い。また、①や②は③ないし④の外容器の形態をとる場合もある。

そこで埋葬施設から当遺跡をみると次のようになろう。

| | |
|--------------------------|-------------------------------------|
| <埋葬施設が確認されない群：A> | SM006・SM007・SM008・SM009・SM013・SM014 |
| <墳丘域に土壌を有する群：B> | SM002・SM003・SM010・SM012 |
| <墳丘域土壌中に土師器専用骨蔵器を掘える群：C> | SM001・SM004 |
| <墳丘域土壌中に土師器転用骨蔵器を掘える群：D> | SM005・SM011 |
| <土壌中に土師器専用骨蔵器を掘えるもの：E> | SK009 |
| <土壌中に粘土櫃を構える群：F> | SK016・SK017 |
| <土壌中に焼土・炭の見られるもの：G> | SK029 |
| <土師器転用骨蔵器のみ：H> | 8Q-84グリッド骨蔵器 |

A群は既にふれたように当遺跡の墓址の始原をなすものが中心を占めるが、その一方、B群はそれに隣接するか南東グループでも相対的に大きな一群でかつA群寄りのグループが該当する。時期的にもA群に後続するものとみてよい。C群、D群がその次ぎに位することはいうまでもない。つまり、当初出土遺物などから大きく3分割した内の2段階についても、埋葬施設のあり方による段階差を示している可能性が高いのである。

そこで本題に戻るが、骨蔵器内には総て火葬骨が確認されたことから、C、D各群は骨蔵器を納めた土壌を埋葬施設とした墳墓であることは間違いない。そして、B群についても土壌の規模からしてそれは改葬骨か火葬骨（小児ならありうるだろうが）を納めたものとするのが妥当であろう。では土壌が確認されないA群はということになるが、墳丘中に本来あった埋葬施設（それはB群と同様であったとも思われるが）が失われた結果ではないかと推測する。もちろん、この手の墳墓のなかで地山に切り込んだ明瞭な土壌墓をもつものはとりわけ初期で見つかっているし¹⁰⁾、その相違はなぜなのかという疑問は当然であろう。この辺の理解が葬制転換期ひいてはその受容の温度差ないし地域差であって、それは次に述べたい。ここではこれら墳墓が形態や規模の上では古墳時代終末期から継続した流れのなかにあるのに対し、遺骸処理や埋葬施設の点では大きな変化を迎えていた、そういう時代の所産であると要約することができよう。

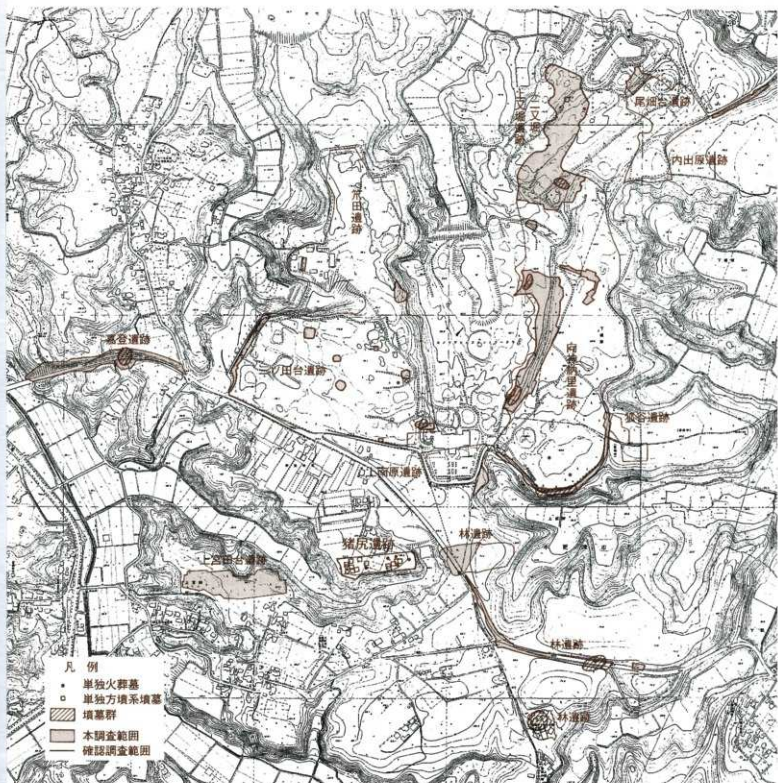
そして、周辺の遺跡のあり方からして、猪尻墳墓群に葬られた人々の集落が谷を越えて望む位置にある上宮田台遺跡（その一部は平成14、15年度発掘調査済み）であったこともほぼ間違いない。お互いに一部の調査とはいえ両者を対応することでその性格はより確かなものとなろう。

猪尻墳墓群の位置付け 最後に当墳墓群の奈良時代墓制における地域的な位置付けについてふれる。それによって、全体の流れの中の位置を知ることができるからである。

歴史時代の墓制も実に多様である。それはかつて東日本埋蔵文化財研究会によって行われた集合作業¹¹⁾によっても明らかである。こと千葉県に関していえば、方墳の遺風がその後末永く続いたという点でこれまた際だった地域性を有している。それだけではない。本県でも細かくみると実に多様である。但し、平安時代に入る頃にはほぼ骨蔵器に収斂されるので、とりわけ奈良時代において、ということになろう。

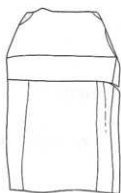
それは大きく6ブロックに大別される。

猪尻遺跡が位置するのは旧上総国の君津郡域、なかでもその北東寄りの地域である。現在の行政区画と過去の墓制とがもちろん単純に附合することはなく、袖ヶ浦市北部～市原市中部辺りが境界となりそうである¹²⁾。そうすると、当遺跡は旧君津郡域内の少なくとも外縁部ではありえず、その意味では墓制自体もノーマルなかたちで営まれたはずである。まず、8世紀初め頃に相対的に大きな方墳系が築かれ、次にそれより劣る方墳系、それに多少後れるかたちで墳墓の中央ないし一角に骨蔵器や粘土・木櫃（シルトプロッ

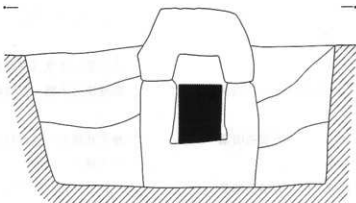


第55図 猪尻遺跡周辺の調査状況と奈良時代墳墓検出状況 (袖ヶ浦市地形図1:2,500 縮小1:10,000)

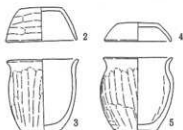
- ① 枠線内は確認調査を含めた既調査済みの遺跡範囲である。
- ② 更に本調査済みの遺跡の場合はスクリーントーンで図示した。
- ③ 検出された遺構の表記は凡例に示した。



1
三ツ田台遺跡方形区画墓 (K40)
出土石壇



同左 土壇土坑と石壇断面及び木櫃遺存状況



三ツ田台火葬墓 (K06グリッド) 出土土葬器
※3, 5共に正位で間隔は約20cm



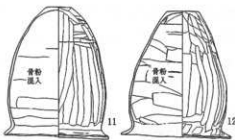
6
向神納里火葬墓 (SK-001)
出土骨蔵器



7
向神納里遺跡火葬墓 (M-11)
出土骨蔵器



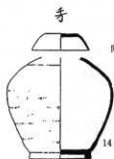
8
向神納里遺跡方形区画墓
(SE044) 出土骨蔵器



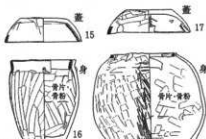
11
二又堀遺跡火葬墓 (SI096内) 出土骨蔵器
※11, 12共に正位で間隔は約50cm



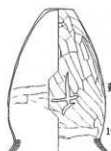
13
上宮田台出土骨蔵器



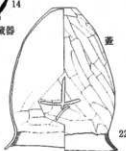
14
大竹古墳群出土骨蔵器



15
林遺跡火葬墓 (D-7Xグリッド) 出土骨蔵器



19
林遺跡方形区画墓 (3号)
出土骨蔵器



22
林遺跡方形区画墓 (4号)
出土骨蔵器



20
※3号埋葬施設土坑内に身(19)と蓋(20),
身(21)というかたちで、約1mの間隔を
おいて出土

引用文献

- 1 【京田遺跡・三ツ田台遺跡
同上】
6~11, 13, 14 【大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅳ】
11, 12 【大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅲ】
15~18 【林遺跡Ⅲ】
19~23 【林遺跡Ⅲ】

第56図 周辺遺跡出土骨蔵器一覽 (1のみ1/5, 2~21は1/4)

| 地域 | 高塚墳系 | 対応する埋葬施設ないしそのみで独立した墳墓 |
|---------------------|-------------|--------------------------------|
| <旧下総国> | | |
| 旧東葛郡域 | | 土坑墓・土墳（骨蔵器） |
| 旧東葛郡域以外 | 方墳系墳墓 | 側壁挟込土壇・土坑墓・土壇（骨蔵器） |
| <旧上総国> | | |
| 市原市域 | 方墳系墳墓 | 地下式横穴・側壁挟込土壇・土坑墓・土壇（骨蔵器・石櫃・木櫃） |
| 旧君津郡域 | 方墳系墳墓 | 土坑墓・土壇（石櫃・粘土櫃・木櫃・骨蔵器） |
| 長生・夷隅郡域 | （横穴墓） | |
| 山武郡域 | （横穴墓）・方墳系墳墓 | 方墳系のみ側壁挟込土壇・土坑墓・土壇（骨蔵器） |
| <旧安房国> | （横穴墓） | （旧君津郡域に準ずるか） |

*横穴墓はもちろん方墳系とは同列に扱えず、その年代もせいぜい8世紀前半までにすぎずそれゆえ括弧付きとした。また、側壁挟込土壇とは県内では用いない名称ながらより相応しいと考え採用した。その他、櫃（木櫃はともかく粘土や石櫃等）の表現等問題もないではないが、慣用として使った。

クを納める土壇を営む。そして、それと一部併行ないし最終的には周溝のない、つまり方墳の遺風を捨て去り土壇のみの姿となる。8世紀も後半のことである。

もちろん、これのみではなく、遺跡によっては須恵器・灰釉陶器の蓋付短頸壺（8世紀代が多い）や、石櫃（当地ないし外来産）を用いる場合もある。また、墓誌かとされる鉄板を伴う例も希に確認される。埋葬施設や容器また副葬品の差が短絡的に被葬者の階層に結びつくとは思えないが、当遺跡ではその何れにも該当せず、その意味においてもノーマルなあり方といえるだろう。

墳丘と名称 最後に、墳丘と名称にふれておく。方墳系墳墓が墳丘を有していたことは間違いないことである。それなら何故方墳と呼ばなかったかといえば、もちろん歴史時代の所産ということもあるが、やはり墳丘と埋葬施設が明瞭でなかった例が多かったからであろう。

節の最初にもあげたが、方形周溝状遺構、方形区画墓、方形墳、方形墳墓、方墳というように、報告書の記載はまったく様々であるが、最も使用例の多い前二者が墳丘を意識していない点はあたかも弥生時代の方形周溝墓のごとき経緯と類似する。とはいえ、古墳よりも墳丘そのものが小規模であったことは、概して周溝の幅が狭く、当然、盛土が低かったことは十分予測できることである。

市原市海保野口遺跡¹²¹では、群中最大の径25mの一つの「方形周溝状遺構」で明瞭にマウンドが確認されている（現状で約50cm）。径20m以上の例でありながらこの低墳丘であるから、それより小さいもの（残りは10m未満のもの4基）では尚更である。しかし、ここでは埋葬施設は検出されなかった。なぜだろうか。

そこで、あるということ的前提とすれば、墳丘内でも旧表土上というようなレベルではなく、まさしく盛土内に営まれた可能性が高いと思わざるを得ない。有名な群馬県武井廃寺跡の葺石を有する八角形の「古墳」（径20m、高さ現状で約2m）は墳頂部に石櫃を設けたものであった。それをもって総てを推し量ることは出来ないが、留意しておくべきだろう。近隣での一例を挙げる。

市原市奉免上原台遺跡は7世紀末から始まる大規模な方墳系墳墓群（50基以上）であるが、その内の1

基で須恵器短頸壺と蓋が周溝それも上位と中位から出土している。短頸壺が骨蔵器であったことはほぼ間違いないが、それが周溝も半ば以上埋まった後世に何らかの事情で転落しないうち捨てられたものであろう。この墳墓には土壌も検出されないところから、やはり墳丘中に埋納されたとみるのが自然ではなかろうか。専用の須恵器骨蔵器自体出土は希であるから（そもそも骨蔵器自体それほど多い訳ではなくだから好んでそのみが報告された経緯がある）、それ以外の木櫃やシルトブロックの場合（実はこれが最も多い）はほとんど表土化してしまうであろう。

少なくとも8世紀始め以降、「埋葬施設をもたない方形周溝遺構」が本来墳丘を有し、かつ埋葬施設もあり、それが火葬ないし改葬の結果によるとしたら、名称を含めて再検討を迫られることになる。古墳の墳とはマウンドを有する墓のことで、それが政治的な区切り（古墳時代—飛鳥時代—奈良時代）とは関係なく連続性をもっているとすれば、もちろん方墳でもかまわないだろう。しかし、それも限られた地域での現象であるとしたら、且つそれだけでなく埋葬施設、というより葬制自体には既に火葬という時代の流れが及んでいたとしたら、その過渡的な現象にはやはり相応しい名称が必要だろう。また、終末期方墳というような名称が定着している現状では尚更である。それ故、ここでは方墳系墳墓という名称を用いた。即ちそれは見掛け上方墳の形態を踏襲しながらも歴史時代の墳墓としての位置付けという意味である。この点、希にみられる「円墳」も同様で、それは円墳系墳墓ということになる。但し、両者共実際の墳丘形態までは意味しないことは言うまでもない。

注1 長谷川 厚 1983 「歴史時代墳墓の成立と展開（1）—特に相模・南武蔵の火葬墓の様相を中心として—」

『古代第7・76合併号』早稲田大学考古学会

2 東海土器研究会 2000 『須恵器生産の出現から消滅—畿内・湖西瀬織年の再構築—』

3 次の文献を参考とした。

佐生 衛 1985 「永吉台遺跡群住居址出土土器について」『永吉台遺跡群』（財）君津郡市文化財センター

4 浅利幸一 1994 「諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和63年度』（財）市原市文化財センター

5 西原崇浩 1996 『石神横穴墓群・石神古墳群・石神遺跡』（財）君津郡市文化財センター

6 山岸良二 1982 『「方形周溝状遺構」研究序説（I）—千葉県現状分析—』『東邦大学付属東邦中学校 研究紀要』第2号

7 注1長谷川論文参照。ただその年代観については一部において異なる意見（村田ほか 1990）もあった。

村田文夫・増子章二 1990 「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究（下）—川崎市域における事例研究をふまえて—」『川崎市民ミュージアム紀要』第3集

8 房総南部（上総・安房）における火葬墓の消長については既に當眞嗣史氏が概観している。

當眞嗣史 1995 「上総・安房国奈良・平安時代の墓制について」『東日本における奈良・平安時代の墓制—墓制をめぐる諸問題—』第Ⅱ分冊 東国聖蔵文化財研究会

9 この点、遺物を伴出する良好な資料に乏しく、僅かに打越岱遺跡①、下時田遺跡②、當塚遺跡SX012③等が8世紀前半の内に収められるかと思われる程度である。しかし、7世紀末～8世紀初め頃に始原を有する方墳群の多くで、始原期からⅠないしⅡ段階後の遺構で埋葬施設に火葬骨を有する例は多い（例えば市原市外迎山遺跡等）。

①小沢 洋ほか 1989 「打越岱遺跡」（財）君津郡市文化財センター

②次の文献中に記載がある。

松本 勝ほか 2003 「首都圏中央連絡自動車道（木更津—東金）埋蔵文化財調査報告書1」（財）君津郡市文化財センター

- ③富原紀子はか 1999 『雷塚遺跡』(財)君津郡市文化財センター
- ④木村和紀 1987 『外迎山遺跡・岩沢遺跡・山見塚遺跡』(財)市原市文化財センター
- 10 市原市奉免上原台遺跡①や袖ヶ浦市谷ノ台遺跡②などである。市原地域に特異な地下式横穴を埋葬施設とする場合も多く火葬をいし改葬を前提とする(もちろん直葬もあろうが)産物といえようか。なお、この点については名称も含めその理解は必ずしも定まらないが、関連する文献③を掲げる。また、改葬という点も奇異に聞こえようが、横穴式石室や横穴墓自体が造葬・改葬を前提にしたところがあるし、また、齊藤忠氏は歴史時代以降の改葬について更に留意する必要があることを度々述べている通りである④。
- ①田中清美ほか 1992 『奉免上原台遺跡』(財)市原市文化財センター
- ②能城秀吾ほか 1997 『谷ノ台遺跡Ⅱ』(財)君津郡市文化財センター
- ③-1 渡辺修一 1983 『群小区画墓』の終焉期『研究連絡誌』第6号(財)千葉県文化財センター
- ③-2 木村和紀 1980 『房総における改葬系区画墓の出現期-方形(円形)区画改葬墓の提唱-』『市原市文化財センター研究紀要』Ⅰ(財)市原市文化財センター
- ③-3 田中新史 1980 『古墳時代終末期の地域色-東国の地下式土壌墓を中心として-』『古代探叢』Ⅱ 早稲田大学出版部
- ④齊藤 忠 1996 『墳墓の考古学』齊藤忠著作選集4
- 11 東日本埋蔵文化財研究会編 1995 『東日本における奈良・平安時代の墓制』第Ⅰ～Ⅳ分冊
- 12 両者の相違は、君津地域の方墳系に側壁込込土壌や地下式横穴が伴う例がほとんどいかに、市原地域の方墳系に土壌内骨蔵器を伴う例がないという点に要約できよう。その意味で、市原市中部の南名山遺跡例は貴重である(方墳系に土師器専用骨蔵器を土壌内に置く)。
- 半田整三 1995 『市原市南名山遺跡』(財)市原市文化財センター
- 13 森本和男ほか 1998 『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-市原市海保野口遺跡-』(財)千葉県文化財センター

付章 遺物属性表

第1表 旧石器時代出土石器属性表

| 採回番号 | グリッド | 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長 (mm) | 最大幅 (mm) | 最大厚 (mm) | 重量 (g) | 出土層位 | 標高 (m) | |
|------|------|-------|----|----|----------|----------|----------|--------|-------|--------|--------|
| 第6区 | -1 | 8M-79 | 1 | 剥片 | 流紋岩 | 49.15 | 45.01 | 14.20 | 22.15 | Ⅲ層 | 69.660 |
| * | -2 | 8L-63 | 1 | 剥片 | チャート | 32.70 | 33.40 | 12.01 | 9.19 | Ⅳ層 | 68.952 |
| * | -3 | 8L-64 | 1 | 剥片 | 黒曜石 | 27.80 | 15.05 | 6.80 | 2.41 | Ⅳ層 | 68.975 |
| * | -4 | 9K-08 | 1 | 剥片 | チャート | 36.24 | 25.35 | 8.39 | 6.59 | Ⅴ層 | 68.199 |
| * | -5 | 8K-98 | 1 | 剥片 | 流紋岩 | 56.79 | 34.50 | 8.35 | 13.56 | Ⅴ層 | 68.322 |

第2表 縄文時代出土石器属性表

| 採回番号 | グリッド | 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長 (mm) | 最大幅 (mm) | 最大厚 (mm) | 重量 (g) | 備考 | |
|------|------|--------|----|-----------|----------|----------|----------|--------|---------|--------------------|
| 第19区 | -1 | SM007 | 4 | 尖頭器 | ホルンフェルス | 56.07 | 17.70 | 10.16 | 9.43 | |
| * | -2 | SK001 | 1 | 石鏃 | ホルンフェルス | 33.10 | 19.01 | 3.60 | 1.75 | |
| * | -3 | 10G-96 | 1 | 石鏃 | ホルンフェルス | 27.15 | 19.89 | 3.55 | 1.44 | |
| * | -4 | 9M-89 | 1 | 石鏃 | 珪質頁岩 | 22.70 | 17.00 | 3.79 | 1.03 | |
| * | -5 | 10H-89 | 1 | 石鏃 | ホルンフェルス | 22.05 | 20.05 | 4.52 | 1.51 | |
| * | -6 | 62T | 2 | 石鏃 | チャート | 22.53 | 15.34 | 4.60 | 1.39 | 平基鏃 |
| * | -7 | SI001 | 65 | 石鏃 | チャート | 24.91 | 21.62 | 7.18 | 3.31 | 未製品の可能性? |
| * | -8 | 10N-20 | 1 | 石鏃 | 黒曜石 | 28.19 | 18.80 | 4.80 | 1.54 | |
| * | -9 | SI001 | 1 | 石鏃 | チャート | 14.45 | 16.85 | 2.50 | 0.51 | |
| * | -10 | 9Q-27 | 1 | 石鏃 | チャート | 17.90 | 14.09 | 3.51 | 0.36 | |
| * | -11 | SK003 | 1 | 石鏃 | 黒曜石 | 12.60 | 16.60 | 4.41 | 0.69 | |
| * | -12 | 60T | 2 | 局部磨製石斧 | 砂岩 | 109.25 | 46.39 | 23.20 | 210.11 | |
| 第20区 | -13 | 58T | 3 | 腰器 | チャート | 45.25 | 40.74 | 21.75 | 38.07 | |
| * | -14 | 9J-39 | 2 | 俵器 | チャート | 34.07 | 45.89 | 5.74 | 9.60 | |
| * | -15 | 9J-39 | 2 | 楔形石器 | チャート | 35.76 | 31.44 | 8.76 | 9.97 | |
| * | -16 | 9J-39 | 2 | 楔形石器 | チャート | 32.74 | 38.03 | 5.66 | 6.70 | |
| * | -17 | SI-001 | 71 | 楔形石器 | チャート | 26.19 | 23.99 | 9.72 | 7.81 | |
| * | -18 | 9J-39 | 1 | 楔形石器 | チャート | 24.29 | 30.26 | 6.55 | 3.61 | |
| * | -19 | 35T | 3 | 二次加工のある剥片 | 珪質緑色凝灰岩 | 24.29 | 18.35 | 8.51 | 3.30 | 9N-66の剥片と同一母岩の可能性 |
| * | -20 | 9N-75 | 1 | 二次加工のある剥片 | 珪質緑色凝灰岩 | 41.27 | 17.87 | 9.69 | 5.18 | 片部の可能性? |
| 第21区 | -21 | 10G-44 | 1 | 箆石 | 溶結凝灰岩 | 48.50 | 98.75 | 65.48 | 297.89 | 二次焼熟 |
| * | -22 | 10G-04 | 1 | 箆石 | 溶結凝灰岩 | 97.20 | 67.75 | 47.79 | 335.19 | 二次焼熟 |
| * | -23 | SI003 | 47 | 箆石 | 砂岩 | 119.30 | 80.42 | 41.70 | 457.78 | |
| * | -24 | 9Q-73 | 1 | 箆石 | 砂岩 | 96.21 | 75.61 | 32.07 | 254.11 | |
| * | -25 | SI001 | 32 | 箆石 | 溶結凝灰岩 | 161.39 | 74.09 | 49.21 | 931.24 | |
| | | SI001 | 2 | 剥片 | 頁岩 | 13.28 | 15.09 | 2.44 | 0.56 | |
| | | SI001 | 27 | 剥片 | チャート | 21.62 | 13.95 | 3.01 | 0.81 | 焼熟? |
| | | SI002 | 5 | 剥片 | 黒曜石 | 25.45 | 14.36 | 14.23 | 3.60 | |
| | | SI003 | 22 | 剥片 | 黒曜石 | 17.97 | 19.27 | 4.96 | 1.40 | |
| | | SI004 | 2 | 剥片 | 珪質頁岩 | 17.33 | 11.13 | 3.79 | 0.66 | |
| | | SM001 | 4 | 剥片 | チャート | 21.52 | 20.13 | 7.32 | 3.70 | |
| | | SM007 | 2 | 剥片 | チャート | 34.80 | 24.70 | 8.51 | 6.00 | |
| | | 8L-56 | 1 | 剥片 | 黒曜石 | 54.54 | 25.27 | 15.96 | 20.21 | |
| | | 8L-88 | 1 | 剥片 | 珪質頁岩 | 27.99 | 28.69 | 6.76 | 4.70 | 10L-26の剥片と同一母岩の可能性 |
| | | 9J-39 | 1 | 剥片 | チャート | 21.44 | 23.99 | 2.57 | 1.48 | |
| | | 9J-39 | 2 | 剥片 | チャート | 29.62 | 21.66 | 4.78 | 3.68 | |
| | | 9N-66 | 2 | 剥片 | 珪質緑色凝灰岩 | 19.00 | 16.10 | 6.57 | 1.91 | |
| | | 9N-79 | 2 | 剥片 | チャート | 24.79 | 23.63 | 4.30 | 2.47 | |
| | | 9P-88 | 1 | 剥片 | 珪質頁岩 | 28.08 | 9.46 | 6.66 | 2.17 | |
| | | 10G-27 | 1 | 剥片 | ホルンフェルス | 26.66 | 15.65 | 5.97 | 1.53 | |
| | | 10L-26 | 1 | 剥片 | 珪質頁岩 | 30.89 | 26.75 | 8.13 | 6.80 | |
| | | 10L-36 | 1 | 剥片 | チャート | 25.69 | 22.86 | 5.48 | 3.05 | |
| | | 22T | 1 | 剥片 | チャート | 28.64 | 17.08 | 11.38 | 7.42 | |
| | | 53T | 2 | 剥片 | 珪質緑色凝灰岩 | 18.86 | 15.67 | 2.80 | 1.05 | |
| 第53区 | -26 | 8N-18 | 1 | 石製品 | 蛇紋岩 | 25.99 | 18.51 | 2.90 | 2.27 | 磨削か? |
| | | SI001 | 4他 | 箆石 | 砂岩 | 200.60 | 112.50 | 87.41 | 2800.00 | 4.17.23.33の接合 |
| | | SI001 | 3 | 砥石 | 流紋岩 | 122.10 | 83.50 | 56.80 | 779.03 | |

表7表-1 土師器・須恵器観察表

| 器物番号 | 用途番号 | 種類 | 形状 | 部位 | 単位・寸 (出土層) [出土例] | | 重量 | | 数量 | | 土質 | 色 | | 保存状態 | 時代 |
|--------------|------|-----|-----------|-----------|------------------|------|------|--------------|--------------|--------------|-------|-----|-----|------|---------|
| | | | | | 口径 | 高さ | 最大径 | 底径 | 器高 | 内径 | | 外径 | 内面 | | |
| S300 | 1 | 土師器 | 高杯 | 杯縁1/4 | 口径 14.6 | 5.5 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒・雲母 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| | 2 | 土師器 | 高杯 | 杯縁1/4 | 16.4 | 5.3 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒・雲母 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| | 3 | 土師器 | 高杯 | 脚底欠 | 17.4 | 5.6 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒・雲母 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| | 4 | 土師器 | 高杯 | 脚底欠 | 18.3 | 6.0 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒・雲母 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| | 5 | 土師器 | 高杯 | 脚底欠 | 18.5 | 6.0 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒少 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| | 6 | 土師器 | 高杯 | 脚底欠 | 17.2 | 6.0 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒・雲母 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| 7 | 土師器 | 高杯 | 口縁一部 | 口縁一部 | 15.6 | 11.4 | 12.9 | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒・雲母 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| 8 | 土師器 | 埴 | 口縁一部 | 口縁一部 | 11.2 | 9.4 | 10.6 | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 細砂 | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| 9 | 土師器 | 壺 | 7割程度 | 7割程度 | 6.8 | 6.8 | 6.8 | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒多 | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤 | スズケ |
| 10 | 土師器 | 壺 | 口縁・上脚底1/2 | 口縁・上脚底1/2 | 18.9 | 15.5 | 25.6 | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒 | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| 11 | 土師器 | 壺 | 口縁と脚底一部 | 口縁と脚底一部 | 17.1 | 14.3 | 21.7 | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒 | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| 12 | 土師器 | 高杯 | 2/4 | 2/4 | 16.0 | 11.7 | 15.4 | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| 13 | 土師器 | 埴 | 口縁一部 | 口縁一部 | 8.9 | 6.4 | 9.1 | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒 | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤 | 野原 |
| 14 | 土師器 | 小壺 | 7割程度 | 7割程度 | 14.5 | 11.2 | 14.2 | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒 | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤 | 野原 |
| S300 -200 | 1 | 須恵器 | 杯 | 杯縁1/2 | 15.0 | 6.0 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 長石類混入 | 灰色 | 灰色 | 無 | 古墳 |
| | 2 | 土師器 | 壺 | 口縁・上脚底1/4 | 16.6 | 11.1 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒・雲母 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 古墳 |
| | 4 | 土師器 | 壺 | 7割程度 | 15.6 | 10.3 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒・雲母 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 古墳 |
| | 5 | 土師器 | 壺 | 口縁1/4 | 14.5 | 5.4 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒少 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 古墳 |
| S300 | 1 | 土師器 | 杯 | 杯縁1/4 | 13.7 | 5.6 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒・雲母 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| | 2 | 土師器 | 壺 | 口縁・上脚底1/4 | 16.9 | 11.9 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒・雲母 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 野原出土 古墳 |
| | 3 | 土師器 | 壺 | 口縁・上脚底1/4 | 16.9 | 11.9 | | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 口径 體高 雙方向のナナ | 砂粒・雲母 | 赤砂 | 赤砂 | 赤 | 野原出土 古墳 |

第7表-2 土師器・須器器類表

| 器種 番号 | 器形 | 器種 | 器法 | 単位：cm (括号内) (匳寸換) | | | 内径 | 器高 | 器色 | 器文 | 器質 | 時代 |
|----------|-------|---------|----------|-------------------|--------|--------------------------------|--------------------------|-----|-----|-----|----|----|
| | | | | 口径 | 器口徑 | 器底 | | | | | | |
| SN04 | 鉢3型 4 | 土師器 甕 | 器土器作 | 30.0 | (18.0) | 器口上方 器口下のヘラナテ 器口下方 器口下のヘラナテ | 器口上方のヘラナテ 器口下方のヘラナテ | 赤褐色 | 無 | 赤褐色 | 古銅 | |
| SN07 | 鉢3型 1 | 土師器 杯 | 器土 | 33.0 | 4.1 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 無 | 赤褐色 | 古銅 | |
| | 2 | 土師器 杯 | 器土 | 34.0 | 3.7 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 無 | 赤褐色 | 古銅 | |
| | 3 | 土師器 杯 | 器土 | 16.8 | 7.6 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 無 | 赤褐色 | 古銅 | |
| | 4 | 土師器 甕 | 口縁一筋縁一筋文 | 17.0 | 5.4 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| | 5 | 土師器 杯 | 口縁一筋縁のノリ | 15.0 | 3.3 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| | 6 | 土師器 杯 | ノリ | 13.4 | 3.0 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| SN001 | 鉢3型 1 | 土師器 杯 | 口縁 | 13.0 | 3.0 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| SN004 | 鉢3型 1 | 土師器 甕 | 器土器作 | 13.7 | 4.3 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| | 2 | 土師器 甕 | 器土器作 | 10.8 | 6.5 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| SN006 | 鉢3型 1 | 土師器 甕 | 器土 | 20.5 | 6.4 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| SN008 | 鉢4型 1 | 須器器 広口径 | 口縁一筋文 | 30.2 | 11.1 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| | 2 | 須器器 広口径 | 器土 | | | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| SN011 | 鉢4型 1 | 土師器 甕 | 器土器作 | 17.8 | | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| | 2 | 土師器 甕 | 器土 | 22.1 | 17.0 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| SN009 | 鉢3型 1 | 土師器 甕 | 器土器作 | 13.9 | 2.6 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| | 2 | 土師器 甕 | 器土器作 | 15.0 | 7.8 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| SN44 | 鉢3型 1 | 土師器 甕 | 口縁一筋縁ノリ | 34.2 | 10.9 | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| SN43 | 2 | 土師器 甕 | 口縁一筋縁ノリ | | (3.0) | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |
| SN45 | 鉢3型 3 | 土師器 甕 | 器土器作 | | | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方 器口下のヘラナテ | 口縁 器口下のヘラナテ 器口上方のヘラナテ | 赤褐色 | 赤褐色 | 赤褐色 | 古銅 | |

写真図版





調査前遺跡状況（北側より）



確認調査状況



遺跡（○印）の旧状
第一軍管地方迅速図縮小
（1：30,000）明治10年代

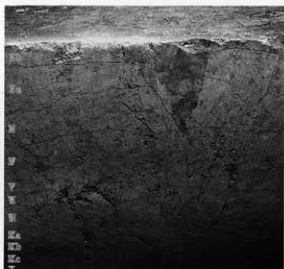


確認トレンチ（T90）遺構検出状況（SM013）



遺跡南西の谷
（東→西）

〈旧石器時代〉

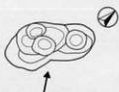


ローム層断面 (T41:調査区中央)



ローム層断面 (T61:調査区東端)

〈縄文時代〉



SK032 (炉穴)



SK011 (陥穴)



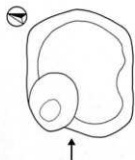
SE001



SE002



SK001



SK005



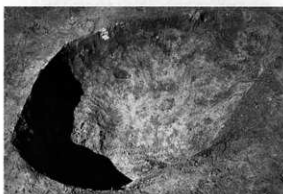
SK006



SK007



SK010



SK012



SK013



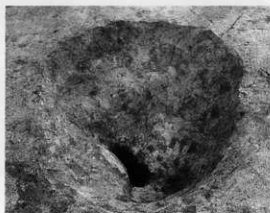
SK014



SK015



SK018



SK019



SK021・022



SK024



SK025



SK026



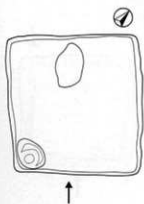
SK027



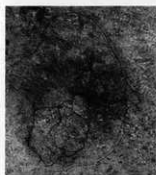
SK028



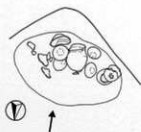
SK030



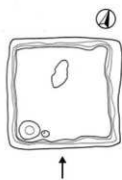
SI001 全景



SI001
灶



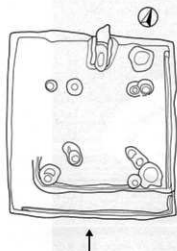
SI001 貯藏穴遺物出土狀況
住居跡 (SI001)



SI002 全景



SI002 土層断面

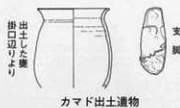


SI003・SI005 全景

住居跡 (SI002・SI003・SI005)



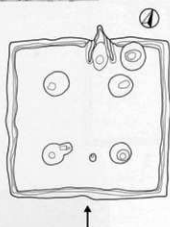
S1003・S1005カマド



S1003・S1005土層断面

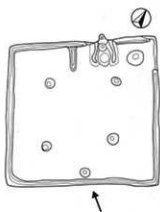


S1004カマド

S1004 全景
住居跡 (S1003・S1005・S1004)



SI006 全景



SI006 カマド



住居跡 (SI006・SI007)



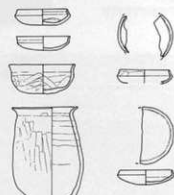
SI007 カマド



SI007 カマド内遺物出土状況



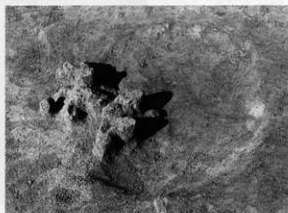
SI007 カマド周辺遺物出土状況



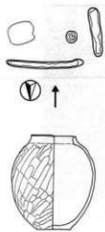
SI007カマド内及び
周辺出土遺物



SK023



SK031



SM001
埋葬施設内骨蔵器



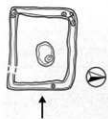
SM001 全景



SM001 周溝覆土断面



SM001 埋葬施設内骨蔵器検出状況



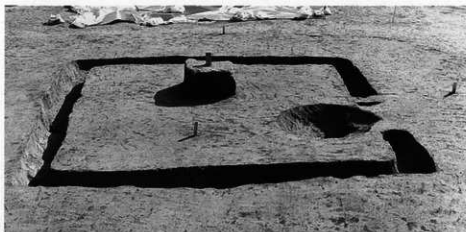
SM002 全景



SM002 周溝 (西側) 覆土断面



SM002 周溝 (北側) 覆土断面



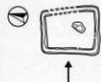
SM003 全景



SM003 周溝 (北側) 覆土断面



SM003 埋葬施設覆土断面

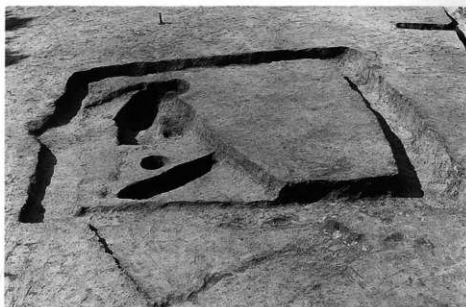


SM005 全景



SM005
埋葬施設内骨蔵器

SM005 埋葬施設内骨蔵器検出状況



SM004 全景



SM004
埋葬施設



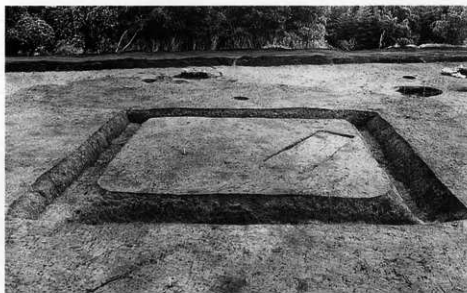
埋葬施設内
骨藏器



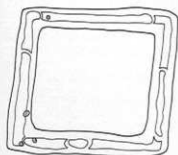
SM004 埋葬施設内骨藏器検出状況



SM004 埋葬施設覆土断面



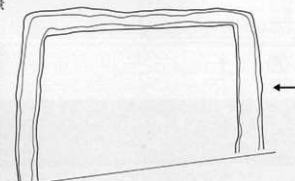
SM006 全景



⑤



SM006 周溝 (南側) 覆土断面



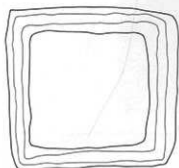
⑤



SM007 全景
方墳系墳墓 (4)



SM007 周溝（東側）覆土断面



SM008 全景



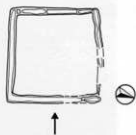
SM008 周溝（東側）覆土断面



SM008 周溝（南側）覆土断面



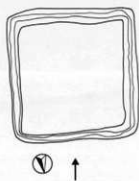
SM009 全景



SM010 全景



SM010 周沟 (南侧) 覆土断面



方墳系墳墓 (6)



SM011 全景



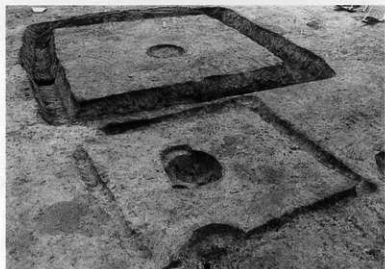
SM011 埋葬施設内
骨蔵器埋設状況 (復元)



SM011 埋葬施設検出状況

SM011・012 ▶
全景

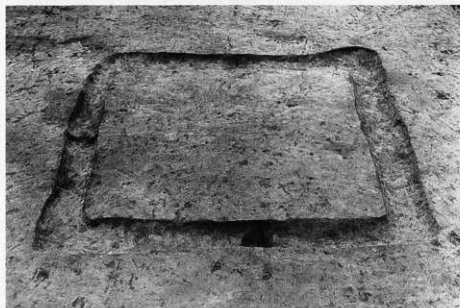
奥 012
手前 011



方墳系墳墓 (7)



SM012 全景



SM013 全景



SM014 全景



SK009 内骨蔵器出土状況



SK009 全景



SK016 全景・粘土甗検出状況



◀SK009内骨蔵器



SK016 粘土甗確認状況



SK017 全景・粘土甗検出状況



SK029

火葬墓及び遺物出土状況

〈時期不明の土坑〉



SK003



SK004



SK008

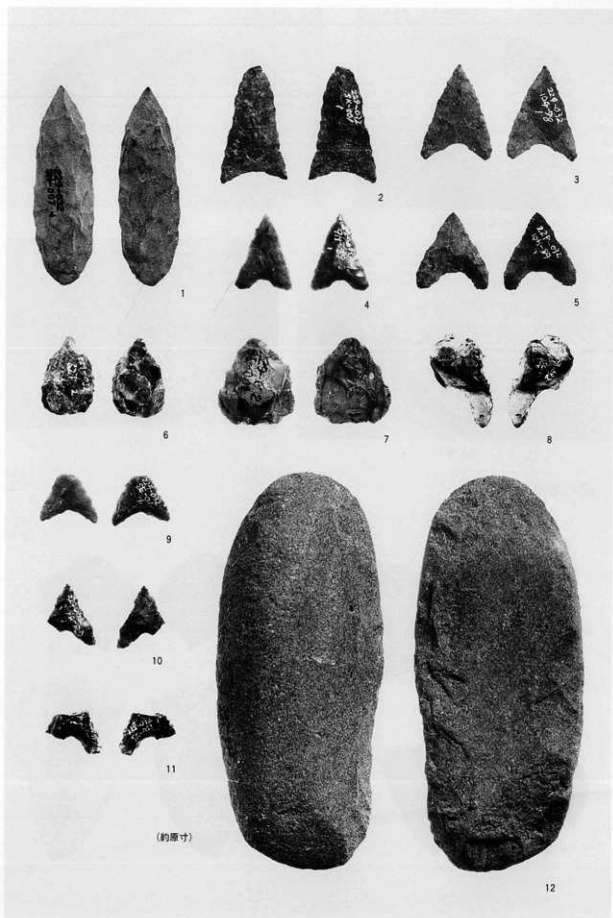


SK020

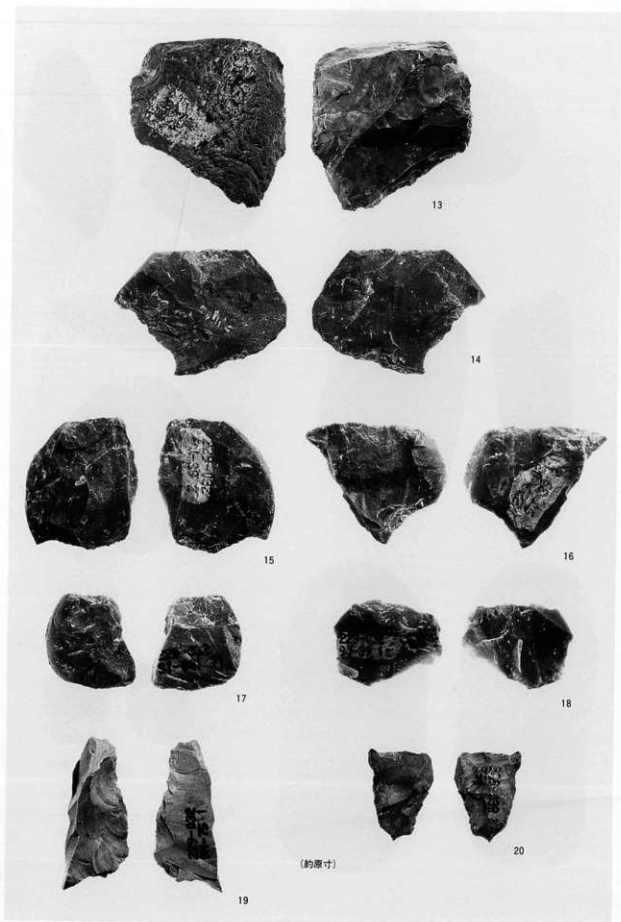
〈旧石器時代の遺物〉



時期不明の土坑と旧石器時代の遺物



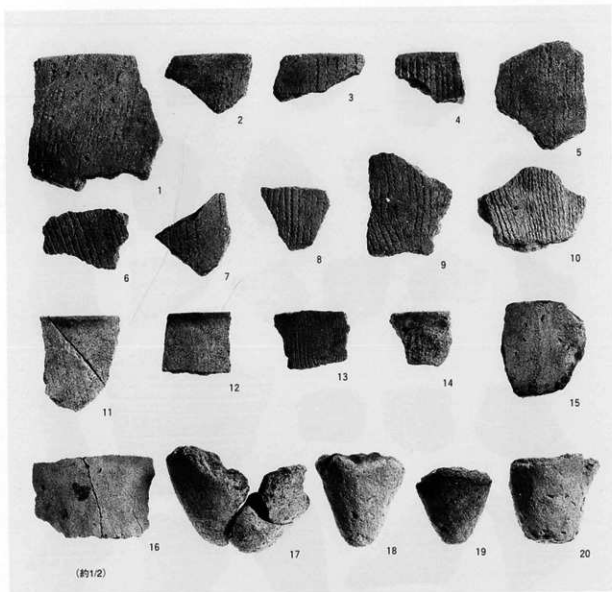
縄文時代の石器 (1)



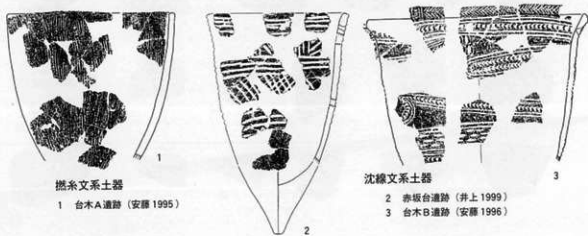
縄文時代の石器 (2)



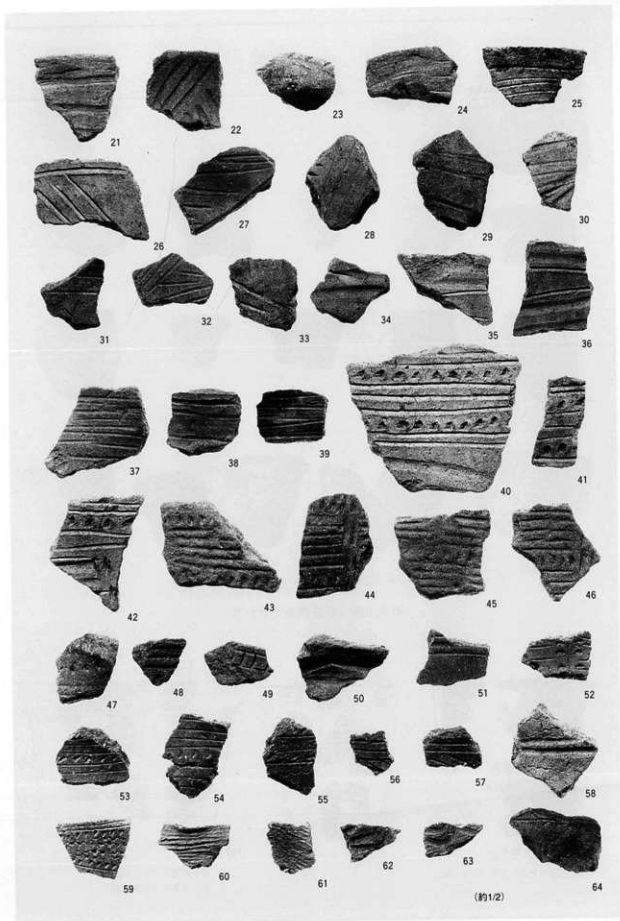
縄文時代の石器 (3)・石製品



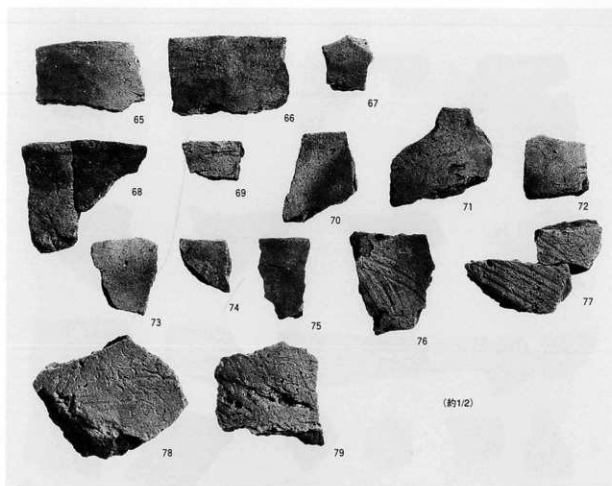
縄文土器 (早期撚糸文系土器)



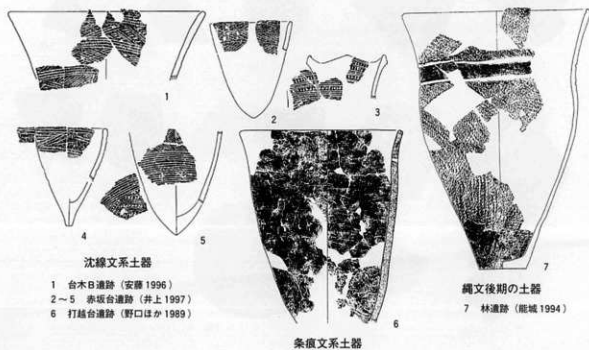
周辺遺跡出土の参考資料 (1/4)



繩文土器（早期沈線文系土器）



縄文土器 (早期条痕文土器)



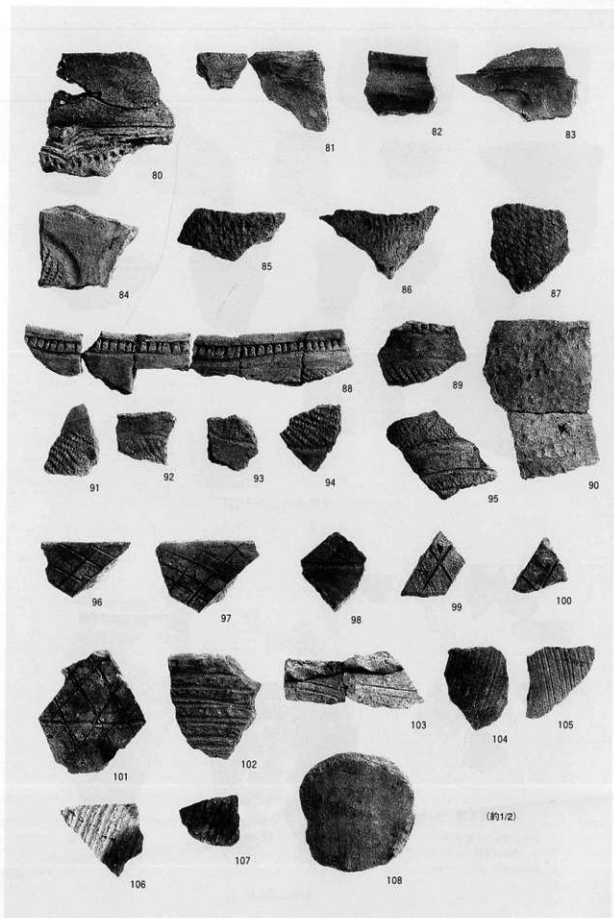
沈線文土器

- 1 台木日遺跡 (安藤 1996)
- 2~5 赤坂台遺跡 (井上 1997)
- 6 打越台遺跡 (野口ほか 1989)

縄文後期の土器

- 7 林遺跡 (熊城 1994)

条痕文土器



縄文土器（中期・後期）・土製品



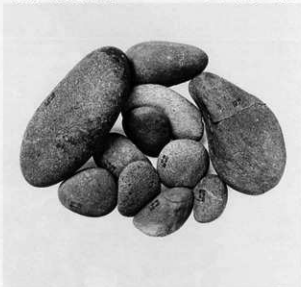
火成岩（溶結凝灰岩など）非焼成・完形



堆積岩・変成岩（砂岩・ホルンフェルスなど）非焼成・完形



火成岩（溶結凝灰岩など）焼成・完形



堆積岩・変成岩（砂岩・ホルンフェルスなど）焼成・完形



火成岩（溶結凝灰岩など）焼成・破損



堆積岩・変成岩（砂岩・ホルンフェルスなど）焼成・破損



堆積岩 (チャート)

非焼成・完形



堆積岩 (チャート)

焼成・破損

左上：砂岩
右上：チャート



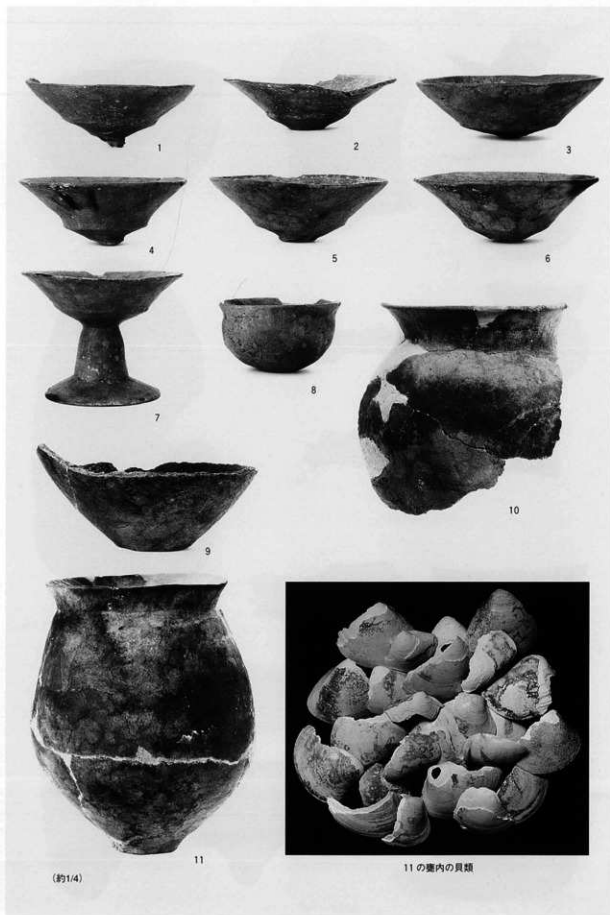
左下：泥岩
右下：火成岩

自然礫層採取礫

自然礫層断面
(袖ヶ浦市滝ノ口) ▶



縄文時代礫群石質別・被熱別・破損状況別集合写真(2) / 自然礫層採取礫

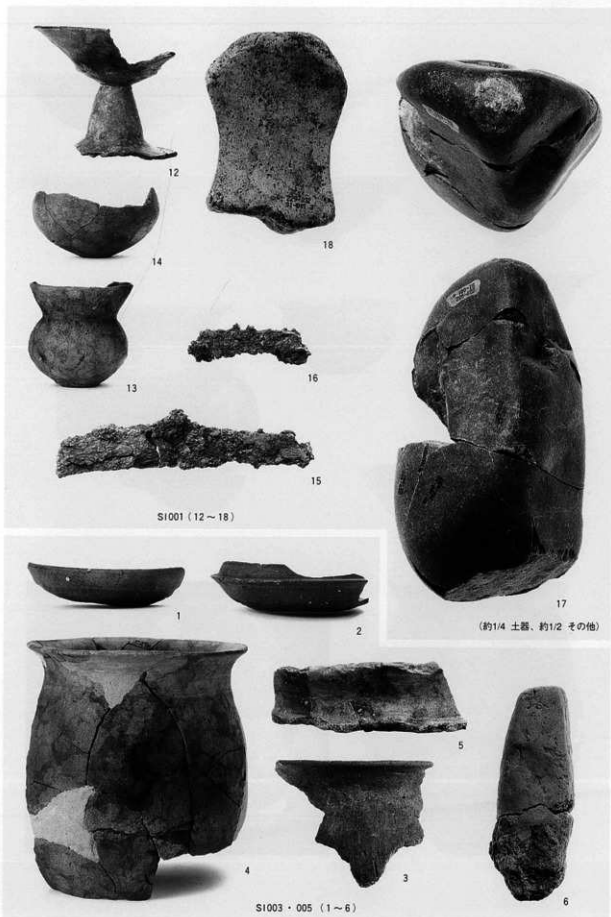


(約1/4)

11

11の壺内の貝類

SI001 出土遺物 (貯藏穴内)



SI001 (12~18)

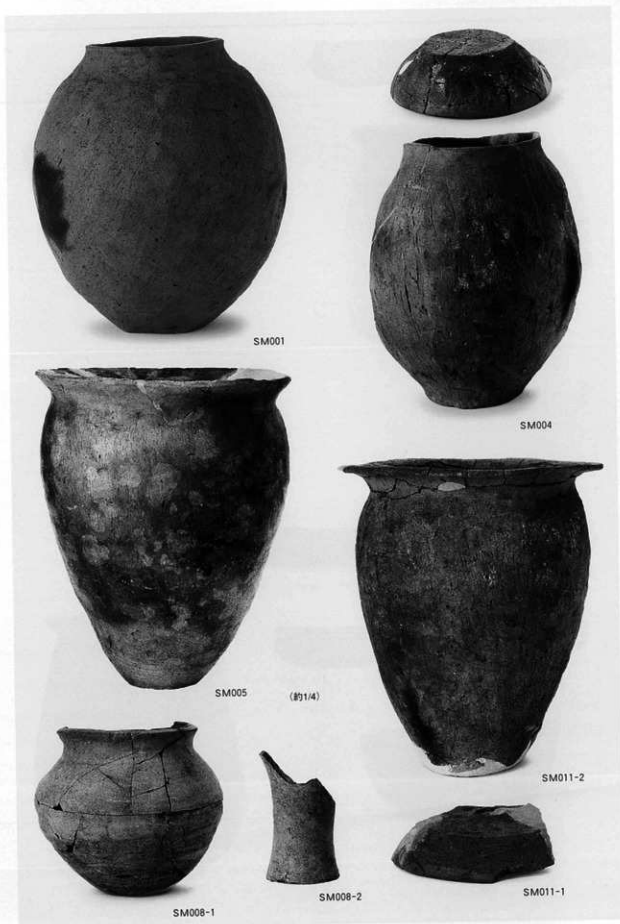
(約1/4 土器, 約1/2 その他)

SI003・005 (1~6)

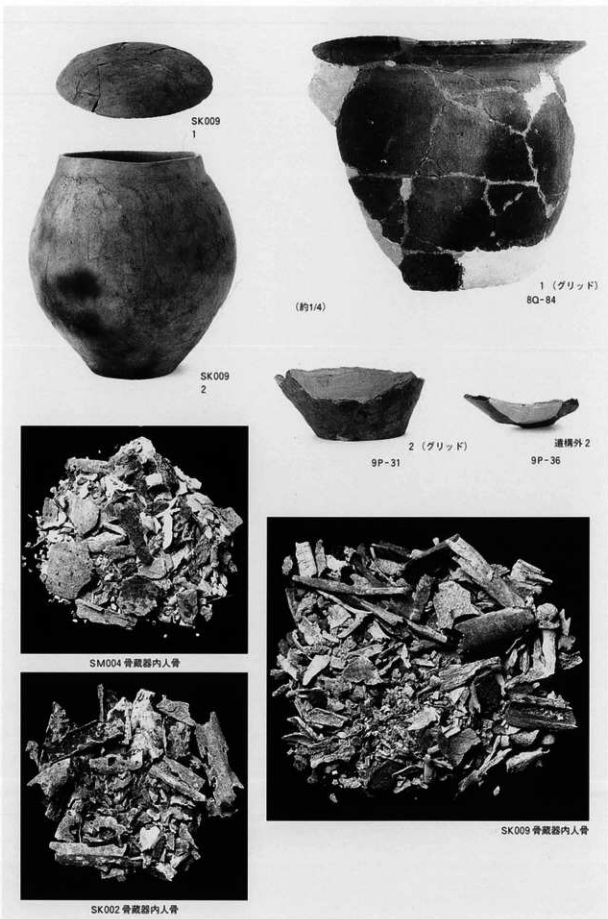
SI001 出土遺物 / SI003・SI005 出土遺物



SI004 出土遺物 / SI006 出土遺物 / SI007 出土遺物



SM001 ~ 011 出土遺物



SK009 はか火葬墓と出土火葬骨／遺構に伴わない遺物

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|---------------|--|------------------------|--|---|--------------------|---|------------------------|------|
| ふりがな | しゅとけんちゆうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうふんかざいちようさほうこくしょさん | | | | | | | |
| 書名 | 首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書3 | | | | | | | |
| 副書名 | 袖ヶ浦市猪尻遺跡 | | | | | | | |
| 巻次 | 第3集 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 千葉県教育振興財団調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第526集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 小高春雄 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 千葉県教育振興財団 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 Tel 043-422-8811 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2005年10月28日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コ ー ド 市町村 遺跡番号 | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| 猪尻遺跡 | 千葉県袖ヶ浦市上宮 田字猪尻221-2 | 229 | 032 | 35度 21分 14秒 | 140度 01分 16秒 | 2003.04.07～ 2003.12.25 | 9500m ² | 道路建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺跡 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 猪尻遺跡 | 蔵地・ 集落跡・ 墳墓群 | 縄文時代・ 古墳時代・ 奈良時代 | 縄文時代早期礫群・ 炉穴1・土坑群、古 墳時代前期・後期住 居跡7・土坑群、奈 良時代墳墓14・火葬 墓4 | 縄文土器（早期・中 期・後期）、土師器、 須恵器、骨磁器、石 器（尖頭器・剥片・ 菟石等）、垂飾、砥 石、刀子、鉄釘、貝 | | 縄文時代早期の礫群とそれ に伴う遺物包含層を検出した。 奈良時代の墳墓群は方墳か ら墳墓への流れを知る好資料 である。 | | |

千葉県教育振興財団調査報告第526集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 3

—袖ヶ浦市猪尻遺跡—

平成17年10月28日発行

| | | |
|---|---|---|
| 編 | 集 | 財団法人 千葉県教育振興財団 |
| 発 | 行 | 国土交通省関東地方整備局 千葉県国道事務所 千葉県千葉市稲毛区天台5丁目27番1号 |
| | | 財団法人 千葉県教育振興財団 千葉県四街道市鹿渡809-2 |
| 印 | 刷 | 大和美術印刷株式会社 千葉県木更津市潮浜2-1-10 |